

美食の島の赤龍帝 〈リメイク〉

マスターM

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めると転生の間にいた主人公・魔訶 零（まか れい）は神から抽選でハイスクールD×Dの世界にトリコの世界を持って転生する。

自身のフルコースを完成させる生活が始まった。
リメイク版です!!

目次

プロローグ	1
旧校舎のディアボロス	
原作開始	5
アーシアとの出会い	11
零の実力	16
狂人フリード	22
アーシアとの一日	28
新たな者達と新たな王の誕生	33
戦闘校舎のフェニックス	
フェニックス現る!!	42
修行	49
番外編コラボ	57
レーティングゲーム開始!!	65
レーティングゲーム決着!!	72
ゲームの後	78
使い魔をゲット!	84
龍達集合!!	91
グルメ界へ	97
月光校庭のエクスカリバー	
聖剣	104
聖剣VSナイフ	109
共同戦線	115
木場の過去	122

墮天使幹部襲来！	128
『騎士（ナイト）』の覚醒	133
『騎士（ナイト）』の決着	139
コカビエルVS零	143
赤と白の出会い	148
覚悟	153
ヘビーホール攻略	157
約束果たし	164
停止教室のヴァンパイア	
墮天使総督登場！	171
プール開き	177
授業参観	184
2人目の後輩	190
アドバイス	195
天使長と龍殺し（ドラゴン・スレイヤー）の聖剣	200
初めての・・・	204
会談開始	208
正体	215
奪還	220
紹介	225
赤と白の激突	229
駒王協定	236

プロローグ

「……ここは？俺は確か普通に寝たはずじゃ……」

『貴方は死んだのです』

「え？」

声がして振り向けば金髪の美女が立っていた。

『初めまして。魔訶まか零れいさん。私は貴方達で言う女神です』

「あのく俺は何で死んだのですか？」

『それは私の手違いです。本来貴方は100歳まで生きる予定でしたが、貴方の書類を別の人と間違え処分してしまったため貴方は死んでしまったのです。本当にすいませんでした……』

そう言い女神は零に頭を下げた。

「頭をあげて下さい。俺は気にしてませんから」

『何故ですか？貴方はもつと生きられたのですよ？どうして私を責めないのですか？』

「貴女が故意にした訳ではないですし、誰でも失敗する事はあるのでそれを責めるのは筋違いだと思いますから」

『……変わっていますね。普通ならここで怒鳴り散らす方が大半なのに貴方はそれをしない。器が大きい人ですね』

「俺はそんな器じゃありませんよ。所で俺は天国行きですか？それとも地獄行きですか？」

『いいえどちらでもありません。貴方はここ、転生の間にて転生してもらいます』

「転生って確か二次創作とかの転生ですか？」

『はい。そうです。因みに転生場所と特典の数、内容は全て抽選です。早速転生の場所のくじを引いて下さい』

零の前に箱が現れ零はくじを引いた。

『行先は「ハイスクールD×D」です』

「それってどんな世界なんですか？」

『簡単に言うと、天使、墮天使、悪魔などが存在している世界よ。次に特典の数と内容を引いてね』

再び箱が現れ特典の数のくじを引くと「1」だった。

「マジかよ・・・よりによって1は無いだろ…」

『大丈夫ですよ。特典内容には当たり、大当たりがありますから』

「じゃ最後!!」

最後に引いたのは「トリコ」だった。

『凄い！超大当たりよ!!』

「え、ええっと、トリコの能力が貰えるって事ですか？」

『いいえ、トリコの世界と能力よ』

「世界!？」

『ええ。ハイスクールD×Dの世界にトリコの世界を入れ、貴方はトリコ達の能力を得るわ』

「それって、トリコの嗅覚や技、ココの毒に電磁波、サニーの触覚、ゼブラの聴覚が使えるのですか？」

『ええ他にも小松シェフや節乃の調理技術、G7の味覚などトリコの世界の能力全て使えるわ』

「それは超大当たりですね。でも能力全て使えるからと言って我流は少し厳しいと思います」

『確かにそうね。ならお詫びって事でアカシアとフローゼ、アカシアの三弟子と節乃、それと珍師範と千代、二代目メルクを補佐に着けるわ』

「ありがとうございます」

『じゃそこのサークルに入って転生を始めるわ』

「はい」

零がサークルに入ると女神は呪文を唱え始め零の体は粒子となって消えた。

『貴方の未来に幸福を』

零 side

「此処は？」

零が目を覚ますと何処かの島だった。

「ん？手紙だ」

上から手紙が落ちて来て零は手紙をみた。

『この手紙を読んでいるって事は無事に転生出来たみたいね。貴方が今いる島はトリコの世界を凝縮した世界よ。貴方が今いる所はトリコで言う人間界で、柵から先がグルメ界よ。因みに貴方の今の年齢は7歳よ。原作開始まで10年あるから能力の修行をしてね。島の家地下にトレーニング室があるからまずそこで修行してね。アカシア達は先に貴方の家に居るわ。事情は分かっているから安心してね。最後に貴方のパートナーとなる動物の卵を家に置いているわ、何が生まれるかは生まれてからのお楽しみよ。新たな人生頑張ってね。女神より』

手紙を読み終わると手紙は燃えた。

「先ずは修行だな。最低でも四天王の力は必要だな、ん？」

零は左腕に強い力を感じ意識を集中させ目を瞑った。

『ほう、早速俺の存在に気付いたか。今代の宿主は期待できそうだ』

零が目を開けると赤い巨大なドラゴンがいた。

『俺は赤龍帝ドライブだよろしくな相棒』

「俺は魔訶 零だ。よろしくドライブ」

『相棒の事は記憶を見て知っている。今いる島が何処なのかもな』

「あードライブそのことは・・・」

『安心しろ誰にも言わないさ』

「サンキューな。そうだお前の事教えてくれよ宿主ってどういう事だ？」

『説明すると・・・』

ドライブグの説明によると悪魔、堕天使、天使の戦いに宿敵アルビオンと乱入し協力しあつた三勢力によつて『セイクリッド・ギア神器』に封印され、危険度が高い『ロンギヌス神滅具』の『ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手』となつた事。能力は10秒毎に自身の能力を倍にすること、また『バランス・ブレイク禁手』に至れる可能性があると色々教えてくれた。

「なあドライブグお前の力を使つて、俺のフルコースを完成させてもいいか?」

『そのフルコースとは何だ?』

「人生のフルコースで、前オードブル、菜スープ、魚料理、肉料理、メ主菜、サラダ、デザート、ドリンクの事だ。折角美味しい食材が沢山あるのだから揃えたいだろ?」

『良いだろう、俺の力で相棒のフルコースを完成させてみる』

「よし早速修行だ!!」

零の新たな人生、フルコースを完成させる生活が始まった。

旧校舎のディアボロス 原作開始

零side

転生から10年たった。最初の3年間はひたすらにトレーニングに打ち込んだ（アカシアと三弟子にいじめられながら）。今では島の主と言っても過言ではない程強くなった。転生の時に貰った卵が孵り白い九尾の狐が生まれた、部屋にあった『リドルチャプター』で調べたところ『ナインフォックス』と判明した。名前は白い雪みたいなので『スノー』と名付けた今の捕獲レベルだと5000と高い。

それとこの島は『グルメアイランド美食の島』と名付けられた。突如現れた島を調査しに来た人間が猛獣に襲われながら持ち帰った食材を食べた結果そう名付けられた。何人も人間が美味の食材を求めて来るが海側からしか来れない。上空にはマザースネークが通って出来た規格外サイクロンがある為だ。上陸しても猛獣に食べられる事が大半であった。

グルメアイランドは特殊な磁場があり衛星からの情報が入らないため実際に入らないと把握できない。

また悪魔も墮天使も来たが同じく猛獣に襲われた。今では超危険区域に指定されている。

そしてフルコースは……

『相棒残り4つだな』

そうドライグの言う通りフルコースは4品以外完成した

オードブル（前菜）【？】

スープ 【センチリースープ】

魚料理 【アナザ】

肉料理 【ジュエルミート宝石の肉】

主菜（メイン）【？】

サラダ 【？】

デザート 【虹の実】

ドリンク 「？」

以上だ。因みにトリコの世界のアカシアのフルコースは、この島のフルコースになっておりGODとセンターC以外捕獲出来た。そしてこの島の住人は俺、ドライグ、スノー、アカシア、フローゼ、一龍、次郎、三虎、節乃、珍師範、千代、メルク以外にもう2人いる。1人は：

ネオだ。

旅に出る時に発見した。ネオを見たアカシアは驚き、また一緒に居られることに喜んだ。原作と違い喋れる。

そしてもう1人が・・・

「ん。我、戻った」

ウロボロス、ドラゴン

無限の龍神のオーフィスだ。5年前【八王】の一角【猿王バンビーナ】との戦い、その時に禁手に至った。その後自分と似た力を感じたと言いつ零の前に現れ、グレートレッドを倒して欲しいと言ってきた。零は拒否しオーフィスをグルメアイランドを案内し料理も振舞った。「いいかオーフィス。この世界にはお前が知らないものが沢山ある。それを知らず眠るだけなんて勿体ないだろ？だったら俺達と共に色んな事を知らないか？」

零の言葉に頷き、今は基本グルメ界で過ごしている（偶に八王と戦ったり、遊んだりしている）

「さて今日は何をしようかな」

零が悩んでいると手紙が落ちてきた。

『もう直ぐ原作が始まります。貴方には駒王町に有る駒王学園に編入してもらいます。駒王町の家はこの手紙の二枚目に記しているので裏のチャンネルを使って行ってください。では物語を楽しんで下さい』

一枚目の手紙が燃え残ったのは駒王の地図だった。

「いよいよ原作開始の様じゃな」

「ああ今までオヤジ達に鍛えてもらったから、何があっても大丈夫だ」「ワシ等はグルメ界の調査に行っておる。色々と混ざっておるからまだ把握出来ない場所もあるしの。気を付けて行ってこい」

「おう行ってくる。ネオ、スノー、オフィス俺とオヤジ達が留守の間は頼んだぞ」

「任せろ」

「コーン」

「ん。分かった」

そう言い零は裏のチャンネルを使い駒王町の自宅に向かった。

駒王町・自宅

「これが制服か」

零は制服を確認し家の中をみた。3階建ての地下10階までであり地下のスペースのほとんどが島の食材を保存、調理するスペースだった。

翌日

「今日は編入生を紹介する。入って来い魔訶」

「はい」

零が教室に入ると女子達の黄色い声援が響いた。

『『『キヤアアアアア!!イケメン!!』』』

零の容姿はトリコで髪の色は黒で髪は後ろで少し髪留めで止めている。

「魔訶零だ。よろしく」

その後学校の説明を受け授業を受けた。

放課後

「あの魔訶 零君ですか?」

声を掛けてきたのは同年代の黒髪の少女だった。

『相棒こいつは』

(墮天使だな)

『どうする?』

(暫く様子を見る)

『分かった』

「そうだが君は?」

「私、天野夕麻です。突然ですが私と付き合ってください!!」

「いいぞ。明日は土曜日だしデートするか?」

「はい!」

「じゃ10時に駅前に集合で良いか?」

「はい楽しみです!」

連絡先を交換して別れた。

『明日一日様子を見るのだな?』

「そういう事」

翌日

待ち合わせの30分前から零は待っていた。

『何故そんなに早いのだ?』

(仮とは言えデートだ。こういう待ち合わせは男が先に来ているのが当たり前なんだ)

『相棒は律儀だな』

そう話していると夕麻が現れた。

「ごめん待った?」

「いや今来たところだ」

『30分前から待っていたけどな』

ドライグの言葉を無視して2人はまずショッピングに向かった。夕麻に似合いそうと思えばネックレスを買った(0が軽く7桁超えた。零は女神から一生遊んで暮らせる大金を貰っている)

ショッピングを終えると12時になっていて零は高級レストランに入った。

「れ、零君ここ超高級レストランよね?大丈夫なの?」

「ん?ああこの店は知り合いが経営しているんだ。俺は顔パスで入れるから大丈夫だ」

そうこの店そして世界中の高級店の殆どが節乃と千代がオーナーなので零達は顔パスで入れるのだ。

「この料理は一流だから期待しろよ」

そう言っている間にフルコースが始まった(食材は全てD×D世界

の物。グルメアイランド産はない)

昼食を食べた後はゲームセンターなどを回り夕方まで遊んだ。昼食を食べた後からずっと2人は手を繋いでいた。そして公園にやってきて2人揃ってベンチに腰掛けた。

「今日はありがとう零君！零君のおかげで楽しかったよ」

「それは良かった」

「・・・ねえ零君お願いがあるんだけど・・・」

「ん？なんだ？」

「・・・し、しん・・・」

「まだ殺していなかったのかレイナーレ」

「ボギー様・・・」

「アンタか夕麻に俺を殺させようと堕天使は」

「!? 貴様気づいていたのか!!?」

「零君・・・」

「ああ、最初からな。さて夕麻を利用したんだ、覚悟はいいな？」

「人間風情が調子に乗るなよ!!」

ボギーは光の槍を投げた。

「逃げて零君!!」

夕麻は咄嗟に叫んだ。

「避けるまでもねえよ。フライングナイフ!!」

フライングナイフは槍を破壊しボギーの左の羽を切った。

「ギャー！私の羽が!!もう許さんぞ人間め!!!」

再び槍を作ろうとしたら魔法陣が現れ紅髪の少女が出てきた。

「私の管理する土地で勝手な事は許さないわよ堕天使さん達」

「その紅髪、グレモリーの者か!?!」

「ごきげんよう。グレモリー家次期当主のリアス・グレモリーよ」

「此処は引こう。行くぞレイナーレ」

「はい。零君」

「また会おうな夕麻」

「うん・・・」

ボギーとレイナーレは転移した。

「少しいいかしら？」

「何だ？」

「貴方何者？」

「その話はまた今度で頼む」

「そう。なら月曜日に使いを出すわ」

「わかった」

「ではごきげんよう」

そう言い転移していった。

「なあドライブこれってもしかして、原作が始まったのかな？」

『恐らくそうだろう』

「ふうくさて気合入れていくか」

零は自宅に戻りゆっくり休んだ。

アーシアとの出会い

月曜日・放課後

『キヤー！木場君!!』

「廊下が騒がしいな・・・」

「失礼します。魔訶零君はいますか？」

「俺が魔訶零だ。零で良い」

「僕は木場祐斗。僕も名前で良いよ零君」

「そつかよろしくな。それで用件は？」

「リアス・グレモリー様の使いだよ」

「お前が使えか、案内頼む」

そう言い2人は教室を出た。

「キヤー木場君と魔訶君よ!!」

「駒王の二大王子様よ!!」

「木場君×魔訶君」

「違うわ。魔訶君×木場君よ!」

・・・俺は何も聞いてない聞いてない・・・

「此処だよ」

木場に連れてこられたのは旧校舎の部室前。名前は「オカルト研究部」と書いていた

「部長。魔訶君を連れてきました」

「ええ、入って来て頂戴」

「失礼します」

入室の許可を貰ったので入って行った。中に入ると土曜にあったリアス・グレモリーと大和撫子のような女性と小柄な女性がいた。

「ようこそオカルト研究部へ。私達は貴方を歓迎するわ——悪魔としてね」

「粗茶です」

「ああ、すまない」

零は大和撫子の女性―姫島朱乃からお茶を入れてもらった。

「単刀直入に言うわ私達は悪魔なの」

「知っている、それに土曜の奴らは堕天使だな」

零がそう言うのと全員が驚いた。

「貴方私達悪魔の事や堕天使の事を知っていたの!？」

リアスが零に問い詰める。

「ああ俺の神器が教えてくれた」

「貴方神器持ちなの!？」

「ああ見るか？」

「ええお願い」

(ドライグ禁手で行くぞ)

『分かった』

「禁手!!」

『Welsh(ウエルシュ) Dragon(ドラゴン) Balanc
e(バランス) Breaker(ブレイカー)!!!』

零は赤龍帝の鎧(ブーステッド・ギア・スケイルメール)に覆われ
た。

「それはまさかロンギヌスのブーステッド・ギア!?!しかも禁手なん
て……」

再びリアス達全員が驚いた。

「猿王と戦っていたら禁手出来たんだ」

「猿王?」

「グルメアイランドにいる8体の王の1体だ」

「グルメアイランド!?!貴方グルメアイランドから戻ってこれたの!?!」

「戻って来たと言うより、元々グルメアイランドに住んでたからな。

今では俺が島の主と言っても過言ではない」

「……ねえ魔訶零君いえレイと呼んでもいいかしら?」

「ああ良いぜ」

「それじゃレイ、私の眷属にならない？」

「悪いが断る」

「理由を聞いてもいいかしら？」

「まず俺は人間のまま、最強になりたいんだ」

「今でも最強だと思うよ？ 零君はグルメアイランドの主なんだろう？」

零が最強になりたいと聞き祐斗が疑問に思った事を聞いた。

「俺には師匠みたいな人達がいるんだ。その人達に俺はまだ一度づつしか勝ててない。今まで負けた分を勝たないと最強とは言えないからな」

「・・・そう。そう言う事情があるなら仕方ないわね」

「あっさり引くんだな。無理にでも眷属にすると思ってたが」

「無理やり眷属にしても意味がないの。それに貴方なら私達を簡単に倒せるでしょうっ・・・」

「まあ出来るな」

「でも、私達の正体を知ったのなら、部員として入部してもらおうよ」

「ああ良いぜ。戦う事があれば協力する」

「その時はお願いな。改めて紹介するわね、佑斗」

「はい。改めてよろしく零君」

「・・・1年生。塔城小猫です。よろしくお願います魔訶先輩」

「よろしく小猫。俺の事は零で良いぜ」

「・・・わかりました」

「3年生。姫島朱乃ですわ。一応研究部の副部長を兼任しております。今後よろしくお願いますわ」

「そして私が彼らの主であり、悪魔でもあるグレモリー家次期当主のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵よ。よろしくレイ」

「ああよろしくなリアス」

「私の事は部長と呼びなさい」

「拒否する。そう言うのは慣れていないんだ」

「仕方ないわね、でも公の場所では弁えてね」

「善処する」

それから数日学校も終わり帰路を歩いていると。

「きゃあ」

「ん？」

悲鳴が聞こえ振り向くとシスターらしき者が転んでいた。

「大丈夫か？」

「は、はい大丈夫ですう」

零はシスターに手を差し出しシスターは零の手を握って起き上がった。その瞬間強い風がシスターのベールが飛ばされたが触覚で捕まえた。

「ほらよ」

そのシスターは金髪をなびかせていた。

「あ、ありがとうございますう。私アジア・アルジェントで言います」

「俺は魔訶零だ。零でいいぜ」

「私の事もアジアでいいですよ零さん」

「分かった。旅行か？」

「いえ、違うんです。実はこの町の教会に今日赴任することになりました」

「この町の教会って町はずれにあそこか？」

「知ってるのですか!？」

「ああ案内しようついて来い」

「ありがとうございます。私日本語話せなくて、道行く人皆さんに言葉が通じなくて困ってたんです・・・」

「仕方ないだろ外国にいたんだからな。これから少しずつ慣れていったらいいよ」

「ありがとうございます零さん」

お礼を言うアーシアの顔は誰もが見惚れそうな笑顔だった。

「教会はこっちだ行くぞ」

「はいー!」

教会に行く途中で公園から子供の泣き声が聞こえてきた。見てみると膝を怪我していた。それを見たアーシアは子供に近寄った。

「大丈夫? 男の子ならこの位の怪我で泣いては駄目ですよ」

そう言いアーシアは子供の頭を優しく撫ぜた後、怪我をした膝に当たった。すると手のひらから淡い緑色の光が発せられ、傷が塞がった。

(ドライグこれも神器か?)

『恐らくそうだろう』

(治癒の神器まであるとは、驚いたな)

零はドライグに今見た事を問いかけた。

「ありがとう! お姉ちゃん!」

「ありがとう、お姉ちゃん。だって」

零が通訳するとアーシアは嬉しそうに微笑んだ。そのまま見送って目的の教会まで送り届けた。

零の実力

「二度と教会に近づいちゃダメよ!!」

零は今リアスに怒られていた。

金髪のシスター・アーシアと出会い赴任先である教会まで送り届けた事はリアスの使い魔が目撃しており、その報告を受けたリアスは零が部室に入った瞬間注意した。

「貴方は人間だけど私達悪魔と関わってるのよ。最近の悪魔祓い（エクソシスト）は悪魔に関わったと言うだけで殺されるのよ！兎に角もう協会には近づかない事分かったわね!」

「善処する」

「あらあら、お説教はすみましたか?」

リアスの説教が終わったタイミングで朱乃が話しかけてきた。

「どうしたの朱乃?」

「大公からはぐれ悪魔の討伐依頼が届きました」

深夜オカルト研究部のメンバーは町はずれの廃工場の近くに来ていた。

「レイ貴方には悪魔の駒（イーヴィル・ピース）の特性を理解してもらおうわ」

「悪魔の駒、確かチェスに見立てていたな?」

「ええそうよ。これから行うはぐれ悪魔退治の時にレクチャーするわ。だから手出しは無用よ」

「分かった。ん?この匂いは・・・」

「血の匂い・・・」

零の鼻が反応した後には小猫も気づいたのか服の袖で鼻を抑えた。

「不味そうな匂いだ・・・でも、美味しそうな匂いもするわ・・・甘いかしら?それとも、苦いのかしら?」

奥から上半身が女性が下半身が獣が現れた。

「はぐれ悪魔バイサー、貴女はグレモリー公爵の名において、消し飛ばしてあげるわ!」

「小娘がその紅い髪のように、貴様の体を鮮血に染めてやるわ!!」

「雑魚程洒落がきいた冗談を言うものね。祐斗!」

リアスが祐斗の名を呼ぶと佑斗はかなりのスピードでバイサーに近づいた。

「祐斗の駒は『騎士(ナイト)』特性は見ての通り凄まじいスピードよ。それと祐斗の武器は剣による攻撃よ」

話している間に祐斗はバイサーを切っており、小猫がバイサーに近づくとバイサーは小猫を踏み潰そうとした。

「小猫は『戦車(ルーク)』特性はシンプルで、馬鹿げた防御力と力よ」
「・・・ふっ飛べ」

文字通り飛んでいき壁にぶつかった。

「朱乃」

「はい部長」

朱乃はバイサーに近づき腕を挙げると雷が落ちて来てバイサーに直撃した。

「あらあら、まだ耐えれますかじやこれはどうでしょう」

「と言い更に言い笑顔で雷を落とす。」

「朱乃は『女王(クイーン)』キング以外の特性を持つ無敵の副部長よ。後究極のSよ」

「なんとなくそんな感じはしてた」

バイサーは最早虫の息である。

「朱乃も面白いわ」

「あら残念ですわ」

朱乃は残念そうにバイサーから離れた。

「最後に言い残すことは?」

「殺せ・・・」

「そう、なら消えなさい!」

リアスは魔力を放ちバイサーは跡形もなく消し飛んだ。

「これがリアスの消滅の魔力か」

「うんそうだよ。その一撃を食らえばどんな者でも消し飛ばされる、滅亡の力を有した公爵家のご令嬢。部長は若手悪魔のなかでも天才

と呼べる程の実力の持ち主だよ」

「別名『紅髪の滅殺姫（ルイン・プリンセス）』と呼ばれる程の方なのですよ」

零がリアスの消滅の魔力の事を言うと祐斗が答え、朱乃が続いた。

「さて次はレイの番ね」

「俺？」

自分の番と言われ零はビックリした。

「貴方はブーステッド・ギアを使わず何処まで強いか見てみたいのよ」
「そう言う事か。今なら夜食にピッタリな奴が動く時間だな。早速行くぞ」

零は裏のチャンネルを発動させた。

「この中を通れば直ぐにグルメア일랜드着く」

そう言い零を先頭に入って行った。

美食の島（グルメア일랜드）

「此処がグルメア일랜드・・・」

「凄い所ですわね」

「・・・いい匂いがします」

「あっちから何か来るよ」

祐斗がそう言うて全員がその方角を見ると白い九尾の狐が走って来た。

「俺の家族のナインフォックスのスノーだ」

「コーーーン」

「スノーリアス達を乗せてやってくれ」

零に言われスノーは頷き、膝を折ってリアス達を乗せた。その際尻尾が椅子代わりになった。

「零君何を取りに行くの？」

「捕獲レベル5の“ガララワニ”だ」

「零先輩捕獲レベルとは何ですか？」

祐斗から何を取りに行くか聞かれガララワニと答えた零。小猫が聞いたことない単語に反応した。

「捕獲レベルとはその獲物を仕留める難度の事だ。捕獲レベル1でプロのハンターが10人がかりでやっと仕留められるレベルだ。悪魔や墮天使でも10以上の猛獣は厳しいと思うぞ。因みにスノーの捕獲レベルは5000だ柵の向こう側でも十分強いぞ」

「その柵とは何ですか?」

「あそこに見える柵があるだろう?あの柵の向こうは捕獲レベル100以上の猛獣しかいない。八王なら捕獲レベルは10000あるぞ。あと捕獲レベルは見つけにくさも含まれている」

「・・・凄いわね。貴方がブーステッド・ギアを使うのは八王クラスとして、貴方の捕獲レベルは10000を超えているのね」

「そうなるな、着いたぞ」

話しているとガララワニが住んでいる所に着いた。

「ギュアアアアア!!」

着いてすぐガララワニが出て来て雄叫びをあげた。

「お、ラッキー早速のお出ましか」

「なにアレ、ワニじゃなく恐竜じゃない!!」

リアス達はガララワニをみて少し怯えた。

「さっさと終わらせる」

チャキイン、チャキイン

「この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます。フォーク!!」
ズボア

零は両手を擦り合わせ金属音を鳴らした後合掌し、飛びついて来たガララワニの首に左手を突き刺し、持ち上げた。

「ナイフ!!!」ズバン

今度は右手の手刀で首を切り落とした。

チャキイン!チャキイン!「ごちそうさまでした」

もう一度両手を擦り合わせ金属音を鳴らし、そして再び合掌した。

「・・・凄いです」

小猫の感想は全員の代弁だった。

その後島の家にいきガララワニを調理して食べ終わるとリアスが質問してきた

「レイ貴方の力は他にあるの？」

「ああ。俺の嗅覚にさっきのナイフとフォーク、釘パンチに電磁波、毒、触覚、聴覚、声、それに食義と食没だな」

「結構あるのね毒ってどういう事？」

「俺の体には毒の抗体が数百種類あってその毒が混合し新たな毒が出来ているんだ言わば毒人間だな。釘パンチ、触覚と声は今度見せてやる。食義ってのは食の作法だその奥義が食没だ。食義によって俺の技は元の五十分の一の消費カロリーで繰り出せる。また調理技術にも使えキャベツ一玉の千切り10秒もかからん。奥義の食没は数か月分の食料を食った分だけ体内に溜め込める。何もしなければ数か月は飲まず食わずで生きていける。まあ理論上ほぼ無限に食料を身体にチャージ出来る」

『・・・』

零の話を聞いて全員唾然とした。

「レイ貴方はどうしてそんなに強いのか？」

「一番の理由は俺の細胞だな」

「細胞？」

「俺の細胞はグルメ細胞と言って、美味しい物を食べれば食べる程強くなるんだ。グルメ細胞の注入方法は二通りある。一つ目が「摂食注入」メリットは安全でデメリットは時間がかかり適合しない場合がほとんどだ。二つ目が「直接注入」メリットは適合の時間が早いこと、デメリットは適合しなかったら化け物化するか最悪死ぬ」

「僕達が食べたガララワニにグルメ細胞が入っているのかい？」

「ガララワニには入っていない。グルメ細胞の根源はこのクラゲ“グルメクラゲ”だお浸しだが食べるか？直接注入ではないから化け物にはならないぞ」

零がそう言うのと全員お浸しを食べた。

「これからは俺が飯を作るから適合し細胞のレベルが上がれば俺の電

磁波で教えてやる。その内俺のフルコースをうちそうしてやるよ！
4つ埋まっていないがな」

「フルコース？」

「人生のフルコースで、オードブル（前菜）から始まり、スープ、魚料理、肉料理、主菜（メイン）、サラダ、デザート、ドリンクの事だ。俺のフルコースはスープ、魚料理、肉料理、デザートしか決まっていない。残りの4つはこれから探ささ。まあ幾つか保留にしている候補もあるがな。リアス達もグルメ細胞に適合すればフルコースを揃えたらどうだ？必要なら手伝うぞ」

「その時はお願いね」

「お願いしますわ」

「よろしくね」

「よろしくお願いします」

零が手伝うと言うと、リアス、朱乃、祐斗、小猫が零に頼んでこの日はグルメアイランド零の家に泊まった。

狂人フリード

「ん〜朝か」

深夜にはぐれ悪魔の討伐を終え、零の実力を知るためガララワニを捕獲し零の力を説明した翌朝。零は目を覚ました。

「さて朝食を取りに行くか」

零は島の上空に向かった。

リアス side

深夜にはぐれ悪魔バイザーの討伐を終え、レイの実力が見たくつてお願いするとグルメアイランドに案内してもらいそこで恐竜の様なワニと戦った。いえアレは戦いじゃなくて一方的な狩りね。レイの力は未知数だと思った。巨大なワニを素手で仕留めるなんてマネできないと思った。

しかもまだレイには使える技があるみたいだし。

「アレ？レイは？」

レイ以外皆起きていて食堂に集まっていた。

「それが部屋に見に行ったのですがいなかったです」

祐斗がそう言うと、朱乃と小猫も見えていないと言った。

「零なら朝食の食材を採りに行ったぞ」

「！！！！」

突然声がして驚いて振り向くとミイラのような人物がいた。

「貴方は誰？」

「俺はネオ。零の同居人だ」

「まさか貴方がレイの師匠？」

「いや零の師匠達なら柵の向こうに調査しに行っている。それと俺は人ではない。グルメ細胞の悪魔だ」

え？グルメ細胞って体にあるものじゃないの？それが外に出てい
るなんて・・・

「混乱しているようだな、説明すると・・・」

彼ーネオの話聞いた私達は空いた口が塞がらなかった。まさか星をも食らう程の食欲を持っていたなんて。今はレイに施しても

らって改心したようだけど怖いわね。

「俺はもう昔みたいにむやみやたらと暴れないさ。今はこの島を護るよう零に言われているからこの島を護る事に専念している。どうやら戻って来たな」

ネオがそう言うとき大きな袋を下げたレイが帰って来た。

「悪い遅くなった。直ぐ用意する」

レイはそう言い調理を始めた。

リアスside out

零side

今日の朝食は野菜尽くしだ。只の野菜ではない標高数万メートルの雲の上にある天空野菜畑『ベジダブルスカイ』の野菜達だった。

調理は殆どしていないこの野菜達は生のままでも十分に美味しいからな。ただオゾン草は少し特殊な調理をした。

「さあ出来たぞー！」

「これは野菜？でも匂いは焼いたお肉や魚に負けてないわね」

リアスがそう言うとき全員が頷いた。

「この野菜たちは標高数万メートルの雲の上にある天空野菜畑『ベジダブルスカイ』の野菜達だ。此処に行くとき見渡す限りの野菜のジュータンになっている野菜天国だ。また此処の野菜を食べた者は野菜主義者(ベジタリアン)になる程だ。そしてこれが野菜の王様“オゾン草”だ」

オゾン草を見て全員早く食べたそうになったので・・・

『この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます』

全員で合掌し何時もの言うて食べ始めた。

「この大根凄く瑞々しいよ！さっぱりシャキシャキだけどおでんの出汁が染み込んだように深い旨みが後からゆっくり顔を出してるよ」

「このキュウリも凄いですわ。味が濃厚でそのままでも十分に食べられますわ。触感もカリカリと爽やかな噛みごたえでやみつきになってしまいますわ」

「パクパクパクパク、モグモグモグモグ」

祐斗と朱乃は食べた野菜の感想を言い小猫は無言で次々と野菜を食べている。

「このオゾン草とても美味しいわ」

ん？オゾン草を食べた瞬間リアスの電磁波が強くなったな。まさか一日で適合するとは、悪魔の体質なのか？祐斗達も適合していると思っただ方がいいな。

「リアス、オゾン草を食べた瞬間お前の電磁波が強くなったぞ。恐らく全員適合したと思う」

「確かにオゾン草を食べた瞬間に脈打ったわ。これが私の適合食材って事？」

「ああ、そうだ」

「そう。決めたわレイ、このオゾン草を私のフルコースのサラダにするわ!!」

リアス フルコースメニュー

オードブル（前菜）〔？〕

スープ 〔？〕

魚料理 〔？〕

肉料理 〔？〕

主菜（メイン） 〔？〕

サラダ 〔オゾン草〕

デザート 〔？〕

ドリンク 〔？〕

「祐斗、朱乃、小猫も自分が気に入った食材があれば遠慮なくフルコースに入れるよ？必要なら俺が取って来てやる」

そう言い夜の悪魔家業にむけ零は英気を養える料理を作った。

夜中コンビニに行こうと夜道を歩いていると零の鼻がある匂いに反応した。

「っ!?これは血の匂い！」

零は急いで血の匂いがする家に入った、リビングに入ると壁に死体が貼り付けられていたしかも上下逆さまで、切り刻まれた体からは臓器らしきものが傷口からこぼれていた。壁の横には血で文字が書いていた。

『悪い事する人はお仕置きよー!』って聖なるお方の言葉を借りたものさ」

「これはお前の仕業か『悪魔祓い（エクソシスト）』

突然こ声にも驚かず振り向きながら相手を確認する零。そこにいたのは白髪の神父らしい恰好をした同じ歳位の男がいた。

「んーんー。イエース！俺っちがやりました。俺の名はフリード・セルゼンとある悪魔祓いに所属している末端でございますですよ」

「・・・これはお前がやったのか？」

「イエース。俺が殺っちやいました。こいつは悪魔を呼び出す常習犯だったし、殺しても文句はないしょ」

ダメだ怒りが抑えきれない。野生の勝負には善も悪もなくてただ食こと、そこに恨みはない、だが目の前のコイツはただ人を殺す事に快感をもつクズ野郎だ「無益な殺生」に反するコイツは許さねえ。

「さてお前さんから悪魔の匂いがするな。悪魔と関係を持ったお前さんも愉快なアートにしてあげますよー」

そう言い奴はビームサーベルと拳銃を取り出した。そしてビームサーベルで斬りかかって来た。

「ナイフ!!」ズバツ

零はナイフで応戦しビームサーベルを切った

「なっ！素手で光の剣を切っただど!?!ならこれでどうだ」

次に拳銃を撃って来たがフォークで止めた。フリードはその隙に後退した。

「い、いやあああああつー!」

追撃しようとしたら悲鳴が聞こえ振り向くと町で出会ったシスター、アジアがいた。

「アジア何故お前が此処に？」

「え？レイさん!？」

「なになにアーシアちゃんその悪魔と関係を持っている人と知り合い？」

フリードは再び拳銃を零に向けた。アーシアは零の前に立ちフリードに零を見逃すようお願いしたがフリードは怒りアーシアに向けて拳銃を発砲した。

「チツ音壁」

アーシアの前に音壁を作りアーシアを拳銃から守った。

「アーシアの前で殺しを見せるわけにはいかねえから」3連で我慢してやるよ。それと俺の名を覚えておけ。俺は魔訶零だ。3連釘パンチ!!」

「ぐっ！げーがはっ！」

フリードは釘パンチを受け家具にぶつかりながら壁にぶち当たった。

決着が着くと床が青白く光り魔法陣が形成させた。

「これはグレモリー眷属のか」

「零君助けに来たけど終わってたみたいだね」

「ああ、その神父は捕獲レベルは精々3位の雑魚だった」

祐斗の言葉にそう返すとリアスが謝ってきた

「レイ、ごめんなさいね。まさか『はぐれ悪魔祓い』の者が訪れるなんて計算外だったの」

「気にするなこの程度、グルメアイランドの猛獣に比べたらなんともない」

「！部長、この家に墮天使らしき者達が複数近づいていますわ」

何かを感じたのか朱乃がそう言った。

「数は10、捕獲レベルは2程度だ。先に戻ってな俺は墮天使共を片付けてからアーシアを連れて逃げる」

更に零は電磁波で敵の数と強さを見てリアス達に先に帰るよう言った。

「分かったわ、あなたの事だから無事に帰ってくると思うけど、無茶はしないよね」

「無茶する相手でもない」

零はリアス達が転移したのを確認して墮天使達にアルティメットルーティーンでリアルなイメージを見せ気絶させてからアーシアを連れ駒王の自宅に向かった。

アーシアとの一日

『明日悪いが学校も悪魔の活動の手伝いも休むな』

『あのシスターの事ね。仕方ないわね一日だけよ明後日からはちゃんと来てもらうから』

『ああすまねえ。今度極上の飯を作るからそれでチャラで頼む』

『しようがないわね、それで手を打ってあげるわ』

『恩に着る』

零はアーシアを連れ駒王町の自宅に戻り、リアスに明日休むと連絡した。

「つて事でアーシア明日出かけるか？」

「いいのですか？」

「あありアスには許可貰ったしな。明日はこの町を案内しよう」

「ありがとうございます！」

「今日はもう遅いし明日に備えて眠るか」

「はい。明日が楽しみです!!」

「それじゃアーシアはこの部屋を使ってくれ」

アーシアを空き部屋に案内してこの日は眠りについた。

翌朝

朝食には昨日グルメアイランドから持ってきたベジタブルスカイの野菜でスープを作り、目玉焼きとトースト、サラダの献立となった。

「レイさんこの野菜のスープとっても美味しいですう!!」

「それはグルメアイランドの野菜だ」

「え!?!レイさんグルメアイランドに行ったのですか!?!あそこは危険だと皆さんおっしゃってましたよ!?!」

「あーアーシアには言ってなかつたけど、俺元々グルメアイランドに住んでいたから。今では島の主って言っても過言ではないぞ」

「レイさんってお強いんですね。あの、グルメアイランドの事聞いてもいいですか?」

「ああ良いぞ。何が聞きたい?」

零はアーシアにグルメアイルランドの事を教えた。アーシアは絵本を読んでもらっている子供みたいに目を輝かせて零の話聞き逃さないよう聞いた。

気付けは昼前になっていた。零は話しすぎたと反省しアーシアを連れ町の案内を始めた。

「あうう・・・」

昼はハンバーガーにしようかとハンバーガーショップにしたが、アーシアはこの手の店が初めてだったらしく困っていた。零が注文すると言ったが「大丈夫です。一人で何とかしてみます」とアーシアが言ったため見守っていたが、日本語が話せないので結局零が自分と同じ物を注文した。

「あうう、情けないです。ハンバーガーひとつ買えないなんて・・・」

「アーシアはまず日本語を話せる様にしないとイケないな」

「はい・・・」

そんな話をしながら空いてる席に向かってみると周りの男性客は皆アーシアを目で追っていた。まあ日本でシスターは珍しいし、何よりアーシアは可愛いから注目的になってしまう。

席に着き食べようとしたがアーシアは食べ方が分からず、零が実際に食べてみせた。またポテトも同じように食べて見せた。

ハンバーガーショップを出て次にゲームセンターに向かい、クレインゲームで日本発で世界的人気キャラクター『ラッチューくん』の人形を取りアーシアにプレゼントした。

その後夕方まで遊び2人は公園に来た。この公園は以前零と夕麻が訪れた公園である。

そこで零はアーシアの過去を知る『聖女』と祭られた少女の末路を。アーシアは生まれてすぐ両親に捨てられ教会に拾われる。八つの時に彼女は神器に目覚める。『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』という治癒の力を。それからカトリック教会の本部に連れていかれ『聖女』として担ぎ出された。だがアーシアには心許せる友人が一人もいなかった。

ある日転機が訪れる。たまたま自分の近くに現れた悪魔を治療してしまった。その光景を教会関係者が目撃し内部に報告した。今まで治癒の力は悪魔、堕天使に効果がないと言うのが常識だったためこの事によってアーシアは『魔女』の烙印を押され教会から追放された。(ふざけるなよ教会！勝手に聖女と祭り上げて悪魔を治癒出来るって分かった瞬間切り捨てるとは!!)

零はアーシアの話聞き教会に憎悪を抱いた。

「・・・きつと、私の祈りが足りなかったんです。ほら、私、抜けているところがありますから。ハンバーガーだって、一人で買えないぐらいのバカな子ですから」

「アーシア・・・」

「これも主の試練なんです。私が全然ダメなシスターなので、こうやって修行を与えてくれているんです。今は我慢の時なんです。お友達も何時か沢山出来ると思ってますよ。私、夢があるんです。お友達と一緒にお花を買ったり、本を買ったりして・・・おしゃべりして・・・」

アーシアは笑いながら、自分に言い聞かせるように話していたが、涙を溢れさせて耐えていた。そんなアーシアを見かねて零は優しくアーシアを抱き包み込んだ。

「アーシア、俺が友達になってやる。いやもう俺達は友達だ。だから泣くな」

「私と友達になってくれるんですか？日本語も文化も分からないし、何話していいかもわかりません」

「それ位俺が教えてやるよ。それが友達だ!!」

「・・・レイさん、ありがとうございます。こんな私ですがよろしくお願いします」

そう言いアーシアは頭を下げた

「出来たら私とも友達になって欲しいわ」

「夕麻」

声を掛けてきたのは夕麻だった。

「久しぶり零君」

「ああ久しぶりだな。あの墮天使から逃げてきたのか？」

「ええそうよ。彼等がアーシアにしようとした計画を聞いて飛び出てきたの」

「その計画の為に俺を殺そうとしたのか？いやそんな事よりもその計画の内容は？」

「自分が殺させそうになったのにそんな事で片付けるなんて・・・計画の内容はアーシアの・・・」

「見つけだぞレイナーレ。そしてアーシア」

夕麻が計画を言おうとしたら墮天使のリーダーボギーが現れた

「めんどくせえ奴が現れたな」

「ふん。人間風情が言ってくれる。レイナーレお前の部下は捕らえた。アーシアと共に戻らなければ部下たちの命はない」

ボギーの言葉は零をキレさすのには十分だった。

「お前もフリードと同じ穴のむじなか。ならここでお前を消せば解決だな。髪（ヘア）ロック!!」

零は髪留めを外し触覚でボギーを捉えた。

パアン

「ん？髪誘導（ヘアリード）！」

後ろからの銃弾も触覚で別方向に誘導した。

「これで俺を出し抜いたつもりか？だったら舐めすぎだ」

「誰も仲間は一人とは言っていないぞ」

「あ？」

パアン、パアン、パアン

今度は三方向から発砲してきたが零には向かわず・・・

「あっ・・・」

「俺に効かないから夕麻を狙うか。やはり三下だな。フライ返し!!」

夕麻に向かった銃弾は夕麻に向かう空中で止まり、撃たれた速度と変わらぬスピードで撃った本人たちのもとに返っていく。

「「ぎやああああ」」

「な、なんだ!?何が起きた!!?貴様は一体何者だ!!?」

「仲間を撃つくズに名乗る名はねえよ。アーシアの前だ、殺さずリア

スに引き渡す。ヘアノツキング!!」

「ぐっ!くそが・・・」

零は髪でノツキングをしボギーを捕らえた。

「後は狙撃手だな」

ボギー同様狙撃手達もヘアノツキングで捕らえた。すると魔法陣からリアス達が現れた。

「あら、終わったみたいね」

「今さっきな。リアスこそどうしてここに?」

「今回の事はこの堕天使達の独断だと思い、話を聞きに来ただけでも・・・貴方が捕らえてくれたおかげで余計な手間はかからないわね」
「事情なら夕麻に聞けばいい。夕麻さっき言っていた計画とはなんだ?」

事情を聞こうと、さっき聞けなかったことも聞こうと思いき零は夕麻に聞いた。

「ボギー様いえ、ボギーはアーシアの神器を抜き取って自分の力にしようとしたのよ」

『相棒、神器を抜き取られた者は死ぬ。その堕天使はその娘を犠牲に力を手に入れるつもりだったのだろう』

「やはりクズだな。力は自分で手に入れる物だ。人の力を奪うなど許しがたい。それでリアスこいつ等はどうする?」

「上に引き渡すわ。堕天使への外交カードとなるかもしれないし」
「ならそいつ等は任せる」

リアスは魔法陣を展開し堕天使達をその中に入れた。

「帰るぞアーシア」

「はい!!」

零がアーシアにそう言うと、アーシアは笑顔で頷いた。

新たな者達と新たな王の誕生

公園から帰ろうとする夕麻が声を掛けてきた。何でも仲間を助けて欲しいとお願いして来たのだ。零は了承し一同は教会に向かった。そしてエコーロケーション反響マップで夕麻の仲間3人を見つけ、夕麻達4人はグルメアイランドで匿う事にした。

最初は反対していたが零が自分か同居人のどちらかと共に居れば安全だといいい説得した。

アジアに話があると言いいリアスはアジアと眷属を連れ帰って行った。

「じゃ俺達も行くぞ」

そう言いい裏のチャンネルを発動させ中に入って行った。

美食の島（グルメアイランド）

「ねえ零君その能力なんなの？」

「これは裏のチャンネルっていつて特殊な移動方だ。これを使うには島のフルコースである、アナザ、ニユース、アースを食べないと発動できない。因みにアナザは俺のフルコースの魚料理だ」

詳しく知らない夕麻達に説明し、補足として捕獲レベルの事も説明した。

「零様これからどうするのですか？」

「零様!？」

急にカラワーナが零の事を様呼びしたことに零は驚いた。

「零様は姉様とウチらを助けてくれた恩人っすから、敬うのは当然っす」

「それで零様我々はどうすればいいのですか？」

カラワーナに続き、ミッテルト、ドーナシークも零のことを様付けした。

「歓迎会をしようと思ったが食材が足りないな・・・丁度いい食材を集めるついでに島を案内しよう。スノー!!」

「コーン!!」

スノーを呼ぶとスノーは裏のチャンネルを使い現れた。突然現れたスノーに夕麻達は怯えた。

スノーは夕麻達を警戒してか低く唸った。

「大丈夫だスノー。俺の命を狙ったのはこいつ等じゃない。仕方なく従っただけだから警戒するな。コイツはナインフォックスのスノー。俺の家族だ。スノー今日から夕麻達はここに住むからよろしく頼むな?」

「・・・コーン」

零の言葉に頷いた。

「夕麻達はスノーに乗れ、その方が安全だ」

スノーは膝を折り、夕麻達を乗せ尻尾を椅子代わりにした。

その後様々な食材を捕獲し、零の家に戻り豪華な歓迎会が行われた。因みに夕麻達にもグルメクラゲのお浸しを食べさせ、翌日適合していることが分かった。

翌日

零は朝早く部室に来ていた。

「あら?早いわねレイ」

「ああ、少し話がしたかったからな。昨日はありがとうな、俺に夕麻達を任せてくれて」

「フッフ。貴方だからこそ任せたのよ。それに上には主犯を連れて行けばいい事だし」

「そう言ってもらえるとありがたい。所でアジアと昨日何を話したのだ?」

「私の眷属に誘ったのよ、振られちゃったけどね。その理由は貴方よレイ」

「俺?」

「ええ。貴方が眷属ならなるって言っていたの」

「だが俺は眷属ではないから眷属にならなかつたって事か」

「ええそうよ。それとアジアもこの学園に通ってもらうことになったのよ。因みに貴方と同じクラスよ。今日から転校するから彼女の

フォローよろしくね」

「ああ！任せろ!!」

零がそう宣言すると、駒王の制服を着たアジアが入って来て、裕斗達も部室にやって来た。

「さて、全員が揃ったところでささやかなパーティを始めましょうか」
そう言いリアスが指を鳴らすと、大きなケーキが出現した。

「レイには負けるけど私の手作りよ。味わって食べてね」

リアスは照れくさそうに零に言った。

「ああ感謝するぜリアス！この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます!!」

『この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます!!』

零に続いてリアス達も合掌した。

「うめえ!!他人が作った物は初めて食べたが美味しい!!リアスの愛情が感じられるぞ!!」

「そ、そう良かったわ。貴方の口に合うか心配だったの」

「俺は出されたものは食う主義なんだ。いかに不味かろうがソイツが心を込めて作った物を残すのは最低な事だ。まあ俺にハズレはないがな」

「なら今度私の料理をぐっ馳走してあげる」

「おう！楽しみにしてるぜ！」

こうしてアジアは零と共に学校に通う事になった。

その後アジアの歓迎会を終え、アジアは零のクラスに転入してきた。この時アジアと親しく喋っている零に男子一同は嫉妬の眼差しを向けた。その中で『エロ坊主』『セクハラパラッチ』と異名を持つ松田と、『エロメガネ』『スリーサイズカウター』と異名を持つ元浜が零に襲い掛かったが、逆に返り討ちにあい地に伏せた（トリコ達
の能力は使っていません）

そして夜アジアを含めたオカルト研究部はグルメアイランドに来ていた。

美食の島（グルメアイランド）

「ここがグルメアイランドですか、何だか感激ですう」

特に初めて来たアーシアは目を輝かせていた。

「取り敢えず家に行くか。夕麻達も居ると思うし」

「所でレイ。彼女達にもグルメクラゲを食べさせたの？」

「ああ。ここで生きていくには必要だからな」

「あのーレイさんそのグルメクラゲって何ですか？」

この中でグルメ細胞の事を知らないアーシアに簡単に説明した。

アーシアも食べたいと言い、零はグルメクラゲを食べさそうと思っ
た。

「あ、零様お帰りなさいませ。それとリアス様達もいらっしやいませ」

零達に気づきドーナシックが声を掛けていた。

「夕麻と、カラワーナとミツテルトは？」

「それが見当たらないのです・・・」

ドーナシックに夕麻達の事を聞けば見当たらないと言われ不安にな
ったが、スノーも見当たらないので一緒だと思ひ大丈夫だと思っ
た。

因みに夕麻は一晩中スノーと共に居り、スノーの主である零にした
事を謝りながらスノーの世話をしていたおかげでスノーの警戒はな
くなり夕麻達4人と仲良くなった。

「まあスノーも一緒だと思ひし大丈夫だろ」

そう言い一行は家に入っていた。

「所で零君、僕達の今の強さはどれくらいなの？」

「今の祐斗達全員で掛ればこの前のガララワニなら仕留めれるかもし
れないな。ただ一人なら捕獲レベル3が限界だな。それとグルメ細
胞はある程度成長すると必ず“壁”にぶつかるんだ。その壁を打ち
破った時細胞は“進化”する。また壁の総数はその者の潜在能力を示
し、それを超える為の食材も個人によって違う」

「なら私のオゾン草はその壁を打ち破った食材だったのね」

「そう言う事だ。これからは自身の適合食材を見つけるのと、食義を
マスターしてもらう」

「食義・・・確か食の礼儀作法でしたか？」

「そうだ朱乃、食義を習得すれば今の技の威力は格段にあがるし色々便利だぞ。ここで一つ例を見せておこう」

零はそう言いノツキングを済ましたフグ鯨を出した。

「こいつは“特殊調理食材”のフグ鯨だ。捕獲レベルは29。ただしこれは毒化させずに捕獲するレベルだ」

「毒化・・・つまり毒を持っていてのことですね」

「ああ小猫の言う通り毒袋という物があり、一度破れると一瞬で全身が毒化し食べられなくなる。致死量0.2mgマウスにして10万匹を殺せる猛毒を持つ。また毒袋の位置は個体によって全く違う為完璧に除去するのは苦労する」

「レイは除去出来るのね？」

「ああ出来る。最初は普通にするからよく見とけよ？」

そう言い零はフグ鯨の毒袋を除去した。するとフグ鯨が金色に輝き出した。

「凄いですわ、毒袋を取り除くと金色に光ましたわ」

「・・・食べてみたいです」

「食べるのはもう少し待てな。次は食義を使う」

次に食義を使いさつきよりも早くフグ鯨を捌いた。

「あれ？毒袋を抜いたのに光ってないよ？」

「そうこれはフグ鯨自身が毒袋を抜かれた事にまだ気づいてない証拠だ。達人級になれば泳いでいるフグ鯨をノツキングなしで直接抜き取れる。また前に巨大魚を水中で捌いたがまだ死んでることに気づかず泳ぎ続けているぞ」

「凄いわね」

「よしフグ鯨実食だ」

零はフグ鯨を薄造りにした。

「それでは、この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます!!」

『この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます!!』

零に続きリアス達も合掌した。

「綺麗な身、ピンク色に光って」

「まるで牛肉の霜降りのように脂が乗っていますわ」

「この辺りはフグって言うより鯨の肉に近いね」

身を見てリアス、朱乃、祐斗は感想を言い口に運んだ。

（これは脂の旨みが口いっぱいに広がりました！）

（はうう甘いですー）

（本マグロの大トロのように口の中で溶けて無くなったワケではなく、フグの身のようなしつかりとした歯ごたえは残っている）

小猫、アーシア、ドーナシークも食べた感想をこう思った。

「どうだった？フグ鯨は？」

「とつても美味しかったわ。噛めば噛む程旨みが広がったわ」

「ええ、まるで深海のように底の見えない旨みでしたわ」

「さて食義の事だが・・・」

コーーコーー

オオオオオオオ

「な、なに!？」

「この遠吠えはスノーとギネス!!それにギネスのこの遠吠えは・・・」

「レイさん一体に何が・・・」

「ギネスが呼んでいる自分以外の7匹の王を!!」

零達が外に出るとエンペラーリングが出来ていた。

「零君あの渦はなんなの？」

「あれは、エンペラーリングと言うやつで、王者と呼ばれる強獣が相見える時にその場所を中心に大気は震え渦を巻くんだ。柵の向こうの猛獣も近づかない立ち入り禁止の場所になるんだ」

その時夕麻達3人がネオに運ばれて来た。

「ネオ、夕麻達に何があったんだ!」

「コイツ等興味本位で柵の向こうに行ったんだ。すぐさま俺とスノーで引き戻しに行ったんだが、運悪く猛獣達に襲われ気を失っていた。スノーは夕麻がやられた事に怒り、猛獣達と戦っていたらギネスが現れたんだ」

「それで今スノーはギネスと戦っているって事だな？」

「ああそうだ。しかしこのエンペラーリング・・・もしかしたらスノー

は・・・」

「新たな王となるかもな。ネオ、夕麻達を家に運んだら俺達も向かうぞ」

「おう」

「リアスお前達も来るか？お前達は俺かネオと離れなければ安全だ」

「ええ行くわ。噂の八王も見てみたいし」

リアスの言葉に朱乃達は頷いた。

「零様私はレイナー様達を見えています」

「分かった。よし行くぞ!!」

零は裏のチャンネルを使いスノー達がいる場所に向かった。

その頃グルメアイルランドの某所

「この遠吠えは・・・」

「ふむ、ギネスとスノーだな」

「やはりスノーは持っていたな」

「当然じゃないのか兄者。スノーは零のパートナーなのだから」

「今度会う時が楽しみだな」

アカシア達はスノーの成長を感じていた。

グルメアイルランド南部・狼王テリトリー

今ここに2匹の獣が相対していた。1匹はスノー。零のパートナー猛獣のナインフォックス。

そしてもう1匹こそグルメアイルランドにいる8匹の王の一角

狼王バトルウルフ・ギネス〔哺乳獣類〕捕獲レベル10550

満身創痕のスノーとは対照にギネスは幾つかのかすり傷だけだった。しかしギネスは気づいていた。この獣は化けると。だからギネスはその瞬間を見届けようと自分以外の王達を呼んだ。

「着いたここだ」

「ここは？」

「狼王のテリトリーだ。そしてあれが狼王ギネス」

「な、なんていう存在感なんだ・・・」

「震えが止まりませんわ・・・」

「・・・」

「レイさん怖いですう」

リアス達はギネスの存在感に飲まれた。

「氣い引き締めろよ同格があと7匹来るんだからな」

そうしている内に八王達が集まってきた。

鯨王ムーン「哺乳獣類」捕獲レベル10600

馬王ヘラクレス「幻獣類」捕獲レベル10200

鳥王エンペラークロー「鳥獣類」捕獲レベル10000

猿王バンビーナ「哺乳王類」捕獲レベル10000

蛇王マザースネーク「爬虫獣類」捕獲レベル10310

鹿王スカイディア「哺乳獣類」捕獲レベル10450

竜王デロウス「翼竜獣類」捕獲レベル10590

「久々の集合だな八王達」

「ち、ちよつとレイどうなっているの!？」

「見に来たのさ」

「見に来た?何を？」

「新たな王の誕生だ」

スノーはボロボロだったが立ち上がりギネスを睨みつけた。スノーに諦めの心はなかった。今スノーにある気持ちはただ一つ「零に並ぶ事」だ。5年前自分はまだ弱く零と共に八王達と戦えなかった。しかし今は違う、狼王に傷を負わすことが出来たその真実があるこそスノーは立ち上がった。そしてそれはスノーの力を目覚めさせた。

その力に王達は気づき認めた。

スノーはギネスに向かい走った。もつと、もつと早く。走っているとスノーの姿がブレ消えた。王達はギネスの後ろを見ていた。ギネスも後ろを振り向きその姿を目撃した。そこにいたのは自分、そうスノーは走っている時にバトルウルフに変身しギネスのスピードを得たのだ。それこそがスノーの力、他の王に変身出来る力を得たの

だ。

この力を得るには自分が王達と同格にならないとスノーは理解していた。そして遂に至ったのだ。

新たな王・狐王（こおう） ナインフォックスのスノーの誕生だ。

スノーは変身を解き倒れたが支えたものがいた。猿王だ。気づけば鯨王以外の王達がスノーの周りに集まっていた。

「見てみろよ八王達もスノーを認めた証拠だ。これからは九王の一角だ」

この日新たな王の誕生により八王から九王となった。スノーの成長はまだ続く。

戦闘校舎のフェニックス フェニックス現る!!

スノーが九王となった翌日、夕麻、カラワーナ、ミッテルトは零の前で正座していた。

「さて。お前達何かいう事はないか？」

零の口調は穏やかだが怒気が含まれていた。それもそのはず今の夕麻達では柵の向こうでは生き抜ける実力はなく零に行く事を禁止されていたにも関わらず、勝手に柵の向こうに行ってしまったのだ。

「本当にごめんさない零君……」

「私達の考えが甘かったわ……」

「同感です。まさか猛獣だけじゃなく自然まで凶悪だったです……」

3人共当時の事を思い出して零に謝った。

「今はまだ時期ではない。それはお前達だけではなくリアス達にも言えた事だがな。今は力をつけろ。いいな？また勝手に柵の向こうに行っても助けられないからな、これはネオにもスノーにも言っておくからな」

「「はい……」」

「反省したならいい。だが罰としてネオのトレーニングだ。ネオ頼んだぞ」

「ああ分かった。零そろそろ学校の時間だ」

「もうそんな時間か……じゃ行ってくる」

零はネオに夕麻達を任せ、駒王の自宅に戻った。

数日後……

零side

「すいません、先にシャワーいただきますね」

そう言って、アジアは風呂へ行った。

そうアジアは零の家に住むことになった。元々教会で暮らすつもりだったが先日の事で教会には住めなくなり、零が家に来ないかと

誘ったら即承認し今に至る。

零は自室でリアスの事を考えていた。最近のリアスは心ここにあらずみたいに見えた。

そう考えていると、カツ！と床が光りグレモリー眷属の魔法陣が形成された。そしてその中から零が考えていた人物のリアスが現れた。

「リアス？」

リアスは何やら思い詰めた表情を浮かべており、俺を確認するなり、ズンズンと詰め寄ってきた。

「レイ、私を抱きなさい」

・・・今何って言った？

「私の処女をもらってちょうだい。至急頼むわ」

リアスの言葉は零の思考を停止さすには十分なものだった。

零が停止している間にもリアスは下着以外を脱いだ。ここでやつと零が動き始めた。

「何やってんだ全く・・・」

零はヘアロックでリアスの動きを止め自分の上着をリアスに着せた。

「私ではダメなの？」

「そう言う訳ではない。こういうことはちゃんとしないと駄目だ。今のお前は手段を選ばず目的を果たそうとしている。今ここでお前を抱く事は出来る。だが、今のお前は感情的すぎだ。冷静になった時後悔するのはお前自身だ」

「・・・そうね貴方の言う通り感情的だったわ。ごめんなさい」

冷静になったのを確認した零はヘアロックを解いた。するとまた魔法陣が形成された。

「どちらにせよ手遅れだったみたいね」

魔法陣から出てきたのは銀髪のメイドだった。

「こんなことをして破談に持ち込もうというわけですか？このような下賤な輩に操を捧げると知れば旦那様とサーゼクス様が悲しまれますよ」

ほう。初対面の相手に礼儀がなっていないな。少し痛めつめるか。

メイドの言葉に零は切れかかった。

「私の貞操は私のものよ。今はレイのお陰で冷静になったわ。確かに軽率な行動だったのは認めるけど、レイを下賤呼ばわりしないで頂戴」

メイドは視線を零に向け頭を下げた。

「はじめまして。私は、グレモリー家に仕える者です。グレイフィアと申します。先程は失礼いたしました。以後、お見知りおきを」

「俺は魔訶零。リアスの協力者だ」

「レイ？まさかこの方が？」

「ええ、『赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）』の使い手で、『美食の島（グルメアイランド）』の主よ」

「・・・ブーステッド・ギア、龍の帝王に憑かれた者・・・そして、グルメマスター・・・」

「なんだ？異質を見る様な目で見てきて・・・。それにしてもグルメマスターか・・・マスターならアカシアの方がピッタリだけだな。」

「グレイフィア、私の根城に行きましょう。朱乃も同伴で話を聞かろう」

「『雷の巫女』ですか？私は構いません。上級悪魔たる者、『女王』を傍らに置くのは常ですので」

「よろしい。レイ」

リアスは俺を呼び、ツカツカと寄ってきて、俺の頬に・・・

チュツ

頬に触れるだけのキスをした。

「今夜はこれで許して頂戴。迷惑かけたわね。明日、また部室で会いましょう」

そう言いリアスはグレイフィアと共に魔法陣に入って行った。

「また、大変な事がおきるな・・・」

零は直感でそう思った。

翌日放課後になると昨日のメイド・グレイフィアの匂いが部室から漂ってきた。

(どうやら2日続けて厄介事か・・・)

零は祐斗と共に部室に向かっていた。そして部室前に着いた時に祐斗が気が付いた。

「・・・僕がここまで来て初めて気配に気づくなんて・・・」

「遅いぞ祐斗。俺は来た時から気づいていたぞ」

「・・・どうやって気づいたんだい？」

「匂いだ」

「聞いた僕が馬鹿だったよ。零君は異常だったね」

失礼なこれ位じゃないとグルメ界では生き抜けんぞ。

そして部室に入ると、機嫌の悪い面持ちのリアス、ニコニコ顔だが冷たいオーラを漂わせている朱乃、できるだけ関わりたくないのか部室の隅で静かに座っている小猫、そして昨日のメイド、グレイファイアがいた。

アーシアも含め全員揃ったのを確認してリアスが口を開いた。

「全員揃ったわね。では、部活をする前に少し話があるの」

「お嬢様、私がお話しましょうか？」

グレイファイアの申し出をいらないと手を振り、再び口を開こうとした瞬間魔法陣が光りだしグレモリーの紋様が変化し知らない形に変わった。

「――フェニックス」

近くにいた祐斗がそう呟いた。そして魔法陣から人影と炎が出て来た。炎の中で人影が腕を横に薙ぐと周囲の炎が振り払われた。

「ふう、人間界は久しぶりだ」

そこにいたのは赤いスーツを着崩したホストの様な男だった。リアスを捉えると口元をにやけさせた。

「愛しのリアス。会いに来たぜ」

(またまた面倒くさい奴が来たな。今年は厄年か?)

男を見て零は頭を抱えなくなった。

その後男、ライザー・フェニックスはリアスの横に座り軽々しく肩を抱いたりしている。何でもリアスの婚約者らしいが・・・

「いい加減にしてちょうだい！」

遂にリアスも限界なのか怒りが爆発した。何でも先の戦争で純血悪魔の数が減り、純血悪魔同士で種の存続をしようと、リアスの大学卒業までの自由を奪い早く結婚して子をなして欲しいという事だ。

売り言葉に買い言葉の言い合いをしていたライザーは周囲に炎を駆け巡らせた。

「俺は君の下僕を全部燃やし尽くしても君を冥界に連れ帰るぞ」

その瞬間ライザーの殺意と敵意が部室に広がり、零以外臨戦態勢に入った。そんな中零は・・・

“食技”——“スプーン”ブアツ

「消火完了」

スプーンで炎を掬い取りそのまま握りしめ炎を消した。

「・・・お前何者だ？」

「魔訶零。ただのリアスの協力者で人間だ」

ライザーは零の警戒を始めた。

その後グレイフィアの仲裁で一端静かになり最終手段の『レーティングゲーム』での決着をつけると言ってきた。

『レーティングゲーム』爵位持ちの悪魔達が下僕同市を戦わすゲームのこと。但しゲームは成人した悪魔のみ。今回は非公式なのでゲームが出来る。

ライザーは自分の眷属達を召喚した。皆美女や美少女だった為零は呆れた。更には婚約者の前なのに眷属とティープキスをし更に零を呆れさせた。

「阿保らしい」

「何だ?! 貴様人間の分際で生意気な!! ミラやれ!!」

「はい。ライザー様」

零の眩きを聞きライザーは小柄の女の子ミラに攻撃するよう命じた。

ミラは棍で零を突こうとした。

「そんなんじや俺を突くことは無理だな」

そう言い零は左手の親指と人差し指と中指の3本の指で棍を受け止めた。その際髪が少し揺れた。

「な!?!」

「ナイフ!」

ミラは驚愕した。ミラだけではなくライザー達も驚愕していた。驚いていないのはリアス達とグレイファイアのみ。

そして零は手刀で棍を斬った。

「ミラ何をしている!! さっさとやれ!!」

「ラ、ライザー様か、体が動きません・・・」

「ノッキングだ。5分だけだがな」

そう髪が少し揺れた時、零はヘアノッキングをミラにしていたのだ。

「貴様俺の可愛い到下僕に何をした!!」

「そつちから仕掛けてきたのに何を言うか?」

ライザーと零は睨み合い、一発即発の状態だ。

そこに割り込んだのは案の定グレイファイアだった。

「お止め下さいライザー様、零様。これ以上やるのでしたら、私も黙って見ているわけにもいかなくなります。私はサーゼクス様の名誉の為に遠慮などしないつもりです」

静かだが迫力のある言葉でグレイファイアは2人を牽制した。

「・・・最強の『女王』と称される貴女にそんな事を言われたら引くしかないな」

ライザーは引いたが零は引かなかった。

「面白れえ。俺にそんな事を言える奴がまだいたとはな」

「・・・」

零とグレイファイアは暫く睨み合った。

「ツ!?!」

するとグレイファイアの首が飛ぶイメージが全員に見え、グレイファイアは咄嗟に下にしゃがんだ。

「・・・遅い・・・臨戦態勢に入るまでに0, 5秒。俺がその気だったら軽く10回以上は死んでいるぞ」

グレイファイアの頭の上から零の声が聞こえ顔から冷や汗を滝の様に流しながら、さっきのイメージ道理にならなかったことにグレイ

ファイアは安堵した。

「・・・レイ、引きなさい」

リアスに言われ零は大人しく引いた。

「おい人間、お前もゲームに参加しろ。この借りはゲームで返してやる」

「俺は人間だぞ。悪魔のゲームに参加出来るのか？」

「今回は非公式なので可能でございます」

ライザーが零にゲームに参加するように言うと、零は参加出来るか疑問に思い言くと、ハンカチで汗を拭きながらグレイファイアが出来ると答えた。

「なら参加させて貰おう。本当にいいんだな？」

「ふん！たかが人間如き1人や2人さほど変わらん。貴様はゲームで醜態をさらすだけだ」

「言っている。その傲慢が命取りになるだけだ」

「そこまです。レーティングゲームは十日後に行います。今ここで戦闘はおやめください」

グレイファイアに再度止められ、その日は解散となった。

修行

「レイ修行に行くわよ」

ライザーとレーティングゲームをする事になり、翌日の朝一番にリアス達が零の家に来て、開口一番にそう言われた。

美食の島（グルメアイランド）

最初はリアスの別荘でするつもりだったが零が修行するなら此処の方がいいと言い、グルメアイランドでする事になった。

「さて、前にも言っていたが食義をマスターしてもらおう」

「ちよっと待って、食義って十日でマスター出来るの？」

「いいや無理だ」

「それだったら何故・・・」

「最後まで聞け。確かに十日で食義をマスターするのは無理だが、一ヶ月以上もあれば出来るだろう？」

「確かにそうだけど・・・私達には十日しかないのに」

「そこで使うのが裏のチャンネルだ」

「それって此処への移動方よね？」

「そう。裏のチャンネルは移動だけではない。時間が違うんだ。俺の裏のチャンネルは外の世界1日で5日分だ」

「つまりレイが作った裏のチャンネルで5日過ごしても、外の世界では1日しか経ってないってことね？」

「そうだ。ネオの裏のチャンネルは一秒で一ヶ月だ。今回は俺と交替で裏のチャンネルを発動する。ネオには5日で頼んでいる。それと後半には俺の食義の師匠が来てくれる」

「師匠達って柵の向こうにいるのよね？どうやって連絡したの？」

「なに、リドルチャプターを使って連絡したんだ。4、5日後に来てくれるぞ」

「ありがとうレイ。早速始めましょう!!」

『はい!!』

こうして食義の修行が始まった（墮天使組も参加）

お椀いっぱいに入った豆を5メートルの長さの箸で食べたり、表面

がつるつる滑る「白魚そうめん」を取ったり、ほんの数ミリ動くだけで崩れる「プリンラクダ」を頭に乗せながら「感謝ボテン」で食義の基本の構えである「合掌一礼」のフォームに合わせて連続で発射する鋭い針を当たらない様に構えをしながら正しい構えの所作を覚えた。不眠不休で「ローズハム」の花を咲かせたりと一ヶ月、外では6日が経った。

因みに珍師範は4日経った時に千代と共に現れた。千代の名前を聞いた時リアス達は驚いた。なんせ節乃と千代は滅多にお目に掛かれない料理人で、連絡すら取れないのだから仕方ない。

珍師範は相変わらずリアス達の名前を間違えた。リアスの事はリアル。朱乃は栗野。祐斗は北斗。小猫は小歌。アジアはアーメン。と言った具合に間違え、間違える度にリアス達が正しく言うが全く正しく言わなかった。

そして珍師範が加わった事により、スパルタの修行となった。

「凄いな「たいまつくし」を合計20本を2時間も続けるとは」

たいまつくし・・・感謝の念以外の雑念を察知するとたちまち炎が消えるもの。最初リアス達は5分も持たなかった。アジアは最初から30分も続いた。元々シスターであったアジアには食義はピッタリだったらしく、リアス達の半分で食義をマスターした。またアジアには調理技術やノッキングのやり方などをリアス達が修行している間に千代が零と共に教えた。

この時千代はアジアは食材に好かれていると見抜いており、自分の技術を教えた。またアジアを孫の様に可愛がり、アジアも千代の事を祖母の様に慕った。

「さて次の段階だ」

修業7日目の朝、零は言った。

「次は何をするの?」

「食材の捕獲だ。今からリアス達にはある食材を取って来てもらう。その食材は3つ。ガララワニ、BBコーン、オゾン草だ。今のお前達なら捕獲出来る筈だ。その途中で自身のフルコースも見つけて来て

もいいぞ。戻って来たら俺のスープと肉料理をぐっ馳走してやるよ」

「！レイのスープと肉料理!？」

「楽しみですわ」

「そうだね」

「コクツ」

零は修行を次の段階に移し、リアス達全員で3つの食材の捕獲を依頼した。そして戻って来たら零のフルコースであるスープと肉料理が食べれると聞きリアス達は更に楽しみにした。

「仕込みは終わらしておくから早く戻って来いよ?」

「ええ、早速行ってくるわ!!」

そう言いリアスを先頭に夕麻達墮天使組もついて行った(リアス達には地図を持たせた)

「どう思うネオ?」

「あいつ等なら大丈夫だろう。成長のスピードが速いしな」

「そうだなライザーとの戦いが終われば、四獣と戦わすか?」

「少し早い気もするが・・・それはあいつ等の細胞のレベルが上がってからでもいいと思うぞ?」

「まあ確かに四獣本体の捕獲レベルは350。牙王だけで戦わしてから決めるか?」

「それが良いだろう。その前にメロウコーラ・サラマンダースフィンクスだな」

「ああ。まだまだ課題は多いがリアス達なら大丈夫だろう」

「そうだな」

そう言い零はセンチリースープを作り、ネオはジュエルミートを取りに動いた。

リアス side

初めてグルメアイランドに来た時を思い出すわ。あの時最初の猛獣がガララワニだったわね。あの時は怖かったけど今は大丈夫! きつと九王を見たからね。レイを除いた此処グルメアイランドの王

達。捕獲レベルは1万以上とレイは言っていたわ。今から私達が相手するのは捕獲レベル5のガララワニなら楽勝ね。

そう言っている間にガララワニの住んでいる所に着いた。そして出てきたのは零と戦ったのより大きかった。

「あらあら、零君の時より大きいですわ」

「リドルチャプターで調べてみますね」

祐斗がリドルチャプターをガララワニに当てると所載が出た。

ガララワニ300歳〔爬虫獣類〕 捕獲レベル8

「・・・このまえのは5。強いですね」

「じゃガララワニは小猫、頼むわ」

「分かりました」

ガララワニと小猫の勝負はすぐ決着が着いた。小猫は零に釘パンチを教わったのだ。自分の戦闘スタイルに釘パンチは相性が良いと判断したのだ。

「零先輩直伝、3連釘パンチです！」

「完璧だね小猫ちゃん」

「まだまだです祐斗先輩。零先輩は無限に打てると言っていました」

「・・・小猫、レイと比べちゃダメよ。レイがおかしいだけだから」

リアスのその言葉に全員が頷いた。

「さ、次行くわよ！」

『はい』

次に着いたのは「スカイプラント」の蔓（グルメアイランドは様々な食材が混じりあっている為、BBコーンはベジタブルスカイの近くにできている）

リアス達は順調に進んでいき、積乱雲での呼吸法を無事見いだせた。そして遂に雲の上に出てベジタブルスカイに到着した。

「凄い！本当に見渡す限り全てが野菜のジュータン!!」

「悪魔ですけど、まさに野菜天国。あ！あの大根だ僕達が食べた大根」

「キュウリもありますわ」

全員でベジタブルスカイの野菜を堪能していると、BBコーンとオゾン草を見つけた。

「有ったツス」

「BBコーンはまるでビルの様な大きさまであるぞ」

「あれ？オゾン草閉じちゃったわよ？」

「BBコーンは朱乃、祐斗、小猫、アーシア頼んだわよ。墮天使組と私はオゾン草を」

リアスの指示に全員頷き別れた。

BBコーンは小さいのは祐斗の魔剣で斬り、大きいのは皮を削いで反対側から小猫が釘パンチで粒を弾き飛ばし朱乃とアーシアが回収した。

一方オゾン草は苦戦したが途中で来たアーシアの協力で葉の剥き方、2枚同時に臭いが強い葉を順番で剥く法則が判りリアス達は見事捕獲した。

「さあ戻るわよ皆」

『はい』

リアス達は零の家に向かった。

リアス side out

「戻って来たな」

零と千代は料理の仕込みを終わらしてリアス達が帰ってくるのを待っていた。

「ヒツヒツヒ、アーシアちゃんにシャボンフルーツの調理を教えたら、パーティーだね」

その後千代はアーシアにシャボンフルーツの調理を教え、ガララワニ、BBコーンと調理した。

「さあ出来たぞ！」

「皆準備はいい？」

リアスの言葉に全員頷き合掌した。

『この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます!!』

最初はリアス達が取って来たガララワニ、BBコーンのポップコーン、オゾン草のサラダとシャボンフルーツと続き千代の料理。そしていよいよ零のフルコースに突入した。

「待たせたな。これが俺のフルコースのスープ、センチユリースープ

だ」

零が蓋を開けるとオーロラが現れリアス達は目で楽しみ、手のひらで堪能し、鼻で頬張り、耳で音を満喫し実食した。

そして全員、みだらな顔になった。

「元に戻ったみたいだし次に行くぞ。これが俺の肉料理、宝石の肉（ジュエルミート）だ」

これまた蓋を開けると肉が輝いていた。

「凄い輝きね」

「ま、眩しいでも白熱灯のように優しい光ね」

リアス、と夕麻の言葉は全員の代弁でもあった。そしてナイフで肉を切ると肉汁が花火の様に打ち上がった。

「この部位は肝臓（レバー）！レバ刺しの食感だけど匂いやクセは全くしなくて、しつとりとクリーミーな味わいだよ!!」

「んーここはバラ肉の濃厚な味ツス!!」

「おっサーロインだ。口の中で一瞬で溶けた」

「・・・味と食感。そして部位のカーニバルみたいです」

ジュエルミートを食べ、祐斗、ミツテルト、ドーナシーク、小猫と感想を言った。全員輝いている中で零とリアスが特に輝いていた。

「ねえレイ・・・」

「良いぞ」

「まだ何にも言っていないわよ!」

「フルコースにジュエルミートを入れたいんだろ?それにこの前言ったよな?遠慮するなと」

「ええ、ありがとうレイ」

リアス フルコースメニユー

オードブル（前菜）【?】

スープ 【?】

魚料理 【?】

肉料理 【宝石の肉（ジュエルミート）】

主菜（メイン） 【?】

サラダ 【オゾン草】

デザート 〔？〕

ドリンク 〔？〕

「私もサラダが決まりましたわ」

朱乃 フルコースメニュー

オードブル(前菜) 〔？〕

スープ 〔？〕

魚料理 〔？〕

肉料理 〔？〕

主菜(メイン) 〔？〕

サラダ 〔天使ナス〕

デザート 〔？〕

ドリンク 〔？〕

「僕はドリンクにいいものを見つけたよ」

祐斗 フルコースメニュー

オードブル(前菜) 〔？〕

スープ 〔？〕

魚料理 〔？〕

肉料理 〔？〕

主菜(メイン) 〔？〕

サラダ 〔？〕

デザート 〔？〕

ドリンク 〔水晶コーラ〕

「私はオードブルとサラダです」

小猫 フルコースメニュー

オードブル(前菜) 〔BBコーン〕

スープ 〔？〕

魚料理 〔？〕

肉料理 〔？〕

主菜(メイン) 〔？〕

サラダ 〔ポテトの泉〕

デザート 〔？〕

ドリンク 【?】

「私はオードブルとデザートですう」

アーシア フルコースメニュー

オードブル（前菜）【百葉のクローバー】

スープ 【?】

魚料理 【?】

肉料理 【?】

主菜（メイン） 【?】

サラダ 【?】

デザート 【シャボンフルーツ】

ドリンク 【?】

「まだまだ未知の食材が多い。ゆっくり決めればいい。今は修行の疲れを食べて癒すぞ」

更に零は料理を使い。修行7日目を終えた。

番外編 コラボ

流貴が最後に訪れた時から1年と数か月が経過した。

「そう言えば今度遊びに行くって言ったな。原作も始まった事だし、何より正月だしな。よし内緒で行くか」

「そう言い零は裏のチャンネルを使いイカルガに向かった。（流貴からエターナルポースは貰っている）」

イカルガ

「ここが流貴の国か……。ホント色んなアニメの要素入っているな」
零は流貴から流貴の国の事を教えられていたが、実際に見て改めて実感した。

「流貴は……。あの城か。折角だし飯を食ってから行くか」

零は流貴の匂いを探り、城にいると分かると飯を食べる為に歩き始めた。その零をみる視線に気づきながら。

「あの男只者ではないな」

「ああ、黒の騎士団に写真を見せて入国したか調べろ」

「最悪戦闘になるかもしれません、準備しておきましょう」

零の事を見ていた者達は行動に移った。

「色々と店があつて困つたが、遠月にするか」

「そう言い零は遠月に入った。

「いらつしやいませ。何名様ですか？」

「1人だが大丈夫か？」

「はい大丈夫です。どのコースにしますか？」

「じゃ洋食の単品で」

「畏まりました。お席にご案内いたします」

店員新戸緋沙子について行き席に座りメニューを眺めた。

（ソーマ世界の料理を食べれる事が出来るなんてラッキーだな）

零はエッグベネディクト、スツポンバーガー、インサラータ・フリツタータ、ビーフシチューを完食した。

そしてこの時に重要な事を思い出した。

(そう言えば俺ONE P I E C Eの金持ってなかった!!?仕方ない落としたって言うってただ働きで許してもらおう)

零は会計の時に説明し、食べた分の働きで許すと言われた。

「一応聞くけど料理は出来るの?」

「ああ。料理の腕なら負けない自信があるな」

雍切えりなからの問いかけに答えたら、えりなが不敵に笑った。

「なら料理勝負をしましょう。審査委員は緋沙子、アリス、黒木場君の3人で。テーマは無しでいいわ」

「おういいぜ」

こうして料理勝負が始まった。開始直後から零はその調理技術を遺憾なく発揮しものの数分で作り終えた。

「俺の料理、二つの表情を見せる鹿のローストだ」

「す、凄い、あんな短時間で仕上げるなんて・・・」

緋沙子が驚いたように言った。アリスと黒木場も声を出さなかったが驚いていた。

「じゃ早速いただきます」

アリスが手をつけようとすると零が止めた。

「おっと、食べる前にやる事があるんだ。俺に習ってくれ」

そう言い零は合掌した。

「この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます」

「二この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます」

零に習い3人は合掌して言った。そして食べると固まった。

「信じられない・・・この料理をあんな短時間で作るなんて・・・」

「特に注目するべきなのはこの2種類のソースね」

3人はあつという間に完食した。そしてえりなの料理も食べたが何時もの衝撃が来ず、3人一致で零の勝利となった。

「完敗だわ・・・貴方の名前を覚えてくれるかしら?」

「俺の名は魔訶零だ」

「じゃ零君、早速働いてもらおうわ。君ならすぐ終わると思うけどよろしくね」

「ああ、精一杯頑張るぞ」

この後零の料理目当てで客が大勢遠月に押し寄せた。(零とえりなの料理勝負の噂が流れ、零が勝利した為である)

三十分で食べた分の働きは終わったが、まだ零の料理が食べたいと言いつつ二時間限定で零が料理を振舞った。

そして二時間後店の前で零は別れの挨拶を済まして広場の中心で止まった。

「さて、俺を監視している奴等出て来いよ」

そう言うのと数十人の男女が零を取り囲んだ。

(キリトにアスナ、サボ、一方通行、カレン、殺せんせー、黒うさぎ、ナイトレイド、アルトリアにジャック・ザ・リッパーにエミヤ et c...)

「気づいていたのか?」

「あれだけの視線を向けられたら誰でも気づくぞ?」

キリトが質問し答えた零だが、キリト達は驚愕した。勿論零の事は見ていたが、気配を消して気づかせていないと思っていたからだ。

「何故俺を監視していた?」

「惚けるな!お前が入国した痕跡はない!!何の目的で此処、五皇の一角覆面のリユーキの国に侵入した!」

(んん?五皇?四皇じゃないのか?)

零は四皇から五皇になった訳を考えていた。しかしキリト達からしたらダンマリになっただけなので、話すのは不味い事だと思った。

「話さないなら、話せる様にしてやる!!」

そう言い全員が臨戦態勢となった。

(まいったな。流貴からは仲間や国民は家族同然って聞いているし手を出す訳にはいかないな...防御と回避で時間を稼ぐか。そうすれば流貴かセバスが来ると思うし)

零がそう思っていると、遠くから銃弾が飛んできた。

「髪誘導(ヘアリード)！」

零は銃弾をヘアリードで誰もいない方へ誘導した。その直後殺せんせーが零の後ろを取り触手を巻こうとした時、零は裏のチャンネルを発動させ避けた。この間実に10秒足らず。

「消えた!？」

「シノンの狙撃を別方向に誘導さすのと、殺せんせーの触手を一瞬で避けるなんて・・・」

「それより奴は何処に行った!？」

「ッ!上だ!」

零は『平方根の法則』で空を飛んでいた。

「一体何の能力者なんだ!?!消えたり、飛んだり、流貴並みに常識外れだ」

「殺せんせー、流貴とセバスを呼んで来てくれ!俺達だけでは勝てないかも知れない」

「分かりました。マツハで行って来ます!」

そう言い殺せんせーは流貴の居る城に飛んで行った。

(殺せんせーが流貴の所にいったな。後数分で来るだろう。それまで耐えるか)

そう思い地面に降りると、キリトとアスナが斬りかかって来た。

「ハアアアア!!」

「ヤアアアア!!」

ギユイン、ギユイン

「ナイフ!フォーク!」

ガツキン!!と2人の剣とレイピアは零のナイフとフォークに止められた。両手を封じた零にシノンはもう一度狙撃した。

「レッグナイフ!」ズバツ

零は右足を振り銃弾を切り裂いた。そしてキリト達から距離を取った。

その頃殺せんせーは流貴のもとに着いた。

「流貴さんいますか!? 大変です!!」

「どうしたん殺せんせー? そんなに慌てて」

「不法入国者が現れました!」

「それだけ? ならキリト達に任せばいいんちゃう?」

「それが只者ではないのです。シノンさんの狙撃を別方向に誘導して、私のスピードに追い付きました」

「はあ!? マジか!! 一体どんな奴なんそいつ?」

殺せんせーは零の特徴を話した。

「それって・・・セバスどう思う?」

「確実にあの方ですね」

「? 流貴さんとセバスさん心当たりがあるのですか?」

「恐らくな。兎に角行ってみるか」

流貴はセバスと殺せんせーと共に広場に向かった。

その頃キリト達は肩で息をしていたが、零は最初から全く変わって
いなかった。

「ハアハア・・・本当に化けモンかよ、俺達の本気の攻撃を余裕で防ぐ
なんて・・・」

「・・・しかし妙ですね。彼は防御か回避のみ。彼から攻撃はしてきま
せんし」

「俺達を舐めているのか?」

「いいや、零はキリト達が傷つかんように攻撃せんかっただけや」

キリト達が話していると、流貴、セバス、殺せんせーがやって来た。

「流貴! お前あいつの事知っているのか!」

「まあね。全員武器を降ろせ! お前達では彼に勝つことは出来ん!! 俺
でも勝てるかわからない」

「おいおい流貴。それはないだろ? ほんの一年でフルコースを集めた
のによ」

「それは零が手伝ってくれたから、ってか何の用?」

「正月だから遊びに来た」

「あ、成程。明けましておめでとう。今年もよろしく」

「明けましておめでとう。こちらこそよろしく」

「そう言い零と流貴は握手した。」

「流貴様、零様の事を説明した方がいいかと。皆呆然としています故」
セバスの言葉で回りを見ると皆ついて行けて行けず呆然としていた。

「あーそうやったな。皆この人は魔訶零。グルメアイルランドの主で俺の親友だ」

流貴がそう言うのと全員が驚いたと同時に納得した。

「改めて魔訶零だ。グルメアイルランドの主で流貴とは同盟を組んだ親友だ」

「所で零、ネオやスノーは元気か？」

「ああネオもスノーも元気だぞ。そうだスノー!!」

「コーーーン!!」

零がスノーの名を呼ぶと、スノーが裏のチャンネルを使い現れた。急に現れたスノーに全員が驚き武器を構えようとしたが流貴に止められ武器をしまった。

「久しぶりやなスノー!」

「コーーーン!」

スノーは流貴に近づき、流貴の顔をぺろぺろと舐めた。

「ははは、くすぐったいぞスノー!しかも強くなった?」

「ああ。スノーは八王の仲間入りして、九王の一角・狐王となったんだ」

「へー凄いな!!所で零のフルコースは?」

「前回と同じだ。中々決まらないな。そうだ流貴!グルメアイルランドの食材でおせちを作ったんだ。皆で食べようぜ」

「マジか!?!ゴチになります!でも人数大丈夫なん?」

「心配しなくても大丈夫だ軽く5百人前はあるぞ。足りなければ作るし」

「なら俺のフルコースを作って。皆で食べたいし」

「分かった」

「よし宴だ！準備しろ!!」

「「おおーおー!!」」

流貴の号令で皆行動開始し、零は流貴の城で流貴のフルコースを作り始めた。その途中にえりな達料理人が手伝いに現れ、特殊調理以外を教え任せた。

そして準備が完了し、流貴と零が中心で杯を掲げた。

「では、新年と」

「零の歓迎を祝って」

「乾杯!!」

『『乾杯!!』』』

流貴と零が音頭をとると全員が杯を掲げて言い、宴会が始まった。

「うめえー流石グルメアイランドの食材だ!!」

「どれも絶品です!」

イカルガの国民も参加し国を挙げての宴会に発展した。この時アルドラ、ライリンもやって来てスノーと戯れていた。

余興に流貴のコンサートなどを開き一日中盛り上がった。

宴会が終わりかけた時零と流貴は2人で話していた。

「良い国だな流貴。来てよかったって思った」

「俺の自慢の国だからな。ってか来るんやったら連絡してよ!ビックリしたよ!!」

「悪いな驚かそうと思ったんだ」

「まあええけど。それにしても何でキリト達と戦ってた時、攻撃は兎も角何で威嚇せんかったん?」

「流貴から国の事は聞いていたからな。攻撃で傷つけるのは絶対にしたら駄目だし、何より威嚇すれば国民が気を失うかもしれなかったからな」

「成程、零は優しいな」

「それは流貴もだろ?」

「そうだなお互い様だな。改めてお礼言うわ。ありがとうな零」

「どういたしまして。俺も流貴の国が見れて良かった。今度はグルメ

アイランドに遊びに来てくれ」

「ああ分かった！今度必ず行くわ!!」

「おう。楽しみに待っている」

そう言い、零は流貴と握手した。

レーティングゲーム開始!!

7日目の夜零は夜風に当たりに外に出ようとすると、テラスに灯りがついていたのでテラスに足を運んだ。

「リアスか」

テラスに居たのは赤いネグリジエ姿で紅の髪を一本に束眼鏡をかけていたリアスだった。

「あら？・レイまだ起きていたの？」

「ああ、少し風に当たりたいと思ってな。それは？」

テーブルの上には何やら地図らしきものとフォーメーションなどが書き込まれて紙が置かれていた。

「・・・気休め程度だけどね。この本は問題じゃないけどライザー本人が一番問題なの」

「フェニックス、不死身か？」

「ええそうよ。でもライザーを倒す方法はあるわ」

「その方法とは？」

「2つあって、圧倒的な力で押し通すか、起き上がるたびに何度も何度も倒して相手の精神を潰すかよ」

「何だ簡単じゃねーか」

「え？」

「何のために今まで食義の修行をしたと思ってるんだ？今のお前達ならアイツを何度でも倒せるだろ？それに俺がいる」

「そうね、そうよね私達は強くなった！『王』である私が疑ってどうするのよ。ありがとうレイ」

「どういたしまして。所で何でライザーの事を嫌っているっと言うか今回の縁談を拒否しているんだ？」

零は気になった事をリアスに聞いた。

「・・・私は『リアス・グレモリー』・・・でも誰もグレモリーのリアスと見るの。私はグレモリーを抜きにして私を、リアスと見て愛してくれるヒトと一緒にになりたいの。それが私の小さい夢・・・」

「叶えてやるよその夢」

「え？それって・・・」

「今回のゲームに勝てばいいだけだ。自信過剰ではないが俺が負けるとは思えん」

「確かにそうね。貴方が勝てなかったら誰も勝てないと思うし」

「ああ。それと俺は少なくともお前をリアス個人と見ているつもりだ。上級悪魔だかなんだか知らんが、その前にお前は一人の女でもある。女なら愛する者と添え遂げたいと思うのは普通だと思う。お前はお前だリアス。他の誰が言おうがお前はお前らしくしてればいいんだ。お前の敵は俺が倒して護つてやるよ。俺はお前の事結構好きだしな」

「ツ!!／／／」

護つてやると好きと言われリアスの顔は赤くなった。

「ん？どうした？顔真っ赤だぞ？」

「な、何でもないわよ／／／」

「？まあいい。明日からは調整に入るがいいか？」

「ええ。貴方に任せきりでごめんなさい」

「気にするな仲間なんだからな」

零はそう言いテラスを後にした。残されたりアスは先程の言葉を思い出してまた顔を赤くした。

（不死身か・・・ブランチの力はまだ完全にもに出来ていない。ここは力押しで行くか）

零は対ライザーの戦略を考えてから眠りについた。

最終日まで珍師範と千代指導の下、万全の状態に調整し当日に備えた。

決戦当日

零達はオカルト研究部の部室に集まっていた。アーシアはこのあと観覧席に向かう事になっている。全員食義の修行の成果で雑念は感じられず、リラックスしている。

開始十分前の深夜11時50分頃、部室に魔法陣が光りだしグレイフィアが現れた。

「皆さん準備はお済になりましたか？開始十分前です」

全員立ち上がるとグレイフィアは説明を始めた。

「開始時間になられましたら、この魔法陣から戦闘フィールドへ転送されます。場所は異空間に作られた戦闘用の世界。そこでどんな派手なことをしても構いません。使い捨ての空間なので思う存分のどうぞ」

「あーグレイフィアさん。食料を持ち込んでもいいですか？」

零はグレイフィアに質問した。

「少々お待ち下さい。聞いてみます」

「そう言い轉移し直ぐ戻って来た。」

「大丈夫ですがドーピングの物は認められません」

「ああ大丈夫です。持っていくのはグルメアイルランドの食材だからな」

「分かりました、伝えておきます。今回のレーティングゲームは両家の皆様も他の場所から中継でフィールドでの戦闘をご覧ください。また魔王ルシファア様も今回の一戦を拝見されておられます」

「お兄様が？・・・そう、お兄様が直接見られるのね」

「んん？リアスお前の兄は魔王なのか？」

「ええ。先の大戦で四大魔王は亡くなられ、今は強い者四人が新たな魔王となったの。お兄様の名はサーゼクス・ルシファア。『紅髪の魔王（クリムゾン・サタン）』と呼ばれているわ」

「成程な」

「そろそろ時間です。皆様、魔法陣のほうへ」

リアスの話を聞いて納得していると、グレイフィアに促され零達は魔法陣に集結した。

「なお、一度あちらへ移動しますと終了まで魔法陣での轉移は不可能となります」

その言葉を最後に零達はレプリカの駒王学園の部室に轉移した。

『皆様。この度グレモリー家、フェニックス家の「レーティングゲーム」の審判役（アービター）を担う事となりました、グレモリー家の使用者グレイフィアでございます』

グレイファイアの挨拶と説明を聞きゲームが始まった。

「さて始まったわね。今回のゲームはレイの策で行くわよ」

そう今回の作戦は零が考えたのだ。十日前の事で零を警戒していれば零を先に潰しにくると予想し、違う場合でも策を考えたのだ。

零は小猫と共に体育館に向かっていた。

体育館の裏口から入り演壇の裏側に隠れていると気配を感じた。

「・・・気配。敵」

小猫も遅れながら気配に気づいた。

体育館に居たのはチャイナドレスの『戦車』双子の『兵士』にミラの四人だった。

「・・・零先輩は『兵士』をお願いします。私は『戦車』を」

「OK。修行の成果を見せてもらおうぞ」

「はい」

小猫領き、相手と対峙し戦いが始まった。

「あの時はよくも！今度こそ倒してやる!!」

ミラが棍を構え、双子がチェーンソーを取り出した。

「解体しまーす♪」

双子が同時に仕掛けてきた。

「面白れえ、それも人間の武器だな。俺も人間の武器を使おう。フォーク!!ナイフ!!」ガツキン!ズパツ!

左からのチェーンソーをフォークで受け止め、右のチェーンソーはナイフで切った。

「あー切れっちゃった!」

「お気に入りだったのに!!」

「正面がガラ空きよ!!」

双子が文句を言っている間にミラが仕掛けてきた。

「足が動けば十分だ。レッグナイフ!!」バガアアア

「ツ!!」

ミラは身の危険を感じ横にジャンプして避けた。レッグナイフは体育館を突き抜けた。

ミラと双子の『兵士』イル、ネルは零から離れ警戒した。
その頃小猫は相手の『戦車』雪蘭（シユエラン）に圧倒していた。

「くっ!?!これ程とは」

「・・・隙ありです」

「な!?!」

「・・・2連釘パンチ!!」

「ぐは・・・」

小猫は相手の一瞬の隙を突き、2連釘パンチを当てた。丁度その時にリアスから通信が入った。

『レイ、小猫、朱乃の準備が整ったわ』

「了解、行くぞ小猫」

「はい」

零と小猫は体育館から出た。

カッ!

一瞬の閃光。刹那。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

轟音とともに巨大な雷の柱が体育館へ降り注いだ。体育館は根こそぎ消失した。

「撃破（テイク）」

「ナイスだ朱乃。食義で威力上がったな」

「ええ、零君とネオさん、珍先生と千代さんのお陰ですわ」

『ライザー・フェニックス様の「兵士」3名、「戦車」1名、戦闘不能!』

零と朱乃が話しているとグレイファイアの声フィールドに響いた。
その直後・・・

ドオンツツ!!と零と小猫がいる所が爆発した。

「ふふふ。獲物を狩るとき、獲物が何かをやり遂げた瞬間が一番隙だらけとなっていて、狩りやすいわ」

「残念ですが『爆発女王（ボムクイーン）』さん、零君達は無事ですわ」
「何を言って・・・」

「その通りだ」

「!!貴方どうやって・・・」

「ジエツトボイス」音速で移動しただけだ」

零はゼブラのジエツトボイスを使い小猫を抱え爆発を逃れた。

「朱乃、小猫を連れて祐斗と合流しろ。次の手に備えろ」

「分かりましたわ」

「零先輩気をつけてください」

「ああ」

朱乃と小猫は祐斗に合流するため森に向かった。

「さて、全員出てきたらどうだ?」

「気づいていたのですね」

零の言葉にライザー以外の眷属全員が現れた。

「ああ、十日前の事で俺は警戒されると予想したんだ。そして早めに俺を潰そうとこちらの策が決まった瞬間攻撃してくると踏んだ訳だが見事に外したな。最後の手段として全員で討つって所か?」

「ええ、その通りですわ。お兄様は『たかが人間如きにそんな事しなくつてもいい』と仰っていました。不安要素は取り除いた方が良くと言ったら、渋々認めて下さいましたわ」

「ん?お兄様?」

「この方はレイヴェル・フェニックス。ライザー様の妹君だ」

レイヴェルを紹介したのは顔に半分だけ仮面をつけた『戦車』のイザベラ。

「は?」

「ライザー様曰く、『妹をハーレムに入れる事は世間的にも意義がある。ほら、近親相姦つての?憧れたり、羨ましいがる者あ多いじゃない?まあ、俺は妹萌えじゃないからカタチとして眷属悪魔つてことだ』だそうだ」

「・・・あの鳥は本当の馬鹿で阿保で変態だ」

イザベラの言葉を聞き零はどうしようもなく呆れた。

「さあ坊やさつさと片付けてあげるわ」

『女王』ユーベルーナの言葉で全員構えた。零は髪留めを外した。

「さつさと片付けられるのはお前達だ。ヘアロック!」

「なっ!？」

「か、体が・・・」

「動かない!？」

「何をした!？」

「触覚でお前達の動きを止めたただけだ。因みにその太さ約0.1ミクロン。一本で約300kgの張力を持つ。今お前達は1tの力で拘束されているんだ。さあこれで一気にきめてやる」ヴオ

零は息を吸い上に向かって吐き出した。

シエゴオオオオオオオ

「内部で反響を繰り返し増幅・・・さあ落ちて来るぞ。音の落雷」

サンダーノイズ!!!

『キヤアアアアアア!!!』

『ライザー・フェニックス様の「騎士」2名、「戦車」1名、「僧侶」1名、「兵士」5名、戦闘不能!』

サンダーノイズで『女王』の特性で耐えたユーベルーナと不死身のフェニックスであるレイヴェル以外が戦闘不能となった。

レーティングゲーム決着!!

モニター室

ここモニター室には両家の悪魔達と魔王、サーゼクス・ルシファア
がリアスとライザーのレーティングゲームを観戦していた。

「・・・彼は一体何者なんだ？」

先に口を開いたのはライザーの父親、フェニックス卿だった。

「彼はリアス様の協力者であり、今代の赤龍帝です」

フェニックス卿に答えたのはグレイフィアだった。

「だが彼は未だ赤龍帝の力は使っていない。赤龍帝の力は倍増だった
はずだ。彼には他の力があるのかいグレイフィア？ 何より手刀で
チェーンソーを切ることなど普通人間では出来ない所業だ」

次に聞いたのはリアスとサーゼクスの父親であるグレモリー卿。

「父上、彼はグルメアイランドの主らしいですよ」

「な、何だと!？」

サーゼクスの言葉はグレモリー卿はもちろん、その場にいる全員が
驚いた。それもそのはず、悪魔達も調査のためグルメアイランドに
行ったが猛獣と自然に襲われ逃げ出す程危険な場所だと認定された
のだ。その主と聞き驚かないわけがない。

「お嬢様達は零様と零様の師匠達指導の元、十日間グルメアイランド
で修行したみたいです。そしてその実力は・・・」

とそこで言葉を切り、画面に目線を移した。他の者達も画面に目を
移すと驚きの光景が入ってきた。

零がユーベルーナ達に囲まれる少し前。ライザーは自ら出向きり
アスに投降させようとした。

「リアスお前達では俺には勝てん。諦めて投降しろ」

「もう勝った気かしら？ ライザー。私達はまだ諦めないわ。くらいな
さい!!」

リアスは消滅の魔力を放ったがライザーは軽々避けた。

「君のそれは危険だが当たらなければいいだけだ。もつとも速さがな

ければ当たらないがな」

「油断大敵よ」

「あ？」ボンツ

「ぐわあ!？」

「その魔力はコントロール出来るのよ」

そう先程撃った消滅の魔力は食義の習得でコントロールが可能となったのだ。

「クソガア!!」

ライザーは怒りながら体を修復した。

「周りにも気を付けた方が良いわよ？」

「あん!？」

「魔剣創造（ソード・バース）」

「ぐほ・・・」

祐斗は無数の魔剣を創造しその魔剣はライザーの体を突き抜けた。

「食義を習得するまで、ここまでの魔剣は作れなかった・・・今なら聖剣にも対抗出来そうだ。零君に感謝しないとね」

祐斗は魔剣を両手にそう言った。

「あらあら凄いですわね」

「祐斗先輩も強くなっています」

そこに朱乃と小猫も合流した。

「おのれく許さんぞ貴様ら!!」

ライザーは再生し祐斗達を睨みつけた。

「今度は私の番よ。朱乃達は下がってって」

リアスの言葉に頷き朱乃達は下がった。

「私の修行の成果見せてあげるわライザー。ルイン・フォックス!!」

リアスは食義の習得でコントロールが可能となりまた魔力を動物の形に出来るようになり、動かすことが可能となったのだ。因みに動物のモデルは九王達である。

九尾の狐型の魔力はライザーに襲い掛かった。

「このー!」

ライザーは炎を投げるが魔力は炎を避け、ライザーに噛みついた。

「まだまだよ、ルイン・スネイク!!ルイン・ウルフ!!」

次にリアスは蛇型でライザーを拘束し狼型で噛み砕いた。

「くそお!何だこの力は!」

ライザーが再生を終えると放送が聞こえた。

『ライザー・フェニックス様の「騎士」2名、「戦車」1名、「僧侶」1名、「兵士」5名、戦闘不能!』

「は?」

ライザーには理解できなかった。一瞬でユーベルーナと恐らく妹のレイヴェル以外の全員がやられたことに。

「あはは・・・零君今度は何をしたんだろ?」

「零先輩の事ですから一網打尽の攻撃をしたと思います」

裕斗と小猫の言葉を聞きライザーは理解した。零がやったと。

「おいリアス!!アイツは一体何者なんだ!?!」

ライザーはリアスに叫ぶ様に聞いた。

「レイは私の協力者であり今代の赤龍帝で・・・」

「グルメアイランドの主だ」

「き、貴様!?!」

リアスの言葉に引き継ぐよう、零は裏のチャンネルをから出て来て答えた。

時間はサンダーノイズを落とした時まで遡る。

サンダーノイズを落として、髪留めを付けた零は目の前の2人を見た。

『女王』とフェニックスは耐えたか」

ユーベルーナとレイヴェルは小瓶を取り出し一気に飲んだ。その瞬間傷が癒えた。

「それがフェニックスの涙か」

「ええそうですね。ユーベルーナ！お兄様の援護を!!この方は危険ですわ!!」

「はい!!」

「行かせると思うか?」

零はユーベルーナの前に立ちふさがった。

「なんてな。ほら行けよ」

と思っただら零は道を譲った。

「何のつもりですか?」

「お前が今から行った所で意味はないからな」

「はい?」

「お前が行った後俺も向かう。お前が着いた時俺はすでに着いているからな」

「意味が分かりませんが、その選択を後悔しなさい」

そう言いユーベルーナは飛んで行った。

「貴方何者なのですか?ここまで強いとは思いませんでしたわ」

「俺は魔訶零。リアスの協力者で今代の赤龍帝でグルメアイランドの主だ。これで納得したか?」

「ええ十分です。赤龍帝だけでも凄いのにあの島の主とは、リアス様は強力な協力者を向かい入れていたようですね」

「まあな。さて決着をつけに行くか」

零は裏のチャンネルを発動させリアス達の元に向かった。

「魔訶零、様・・・」

レイヴェルはこの時から零の事を意識し始めた。

零はリアスの声が聞こえ、引き継ぐ様に言った。

「グルメアイランドの主だ」

「き、貴様!?!」

「ライザー様!!あの男は危険です!!今すぐリアス様を・・・っていつの間!?!」

零が出て来てからユーベルーナがやって来てライザーに忠告して

いる最中に零を見つけた。

「これは裏のチャンネルと言つてなこれを発動させるには、グルメア
イランドフルコース魚料理、肉料理、デザートを食べないといけない
んだ。俺はメインとオードブル以外を食ったから発動出来るんだ。
リアス達は『女王』を俺はこいつをやる」

「ええ」

「さて覚悟はいいか？今からお前を調理してやる」

「ほざけ人間が!!」

ライザーは巨大な炎の塊を投げてきた。

「熱毒砲!!」

零は炎を毒の熱で溶かした。

「コイツを食らえ。5連釘パンチ!!」ドドドドド

蒸気が発生しその間に裏のチャンネルを発動しライザーの後ろに
移動し、5連の釘パンチを食らわした。

「ほら、まだいけるだろ？立てよ」

「ぐつ貴様あー」

「ほら次だ。ボイスカッター!!」

次にボイスカッターでライザーを千切りにした。そして再生する
度に、フライングナイフ、フライングフォーク、レッグナイフ、レッ
グフォーク、ボイスミサイル、ポイズンライフルなどで何度も倒した。

「はあはあはあはあ・・・」

ライザーは既にボロボロで肩で息をしていた。

「中々根性あるじゃねーか。まだ心が折れないとはな」

零は未だ折れないライザーに感心していた。ライザーは懐から
フェニックスの涙を二本取り出し一気に飲んだ。

「フハハハハハ!!これで俺の力は最高以上だ!!最早疲弊した貴様に勝
ち目はない!!」

「(おいおい、フェニックスの涙は2個までだろ？何でアイツが2本
持っているんだ？まさか俺達の分をくすねたのか?)ガツカリだ。俺
も回復させてもらおうか」

零は裏のチャンネルに入れていたジュエルミート取り出し一気に

食べた。すると零の体が輝きエネルギーが回復した。

「さて圧倒的な力なら・・・やるぞドライブ！」

『久々に喋れたぞ』

メタイぞドライブ！

「禁手!!!」

『Welsh(ウエルシュ) Dragon(ドラゴン) Balance(バランス) Breaker(ブレイカー)!!!』

零はブーステッド・ギア・スケイルメールに覆われた。そして・・・
『BoostBoostBoostBoostBoostBoost!!! Explosion!!!』

五回の倍増をした。

『相棒全快以上の奴なら遠慮はいらんぞ』

「OK!!音速とネイルガンで決める!!」

「食らええええ!!」

ライザーは巨大な炎を投げて来た。

「遅いな。ジェットボイス!!」

「き、貴様。わ、分かっているのか!この婚約は悪魔の未来の為に必要なんだぞ!?!それを何も知らないお前が動向する様な事じゃないんだ!」

零が後ろに現れライザーは慌てふためいた。

「確かに俺は悪魔の事情など知らんが、一人の女の幸せを奪う婚約なら滅ばばいいんだ!それで終わりだ!!30連音速ネイルガン!!」ズドン

零の30連音速ネイルガンを食らい、ライザーは気を失った。

『「王」ライザー・フェニックス様戦闘不能!!よってこのゲームリアス・グレモリー様の勝利』

レーシングゲームの決着が着いた。

ゲームの後

モニター室

「フェニックス卿、今回の婚約、このような形になってしまい、大変申し訳ない。無礼承知で悪いのだが、今回の件は……」

「みなまで言わないで下さいグレモリー卿。純血悪魔同士いい婚約だったけどどうやらお互いの欲が強すぎたようだ。お互いに純血種の孫がいるのに欲したのは悪魔ゆえの強欲か」

「……いえ、私もあの子に自分の欲を重ねすぎたのです」

「魔訶零君と言ったかな。彼に礼を言いたいね。息子に足りなかったのは敗北だ。アレは一族の才能を過信しすぎた。これは息子にとつていい勉強になっただろう。フェニックスは絶対ではない。これを学べただけでも今回の婚約は十分でしたよ。あなたの娘さんはいい関係者を得た」

「ええ。彼と話してみたいな」

「では父上とフェニックス卿も来ますか？」

「サーゼクスという事だ？」

「私も彼と話したいので、グレイファイアに彼を連れてくるよう頼んだのです」

グレモリー卿とフェニックス卿が零の事で話していると、サーゼクスが呼んだと言い、全員モニター室に待つ事になった。

『「王」ライザー・フェニックス様戦闘不能!!よってこのゲームリアス・グレモリー様の勝利』

時間はグレモリー卿とフェニックス卿が話していた同時刻

「レイ!!」

決着が着きリアスは零に抱き着いた。

「やったなりアス。これで〈チュ〉へえ?」

零が喋っている途中、リアスが零の唇に触れるだけのキスをしてきた。

「ん。私のファーストキスよ。日本では、女の子が大切にされるものよね?」

「そうだが何故俺に?」

「貴方にはそれだけの事をしてもらったから、これはそのお礼よ。いずれもっと大切なものを貴方にあげるわ」

「ははは。その時を楽しみにしている。帰るぞ」

「ええ」

「お待ち下さい」

帰ろうとしたらグレイファイアに止められた。

「どうしたのグレイファイア?何か用?」

「はい。サーゼクス様が零様をお呼びしています」

「お兄様が!?!」

「ほう」

サーゼクスに呼ばれていると聞きリアスは驚き、零は口角を吊り上げた。

「ついて来てくれますか?」

「ああ。是非魔王に会ってみたい」

「私も行くわ!」

零とリアスはグレイファイアについて行き、サーゼクスと会う。

「やあ!初めまして今代の赤龍帝、魔訶零君。君の戦い見させてもらったよ。君の実力は既に最上級悪魔に匹敵いや超えているね」

「魔王様にそう言われるとは、嬉しいです」

「ハハハ、無理に敬語を使わなくても構わないよ。私の事はサーゼクスさんでいいよ。君はグルメアイランドの主だそうじゃないか。なら立場的には私と同じではないかな?」

「まあ確かにそうだな。俺はグルメアイランドの主だからこそ、それ相応の態度を取らせてもらおうぞ?」

「うんいいよ。後君に会いたいヒト達がいるんだ会ってくれるかい?」

「いいぞ」

「グレイファイア、呼んできてくれ」

「はい」

グレイファイアはグレモリー卿とフェニックス卿を呼びに退出した。そして5分程で戻って来た。

「待たせたね。私はサーゼクスとリアスの父親の、ジオティクス・グレモリーだ。そしてこちらがライザー君の父君だ」

「今回息子が迷惑をかけたね。息子にはルール違反を起こした罰としてレーティングゲーム参加を禁止と言い渡すよ。それと息子に敗北を与えてくれてありがとう。いい経験が出来たと思うよ」

「俺は俺のやりたいようにやっただけだ。今回はリアスの夢を護る為に戦っただけだ」

「リアスの夢？」

リアスの夢と聞き聞き直したサーゼクス。

「リアスは言っていた。自分を『リアス』と見てくれるヒトと一緒にになりたいと」

「!!」

「アンタ達からしたら悪魔の未来に関わる事だと思う。だが！一人の女の幸せを奪うなら滅びた方がマシだ!!」

「・・・君の言う通りだ。私はリアスの夢を奪うところだったよ。君には感謝してもしきれないな。なあサーゼクス？」

「はい父上。私は魔王ゆえ悪魔の未来を考えないといけないと思っていましたが、零君の言葉で改めます。一個人の幸せ無くして悪魔の未来はない。今回の事は反省するべきことですね」

「そうだな」

零の言葉を聞き、サーゼクスとジオティクスは反省した。

「所で魔訶君」

「零でいいぞフェニックス卿よ」

「では零君。君が食べたあの光の肉の事を教えてくれないか？あの肉を食べた瞬間君の力が高まったのを感じたが・・・」

「あれは『宝石の肉（ジュエルミート）』俺の適合食材でフルコースの肉料理だ」

「適合食材？」

「フルコース？」

「これはリアス達にも説明したが、俺の体にはグルメ細胞と言う細胞があり、適合食材を食べれば細胞は進化し強くなる。フルコースとはオードブル（前菜）、スープ、魚料理、肉料理、主菜（メイン）、サラダ、デザート、ドリンクの8つの事で自身の生涯のメニューだな。それと今回確かに十日だったが、実際は裏のチャンネルという物を使い一日で五日程の時間で進め、一ヶ月以上修行したんだ」

零は、サーゼクス、グレイフィア、ジオテイクス、フェニックス卿に説明した。

「成程。君の強さが分かったよ。グルメ細胞か・・・」

「それにしても十日間が一ヶ月以上の時間にするとは・・・島のフルコースは凄いな」

「リアスもフルコースを？」

「はいお兄様。私は肉料理とサラダが決まりました」

「ほう、何の食材だい？」

「ジュエルミートとオゾン草です」

「肉料理は零君と同じだね」

「してそのオゾン草とは？」

「標高数万メートル、雲の上にあるベジダブルスカイと言う天空野菜畑にある野菜の王様だ。特殊調理食材で食べるのには同時に2か所食べないといけない」

「あれ？でもあの時は一か所だけだったわよ？」

「あの時は少し特殊な調理を加えて一か所でも食べれる様にしたんだ」

「へ〜」

「零君折り入って頼みがあるのだが」

「何だ？」

「息子の眷属達を預かってもらえないかな？」

フェニックス卿は零にライザーの眷属を預かってもらえないか頼んで来た。

「それはあいつ等を鍛えろと？」

「ああ。彼女達もまだまだ伸びると思うのだが」

「鍛えるのはいいが、覚悟がある奴だけだ。グルメアイランドは弱肉強食の世界、覚悟がない者は死あるのみだ」

「・・・分かった。彼女達に聞いてみるよ」

「覚悟が出来たのなら、3日後俺の自宅を訪ねると伝えておけ」

「分かった」

「今度ゆっくり話そう、グルメアイランドの食材を用意しておく」

「ああ。また会おう零君」

零はサーゼクス達に別れの言葉を言い、リアスと共に部屋に転移した。

零達は部屋に戻った後にグルメアイランドに行き、レイナーレ達と共に勝利の宴会を開いた。

「零君圧倒的だったね」

「ホントよね。零様だけで相手全員を倒したようなものね」

「流石零様っす」

「自分も何時か零様のように・・・」

ライザーとのゲームはサーゼクス経由でグルメアイランドのレイナーレ達も見ていた。そして今見ていた感想を言った。

「当たり前だ！俺が負けると思うか？」

零の顔はほのかに赤くなっていた。

「ん？これは・・・」

「酒って書いていますわ・・・」

「もしかして・・・」

「酔っているの？」

そう零の周りには酒と書かれた瓶や樽が大量にあった。

「まだ酔ってねえよ。あとお前達は飲むなよ？倒れるぞ。特に太陽酒

(サマーウイスキー)はアルコール度数83度だからな」

「ちよ、ちよつと零君それ3本目よ!?!大丈夫なの？」

「大丈夫だ。おつまみにチーズ白菜を食べているし、ウコンウンコを

食べているから酔わねえよ」

「そう言い次々に酒を流し込んでいき、とうとう最後の一本になった。」

「さーでこれでめでた」

零が取り出したのは、ノッキングマスター次郎のフルコースのドリンク、ドツハムの湧き酒だった。

「これは柵の向こうの酒だ」

柵の向こうと聞き全員が反応した。

「今のリアス達の実力なら、あと数種類の食材が捕獲出来れば向こうに行けるかもしれないな」

「いよいよね」

「楽しみですわ」

「まあ先に修行だな。祐斗と小猫は明日新しい技を教える」

「うん、よろしくね」

「・・・よろしくお願いします」

「そして何時か全員で島のフルコースを食べるぞ!!」

『うん！／＼はい！／＼ええ！』

この後も零の料理で宴会を楽しんだ。

使い魔をゲット!

レーティングゲームの翌朝

「ふあ〜」

「んん、もう朝なのね」

「リアス何故裸で俺のベットに侵入しているんだ?」

「決まっているじゃない。レイと一緒に眠りたかったからよ」

「なら何故裸なのだ?」

「私裸じゃないと眠れないのよ」

「はあく女がむやみやたらと男の前で裸になるんじゃないよ」

「分かっているわよ。・・・貴方以外には見せたくないし・・・」ボソ

「分かっているならいい。俺でも見せたら駄目だろうが・・・」

「え!?今の聞こえたの!!」

「前に言っただろ?これが俺の聴覚だ。脈拍、呼吸音、血圧、心拍数、声紋なども聞こえ、嘘をついているか分かるんだ。まあ要するに地獄耳ってことだ」

「迂闊に嘘はつけないわね。それとレーティングゲームの映像を見たのだけど、ライザー眷属達に使ったのは声ね」

「ああそうだ。ライザーにはボイスカッター、ボイスミサイルを使つたな。後は相手の女王の爆発をジェットボイスで小猫を抱えて回避したな」

コンコン

「レイさん御飯の用意できましたよ」

アーシアが朝食の用意が出来たと零に伝えに来た。

「ああ、着替えるから待っていてくれ」

「アーシア、もう少し待っていないさ。私もレイも準備しなくてはいけないから」

「っ!」

零が答えた後すぐにリアスが答えた事でアーシアは驚き、勢いよくドアを開けた。

ベットには上半身を起こした零と裸のリアス。アーシアはプルプ

ルと体を震わせ叫んだ。

「私も裸になります！仲間はずれなんて嫌です！」

「落ち着けアジア!!」

服を脱ごうとしているアジアをヘアロックで止め、数十分の説得の末無事に朝食にありつけた。

「・・・今何て言った？」

「だから私もここに住むって言ったのよ。交流を深めたいのよ」

「はあくまあいいか、部屋は空き部屋を自由に使ってもいい。だが地下は駄目だ、柵の向こうの食材があるからな」

「分かったわ。それと前にも思ったのだけど、柵の向こうって言うより名前を付けた方がいいんじゃないかしら？」

「そうだな・・・もう教えても良いか、あの柵の向こうにも名前がある。もつとグルメな物がある事から「グルメ界」と呼ばれてる」

「“グルメ界”・・・何時か攻略して見せるわ!!」

「その前に幾つか適応しないとイケない環境があるがな」

「うっ！次は何？」

「メルクの星屑って言う砥石だ」

「と、砥石ですか？」

「ただの砥石ではないぞ、ありとあらゆる物質を研ぐ事が出来る砥石だ。またその砥石で硬度の高い素材を研ぐ際に出る、金色の粉は調味料になる。その粉は新種のアミノ酸で構成され、味わったことのない極上のうまみ成分を含む」

「味わったことのない・・・」

「うまみ・・・」

極上のうまみと聞きリアスとアジアは想像でにやけた。

「言っておくがまだだからな。今度夕麻達にグルメ界の事を聞けばいいと思うぞ？あいつ等の話を聞けば油断出来なくなるからな」

「分かったわ」

「が、頑張ります！」

「よし。朱乃と裕斗と小猫を連れてグルメアイランドに行くぞ！」

「ええ」

「はい」

美食の島（グルメアイランド）

「さて昨日も言った通り、裕斗と小猫には新しい技を教える。まず裕斗」

「はい」

「お前刀は使えるか？」

「多分大丈夫だと思うけど、どうしてだい？」

「お前には居合を覚えてもらう。まあ見ている。ふうー。脱力——
体全体の力を抜けば抜くほど……居合のスピードと破壊力は増す!!」

ズバツ

零は近くにあった巨大な山みたいな岩を真つ二つに斬った。

「どうだ？最高の“脱力”と最大の“怒り”……その瞬発力は？」

「……凄い」

「裕斗。お前にはこれ、レオドラゴンの牙で作った刀。名刀「竜王」をやろ。使いこなしてみろ」

「ありがとう零君。期待にそえるように頑張るよ」

「おう。次は小猫」

「……はい」

「お前には“プリシヨットルーティーン”と栓抜きを覚えてもらう」

「えーとルーティーンとは零先輩がグレイフィアさんに使ったアレですか？」

「あれは“アルティメットルーティーン”すべてを支配する王の所作、究極のルーティーンだ。お前はまず普通のルーティーンからだ」

「はい。後栓抜きとは？」

「骨や関節を外す技だ。並みの集中力では出来ないから心しろよ？」

「はい」

「よしまず、ルーティーンから始めるぞ」

この日一日零は裕斗と小猫に居合と、ルーティーンを教えた（裏のチャンネルを使ったので実質5日である）リアス達は夕麻達墮天使組

も含めネオと特訓していた。

翌日

「使い魔？」

「ええ。レイとアーシアも興味あるかなって思ってた」

「ふくんリアスの使い魔はコウモリだったよな？ 紅色の」

「ええ、そうよ」

そう言うとりアスの手元にリアスの髪と同じ色のコウモリが現れた。

「私のはこの子ですわ」

朱乃は手のひらサイズの鬼を呼び出した。

「シロです」

小猫は白くて可愛い子猫だ。

「僕のはこの子だよ」

裕斗は肩に小鳥を乗せていた。

コンコン

リアス達を使い魔の紹介をしていると、誰かがドアをノックした。

「どうぞ、空いているわ」

「失礼します」

「アンタ確か生徒会長の・・・」

「支取蒼那改め、ソーナ・シトリーです」

入って来たのはリアスと同じ上級悪魔シトリー家次期当主のソーナだった。

「やっぱりアンタ達生徒会メンバーも悪魔だったか。全員アンタの眷属ってところか？」

「おい魔訶！ 会長になんて口の利き方してるんだ!! 会長は上級悪魔なんだぞ!!」

「サジ、控えなさい。貴方では魔訶君には勝てませんよ」

「会長なに言っているんですか、俺は『兵士』の駒四つ消費したんですよ」

「魔訶君は人の身でありながら、不死の能力をもつフェニックスを倒したのですよ。貴方では勝てません」

「で、でも・・・」

「それに彼はグルメアイランドの主です」

「か、会長、今グルメアイランドの主って・・・もしかして魔訶が？」
「ええ、魔訶君がグルメアイランドの主です。その力はフェニックス家三男の眷属を一瞬で倒し、その主ライザー・フェニックスを赤龍帝の籠手の禁手で倒す程です」

ソーナの説明を聞き匙元士郎は驚きを隠せなかった。

「それにしてもリアス。貴女までもがいえ、貴女達の身に何があったの？十日前とでは全く違います」

「レイとその師匠2人のお陰よ」

「魔訶君と魔訶君の師匠の？」

「ええ。私達は十日間、実質一ヶ月間グルメアイランドで修行したの」

「え!?グルメアイランドの中では時間の流れは違うの」

「その説明は俺がする」

零はソーナと匙にグルメ細胞から島のフルコース、師匠の珍師範と千代の事を説明した。その時千代の名で2人は驚いた。

「つ、つまりリアス先輩達が強いのはその細胞のお陰って事ですか？」

「そうね。私のフルコースはジュエルミートとオゾン草だけしかないけど何時か揃えるわ。今よりももっと強くなってるね」

「魔訶君もまだ揃ってないのですね」

「ああスープ、魚料理、肉料理、デザートは決まっているが、前菜（オーダブル）、メイン、サラダ、ドリンクはまだだ。だがメインの食材は決まっている」

「そ、その食材って・・・」

匙に聞かれ零は言った。

「島のフルコースのメインでもある『GOD』だ」

「!!!!!!?!」

「GOD・・・それが全ての食材の頂点で食材の神」

「ああ、前菜のC（センター）と共にまだ現れない食材だ」

「そのセンターとは？」

「究極の蘇生食材だ。一説では死者の蘇生も可能とか」

「「「「?!」」」」」

死者の蘇生が可能と聞き全員驚いた。

(ん? 朱乃と裕斗の心拍数が大きく揺らいだな、この揺れは大切な人を失くしたのか?)

零は朱乃と裕斗の揺らぎに気づいたがあえて声を掛けなかった。

「まあ今度グルメアイランドを案内してやるよ」

「今からではないのですか?」

「今から使い魔を捕まえに行くんだ」

「そうでしたか。では私達は失礼します。サジ行くわよ」

「はい会長。またな魔訶」

「おう」

「さ、私達も行きましょう」

そう言い魔法陣で転移した。

「ここか・・・」

零達は薄暗い森にいた。

「ん?」

「ゲツぼぎゃ!!」

零は後ろから近付いてきた人物を髪で優しく殴り飛ばした。

「レイ何やってるの!?!」

「いやついな。グルメ界では100分の1秒たりとも油断は禁物なんだ。初めての場所だったからつ手を出してしまった。大丈夫かアンタ?」

「ああ大丈夫だ」

(おいおい手加減したとはいえもう復活するとはどんだけタフなんだ・・・)

「俺の名前はマダラタウンのザトウジ! 使い魔マスターを目指しているー!」

(おいおい思いきりポ○モンのパクリじゃねえーか! この世界にもあるのか?)

「オススメとかはあるのか?」

「俺のオススメはこいつ、五大龍王唯一のメス『天魔の業龍（カオス・カルマ・ドラゴン）』のティアマツトだ」

『ほうティアマツトか懐かしいな』

「知っているのかドライグ？」

『ああ俺達二天龍と五大龍王は面識があるんだ』

「ほう。ティアマツトか会ってみたいな」

それから零達は使い魔の森を回りアジアは『蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）』に懐かれ飼う事にした。

そして帰り際にティアマツトが姿を現した。

「懐かしい匂いがすると思ったらドライグではないか」

『久しいなティアマツト。丁度いい時に現れたな』

「丁度いいだど？」

「お前がティアマツトだな」

「そう言うお前は今代の赤龍帝だな」

『ティアマツト今代の相棒は今までと違うぞ。何て言ったってあのグルメアイランドの主なんだからな』

「なっ!!それは本当か!!」

「ああ本当だ」

「なら私の主に相応しいな。お前名は？」

「魔訶零だ。零でいいぞ」

「では零、私を使い魔にしないか？」

「俺は人間だから、仲間でもいいか？」

「仲間か・・・いいだろう。零の仲間になろう」

こうして零はティアマツトを仲間と迎えた。

龍達集合!!

ティアマットを仲間にした零はグルメアイランドに戻り、ティアマット（人型）と共にグルメアイランドを回っていた。リアス達はネオに鍛えられている。

「2回目だがここには強い猛獣が多いな」

「一度来たことがあるのか？」

「ああ。その時は巨大な馬に威圧され、身の危険を感じて逃げたんだ」

「その馬は九王の一角だから仕方ないな」

「その九王とは何だ？」

「此処グルメアイランドの獣の王達だ。お前が見たのは馬王ヘラクレスだ。他にも狼王ギネス、鯨王ムーン、鳥王エンペラークロー、猿王バンビーナ、蛇王マザースネーク、鹿王スカイディア、狐王スノーそして今から会いに行く竜王デロウスだ。因みに狐王は俺の家族だ」

「あの馬の他に同格が八体か・・・」

「後お前も知っている奴も居るぞ」

「私も知っているだと？誰だ？」

「会えば分かる」

そう言い零とティアマットは竜王テリトリの北東に向かった。

「さてと、おーーい!!いるか!!」

零が大声を出すと前方からデロウスがやって来た。そして・・・

「零ー!!」

物凄い勢いで小さい影が零に抱き着いた。

「我寂しかった。零、来るのが遅い」

「悪りい、悪りい。ここ最近忙しかったからな。いい子にしていたか
オーフィス？」

「ん。我いい子にしていた。零のナデナデ所望する」

「おーいい子、いい子」

「♪~~~~♪~~~~」

零に撫でられオーフィスは気持ちよさそうに鼻歌を歌っている。

「おい零まさかと思うがそいつは・・・」

「ああティアアマットの予想通り、無限の龍神のオーフィスだ」
ウロボロス・ドラゴン

余程衝撃だったのかティアアマットは開いた口が塞がらなかつた。

『しかしここにこれ程のドラゴンが集まるとは、何とも妙な縁だな』

「確かにドライグの言う通り、赤い龍のドライグ。天魔の業龍の」
ウエルシュ・ドラゴン

ティアアマット。無限の龍神のオーフィス。そして竜王デロウス。こ

れだけのドラゴンが一堂に会する事など滅多にないな」

「それよりも零何故オーフィスが此処にいるか説明してくれ」

「ああそれはだな・・・」

零はティアアマットに何故オーフィスがここに居るか話した。そしてティアアマットはある事を聞いた。

「零。リアス達は知っているのか？オーフィスがここに居る事」

「まだ言っていない。時期が来れば教える。だからこの事はリアス達に黙ってほしい」

「お前がそう言うのなら黙っておこう」

「助かる。リアス達はまだここ、グルメ界に入れる実力は無い。だがもう少しで入れる様になる、ティアアマットも修行するか？」

「ああ。頼む」

その後零はオーフィスとティアアマットと共にグルメ界の食材で食事をし、夕方には駒王の自宅に戻った。

翌日

ピンポーン

「来たか」

インターフォンが鳴り零が玄関を開けると、ライザー眷属達がい

た。
『女王』と奴の妹以外の全員か。あの2人はどうした？」

「ユーベルーナ様はライザー様が心配だからと言い、ライザー様の元に残った。レイヴェル様は、ライザー様のお母様とトレードし、今はお母様の眷属だ」

零の問いかけにイラベラが答えた。

「そうか。お前達に最後の確認だ。修業する所はグルメアイランド、

弱肉強食の世界で何時死んでもおかしくない。お前達にその覚悟はあるか？」

零の問いかけに全員が頷いた。

「よし早速グルメアイランドに行つて修行だ。お前達には先にグルメクラゲを食べてもらう」

「そのグルメクラゲって何なの？」

「グルメ細胞のもとで、グルメ細胞とは美味しい物を食べれば食べる程強くなる細胞のことだ。グルメアイランドで生きていくには必要な事だ。そして自分の適合食材を食べれば細胞は進化する」

雪蘭の質問に零は答えた。

「今日することはグルメクラゲを食べ、リアス達の修行を見る事だ。いいな？」

「ああ。私達は教わる側だから君に従うよ」

イザベラの言葉に全員頷きそれを確認した零は裏のチャンネルを発動させグルメアイランドに向かった。

グルメアイランド
美食の島

「ここがグルメアイランドか」

「噂には聞いていたけど怖いわね」

ライザー眷属達は初めて来たグルメアイランドの感想をそれぞれ言った。

「今リアス達はネオのもとで修行中だ」

「そのネオとはここの住民か？」

「いやネオはグルメ細胞の悪魔だ。グルメ細胞の悪魔とは食欲エネルギーが具現化したもので事実上不滅に近い存在だ」

「よくわからんが、凄い奴だつて事だな」

「ふつ、そうだな。見えて来たぞ」

そこでライザー眷属達は驚きの光景を見た。

リアスは消滅の魔力を動物型にし次々にネオに向かって撃ちこんでいて、ネオの頭上には朱乃がおり、特大の雷を何度も落としており、地上では祐斗と小猫がコンビネーションで攻めており、裕斗は魔剣創造と居合切りで攻め、小猫は釘パンチ、栓抜き系の技で攻めていた。

更にネオの背後には墮天使組が光りで出来た槍や剣、などを次々に作りは投げていた。そんな中ネオは全ての攻撃を吸収した。

「最初に比べると強くなっているがまだまだだ。そんなんじやグルメ界入りは出来ないぞ」

「うう、やっぱり適合食材を探さないと駄目ね」

「まあそれも大事だが、それは修行中に見つければ良いと思うぞ」

「レイ!!来たのね」

「今さっきな。今日からライザー眷属達とティアマットも修行に参加だ。先ず一週間以内に食義を習得してもらうつもりだ。リアス達は今度教える側だ」

「どうして?」

「相手に教える事によって自分も復習出来、改善点を見つける事が出来るからだ。まあ最初は俺とネオが基礎を教えるからその後の復習だな」

「分かったわ。彼女達にもグルメクラゲを?」

「ああ、食べてもらう」

「ちよつといいか?」

零とリアスが話していると、カーラミンが入って来た。

「何だ?」

「私達の聞き間違いならいいのだが、ティアマットとは天魔の業龍のティアマットか?」

「そうだが?」

「な、なんで天魔の業龍がいるのよ!!」

と声を大にしてミラは言った。

「何でって俺の仲間だし」

『『『はああああ!!?』』』

仲間だと聞きライザー眷属達は驚いた。

「あーはいはい、紹介するな。ティアマット!!」

「呼んだか?」

零に呼ばれティアマットは現れた。

「今は人の姿をしているがこいつがティアマットだ」

「よろしくな」

「因みに実力はグルメ界でも通用する。力だけならな」

「それは本当なの!?レイ」

「ああ本当だ。その墮天使から話は聞いていると思うが、あそこの環境の変化は著しいからな」

ティアマツトの言葉に、夕麻、カラワーナ、ミッテルトは激しく頷いた。

「そう言う事でこれからはここに居る全員で修行する。いいな?」

『『はい!!』』』

零の言葉に全員返事し修行が始まった。

グルメアイランド設定

北太平洋の中心にあり大きさはオーストラリアより2周り大きい。だがグルメアイランドは特殊な空間と環境で中は島の大きさから考えられないくらい広大である（トリコの世界の大陸が収まっている）

九王（スノー以外）テリトリ

北部、猿王バンビーナ

北東部、竜王デロウス

東部、鹿王スカイディア

南東部、馬王ヘラクレス

南部、狼王ギネス・バトルウルフ

南西部、烏王エンペラークロウ

西部、北西部、蛇王マザースネーク

グルメアイランド周囲とグルメ界の海、鯨王ムーン

グルメアイランドの中心部はトリコの世界で言う人間界。柵があ

りそこから先はグルメ界となっている。

世界に広がった食材は捕獲レベル2、3の物で、尚且つ誰でも取れるもの。猛獣は捕獲出来ない。

悪魔、堕天使でも捕獲レベル10以上の猛獣は捕獲出来ない。

スノーを除く九王達の捕獲レベルは原作より+40000であり、九王達の捕獲レベルは10000以上。因みにスノーは100000。

オーフィスで捕獲レベル約9100位。

グレートレッドで捕獲レベル約10000前後。

二天龍で捕獲レベル約3500前後。

五大龍王で捕獲レベル約2500前後。

超越者で捕獲レベル約2000程。

ネオで捕獲レベル25000。零と融合すれば測定不可。

GODで捕獲レベル15000。

グルメアイランドの主は零。但し転生して五年後（本気を出せばアカシア達も主となる）。

九王達は零を慕っており、スノーの事もかつており、九王として迎えた。

零が連れて来た者以外がグルメアイランドに手を出そうとすると、そのエリアの九王が排除に向かう。

グルメアイランドは特殊な磁場によって衛星からの画像、映像。また魔法や魔術等の異能の力を使って情報を得ることが出来ない。更に上空はマザートルネードがあり海側からしか入れない。（上空から入れるのは五大龍王クラスではないと厳しい）

グルメ界へ

「さて昨日グルメクラゲを食べてもらって、適合したみたいだし今日から食義の修行に入る。いいか？」

『『はい!!』』』

零の言葉にライザー眷属達は返事した。

「今日お前達とティアマツトは俺とネオが食義の基礎を教える。墮天使組は俺達のサポートだ」

「じゃレイ私達は？」

「リアス達は食材を採って来てくれ。今の實力なら4人の力を合わせればある程度は大丈夫だと思おうしな」

「分かったわ」

「アジアは仕込みな」

「はい！頑張ります!!」

リアス達4人は食材を採りに、アジアは仕込みの為に移動した。

「さて食義の基本は心の在り方だ」

「心の在り方？」

「そつ。悪魔にはイメージしづらいが、神社などで参社する際その瞬間は真剣に拝むが、終えた途端にその気持ちが薄れてしまうだろう？」

「つまり剣の試合中は集中するが、終わるとその集中が切れるという事だな？」

「まあそんな感じだ」

カーラメインが自分の思った事を言い、零が認めたので他の者達も納得した。

「よしネオ裏のチャンネルを10日で頼む」

「分かった」

ネオは裏のチャンネルを発動させ零達をいれた。

「さて。今いる空間は外と時間の流れが違う。外で1日たった時ここは10日経っている」

「そんな事が可能なのか!?!」

「ああ。島のフルコースの魚料理、肉料理、デザートを食べると裏の

チャンネルが使えるようになる。ここへの移動手段でもある」

「アレとこれは同じ物だったのか・・・」

「そうだ。よし始めるぞ！」

『『はい／ああ／うん!!』』』

ライザー眷属＋ティアマトの食義修行が始まった。

その頃リアス達はグルメ界の入口に当たる崖に居た。

なぜリアス達がここに居るかと言うと、リアスが・・・

「今の自分達の実力がどこまで通用するか、確かめたくない？」

と朱乃、小猫、裕斗に言い3人とも賛成したからだ。

「この先がグルメ界・・・」

「ふふふ、食義を習得した私達なら・・・」

「・・・大丈夫だと思います・・・」

「それに寒さと低酸素にも適応していますし」

「さあ行くわよ!!」

「二はい部長!」

4人は翼を広げ崖から飛び降りた。

(今の私達の力を試してみる!)

ビュゴオツ

「二ん?」

ゴオ

「二!!!?」

急に風圧が来て、そのまま崖に追突した。

「な、なに・・・」

リアス達が見たのは、遠くで恐竜みたいな猛獣が鼻から空気の弾を
発射していた光景だった。

「こ、の!!」

次々と空気の弾に当たり、止んだ瞬間リアスが消滅の魔力を投げる
が届かず消滅してしまった。

「くうっ、上等じゃない!とことん闘ってあげるわ!!!」

リアス達4人はそのまま落ちつて行つた。

「いったい何メートル落ちたの……」

「あの速度で数分……」

「……そんな場所があるのですか?……」

「それよりもここは一体……」

パキパキ

「カロロ……」

起き上がった時に口を3つ持つ巨大な虎『阿修羅タイガー』が現れた。

リアス達は食べられそうになる間一髪で避けた。避けた時に体重が何倍になったような感覚に襲われた。

阿修羅タイガーはリアス達を踏み潰そうとして、裕斗が無理やり体を動かして竜王で斬つた。

「ゴアア!!」ビュツ、バチイ

阿修羅タイガーは斬られた事に怒り、尻尾でリアス達を弾き飛ばした。

数百メートル飛ばされリアス達は『キンググレントラー』の腕に当たり止まった。

「な、何!? 目から血が……」

「手足も痺れてきた……?」

「ヒゴアアア!!」

「ハッ!? ……10連釘パンチ!!!」

キンググレントラーが腕を振り下ろしてきたので、小猫は自身の最大で打てる10連釘パンチで応戦した。しかし倒れるがダメージをあまり受けてない。

キンググレントラーが立ち上がったタイミングで阿修羅タイガーが現れ、2頭が組合その衝撃でリアス達はまた弾き飛ばされた。

次にリアス達が飛ばされた場所は巨大なサボテンがあり、異常に暑

い場所だった。

「ここは……?」

「体の重みがなくなりましたわ……」

「はい。手足のシビれも、目からの出血も止まりましたけど……」

「……暑いです。異常なほど……」

話していると体の水分がなくなり干からび始めた。

「このサボテンから水を貰いましょう」

そう言い裕斗がサボテンを切ると、サボテンのトゲがボツと射出されまた飛ばされた。

「また……体が重い……」

「それに今度は霧……どうなってるのよ!!この世界は!」

再びリアス達に体が重くなる現象が起こり、霧が発生した。

ドツ、ザアアアア

「今度は急に雨が!」

今度は雨が降って来てスコールより激しいまるで水のミサイルが落ちて来る滝みたいになり、必死に外に出た。

外に出るとトゲトゲの猛獣が口を開けて襲い掛かって来た。

(これがグルメ界……なんて厳しい洗礼なの……)

シュコン——

その音がした瞬間その猛獣は倒れた。

「その紅髪……成程零が言っていた者達か。何事も『準備』は大事じゃよ。リアス・グレモリーよ」

そこにはリーゼントで髪が黒くなっている次郎がいた。

「あ、あなたは……」

「この猛獣の名はマミュウ。常に集団で行動し危険が迫るとすぐに、尋常じゃない数の仲間を呼ぶ」

ザザザザザ、ドドドアツ

「チキキー」

「キキーツ」

すると物凄い数のマミュウが現れ次郎に襲い掛かった。

ジャキ ジャキン

次郎が威嚇すると2頭はカタカタと震えた。

「フッフッフツツ……威嚇ノツキングってどこかのおく？グレモリー君」

「ハ、ハハハ……凄い……」

リアス達4人と次郎、それと次郎に合流した節乃が自己紹介をした。その時、節乃の名を聞いてリアス達は予想していたが驚いた。

「ムッフフ、お主らも無茶をするの〜」

「零からは何を習たんじゃ？」

「食義と寒さと低酸素です」

「まだまだだな。そんなので“グルメ界”に入るとは、死に行くようなものだ」

「でも私達は……！」

リアスが話していると手刀の斧で首を刎ねられそうになり、慌てて避けた。

「油断したな。今死んでたぞ」

「な、何をするの……」

「此処では集中力を限界まで高めたまま常に維持してなければならん……100分の1秒たりとも油断は禁物じゃ。常に周りを観察し警戒し続ける……まずそれが“基本”!!警戒を怠った時点で“グルメ界”では死ぬようなものだ」

「け、警戒はしているわ。ただ体が重いのだ!!」

「当然じゃここは海拔がマイナス2万メートルの場所その名も『アングラの森』地球の核に近い分重力がより強く作用しておる。今ワシらの体重は地上の数倍じゃろう」

「そ、それで……」

「2万メートルも私達落ちていたのですね」

「心配はいらん君達なら零の修行をこなせばすぐこの重力にも対応する」

「あの目から出血し手足が痺れる場所があったのですが、それは一体……」

「……後とても暑い場所や」

「滝の様な雨が降る所などは……」

裕斗に続き小猫と朱乃も聞いた。

「む、お主ら『エアツリー』に近づいたのか？」

「エアツリー？」

「実から空気を生産する不思議な樹じゃ、しかし空気中に含まれる気体をバラバラに生産するから……たまに体積比がズレることがある。目の出血や手足の痺れは通常よりも酸素が多く生産した為、酸素濃度が高過ぎると体内組織は破壊されてしまうからのう」

「逆に酸素で良かったわ……」

「炭素ガスや一酸化炭素だったらお終いでしたわ……」

「因みにエアツリーの『実』は『食材』でもあるんじや。『超特殊調理食材』じゃがのう……他にも小さい嬢さんが言ったのは『ヒートプラネット』という不思議な食材だ。それ自体が強い引力を持つ為その近辺は地上と変わらない重力になり楽に動けるが……その代わり近づけぬ程の強い熱波を放出するがのう……。黒髪の嬢さんの言っていたのは『フォールツリー』獲物が樹の下に入るとたちまち葉から水のミサイルをぶつけ、獲物を殺してそのまま根から養分として吸収する」

「こ……これがグルメ界……!!」

「ジロちゃんの話は終わったかい？」

「ああセツちゃん今終わったところじゃ」

「ほれ皆乗りなさい。あたしやがこのリムジンクラゲで送って行ってやるじよ」

その後リムジンクラゲに乗りリアス達は零の家に向かった。

月光校庭のエクスカリバー 聖剣

「……………」

「……………」

今リアス、朱乃、裕斗、小猫は正座させられている。リアス達の前には零が仁王立ちのまま無言でリアス達を見ている。

夕麻達墮天使組は「あーあ」と言う顔をしていて、ライザー眷属とティアマットは困惑してアーシアはおろおろしていた。

「……自分達の力を試そうとしたのか？」

「……はい……………」

「……ハッキリ言うが！食義に寒さと低酸素だけで“今のままで”はグルメ界入りは無理だ。その身で実感しただろう？」

「ええ。次郎さんがいなかったら私達は死んでいたわ」

「今後は俺の許可なしでグルメ界入りするのを禁じるいいな？」

「……はい……………」

「お前達もだぞ。特に夕麻」

『『は、はいっ!!』』

リアス達に釘を刺した零は夕麻達の方を向き、前歴のある夕麻と新参のライザー眷属にも釘を刺した。

「リアス達の罰はそうだな……精神的苦痛として教会の掃除だ。いいな？」

「……………はい……………」

リアス達は受け入れるしかなかった。

教会には零を始め今回の罰の対象でもあるリアス、朱乃、裕斗、小

猫。それに元々関係のあったアジアと夕麻達墮天使達もいた。

ティアマツトとライザー眷属はグルメアイランドでネオと特訓中である。

掃除中にこの教会の管理者であると思われる男性と男の子のような女の子の園児が写った写真を見つけた。その写真特に裕斗は男性の持つ剣を憎悪の目で見ていた。

「おい裕斗この剣がどうかしたのか？」

「・・・これは聖剣だよ」

その日以降裕斗の様子はおかしい。まるで少し前のリアスみたいだ。聞いても誤魔化して教えてくれないし、何だが危ぶい感じがする。

パン！

球技大会も終わりザーツと雨音に混じって乾いた音が響く。リアスが裕斗を叩いたからだ。

祐斗は競技中にボケつとしていて非協力的だった。

「裕斗最近変だがどうした？」

零は帰ろうとした裕斗に声を掛けた。

「キミには関係ないよ」

「そんなことはない。同じ食卓で飯を食べた仲間なんだ心配するだろう」

「仲間か」

「ああ」

「キミは熱いね。・・・零君、僕はねこここのところ基本的な事を思いだしていたんだよ」

「基本的な事だと？」

「ああ、そうさ。僕が何のために戦っているか、を」

「リアスの為じゃないのか？」

「違うよ。僕は復讐の為に生きている。聖剣エクスカリバー。それを破壊するのが僕が戦う意味だ」

強い決意を秘めた表情で裕斗はそう言った。

裕斗は帰り道土砂降りの中、傘を差さずに歩いていると以前零によってボコられたフリードが聖剣エクスカリバーを持ち現れ交戦した。

裕斗がフリードと遭遇している時零はリアスから聖剣計画の事を聞いていた。

「クソだな教会の連中は。命を何だと思ってるんだ」

零は話を聞き沸き立つ怒りを鎮めようと必死になっていた。零は転生の影響でトリコの感性が強い分、命の尊さを知っているからこそ怒りを抱いていた。

アーシアは教会がそんな事していると知りショックを受けた。

話を聞き零とアーシアは先に家に帰った。すると家の前で白いローブのようなものを着込んだ2人組が立っていた。

「君はここの家の者か？」

「ああそうだが、お前達は？」

「此処ではなんだ中でいいかな？」

「ああいいぞ(アーシア、あの2人は恐らく教会の関係者だ。話は俺がするから部屋に居ろいいな?)」

(はい。分かりました。零さんも気をつけてくださいいね)

(おう)

2人組を居間に案内し普通のお茶を出した。

「それで用件はなんだ？」

「私達が用があるのはリアス・グレモリーだ。彼女はここに住んでいと聞いたのだが？」

「リアスならまだ学校だ。何でも生徒会長に大事な話があると云われてたが」

「そうか・・・」

「間が悪かったわね」

「ああ。恐らく私達の事を話しているのだろう」

「何の話が知らねえがリアスに何の用だ？教会の連中が」

「おや私達は教会の所属だとは言っていないが？」

「その恰好を見れば大抵は教会の人間だと分かるぞ」

「それもそうだな。所で君はリアス・グレモリーとはどのような関係なんだい？」

「俺はリアスの協力者だ。そう言えば名乗ってなかったな。俺は魔訶零だ」

「私はゼノヴィア・クアルタだ。カトリック教会に所属している」

「私は柴藤イリナ。プロテスタント教会に所属してるよ」

短めの青髪に緑色のメッシュを入れている女性から言い、その後栗毛ツインテールの女性も名乗った。

「さてリアスに用って事は、この町を縄張りになっている悪魔であるリアスに何だかの要求があるって事だろ？」

零の言葉に2人は驚いた。

「何故分かったのだい？」

「リアス達悪魔を殺すならこんなメンドクサイ事はしないだろ？だからだよ」

「君の言う通りだ。話はまたの機会にするよ」

「なら明日の放課後に尋ねてこい。話は俺が通しておく」

「助かるよ」

そう言い2人は帰って行った。

「もう大丈夫だぞ」

「零さん！」

零が部屋に入るとアーシアが抱き着いてきた。

「零さん大丈夫でしたか!?何処かお怪我していませんか!？」

アーシアはそう言い零の全身を隅々まで見て怪我がないか確認し

た。

「話しただけだ。それにあいつ等に後れを取るほど軟じゃない」

アーシアはその言葉で安心し、晩飯の支度に取り掛かった。

千代の手ほどきを受けアーシアの調理技術は既に（トリコ世界の）5つ星シェフを越えていた。零はアーシアなら確実に十星クラスまで行くと確信していた。

晩飯前に帰って来たりアスに零とアーシアは抱きしめられ零はリアスに話したことをそのまま話した。

そしてその翌日の放課後の部室にて会談が開かれようとしていた。

聖剣VSナイフ

昨日零に接触したゼノヴィアとイリナは学園の放課後にリアス達を尋ねた。

部室にはリアス達グレモリー眷属と零とアジアが揃っていた。

零は今にも飛び掛かりそうな裕斗を横目で見て、動いたら直ぐに抑えられるようにしていた。

「先日、カトリック教会本部ヴァチカン及び、プロテスタント側、正教会側に保管、管理されていた聖剣エクスカリバーが奪われました」

最初に話を切り出したのはイリナだった。

「待て。その話だとエクスカリバーは複数あるのか？」

「聖剣エクスカリバーそのものは現存していないわ」

零の疑問に答えたのはリアスだった。

更にイリナとゼノヴィアが答え、折れた刃の破片から新たに作った7本の内の2本「破壊「エクスカリバー」デストラクションの聖剣」と『擬態「エクスカリバー」ミミックの聖剣』を見せた。

「破壊に特化したのと、変幻自在って事か・・・」

「その通りだ。君は中々の洞察力だな」

「まあ育った環境のせいだ」

零は話している時に裕斗からのプレッシャーを感じており警戒していた。

「・・・それで、奪われたエクスカリバーがどうしてこんな極東の国にある地方都市に関係あるのかしら？」

「カトリック教会、プロテスタント、正教会に各2本ずつ保管されていたが、各陣営1本ずつ奪われた。奪った連中は日本のこの地に持ち込んだって話だ」

「残りの1本はどうしたんだ？」

「残りの1本は神、悪魔、堕天使の三つ巴戦争の折りに行方不明になったんだ」

6本のエクスカリバーは各陣営にあると分かり、残りの1本の事を零が聞くと再びゼノヴィアが答えた。

「それでエクスカリバーを奪ったのは？」

「奪ったのは『神の子を見張る者』だよ」

リアスの問いにゼノヴィアが答え、それを聞いたリアスは目を見開いた。

「奪った主な連中は把握している。グリゴリ幹部のコカビエルだ」

「ほう」

ゼノヴィアの答えに零は口角を上げた。

「随分と大物が出て来たな。それでお前達の要求はなんだ？」

「私達の依頼いや、注文とは私達と墮天使のエクスカリバー争奪の戦いにこの町に巢食う悪魔が一切加入してこないこと。つまりそちらは今回の事件に関わるなど言いに来た」

零の言葉にゼノヴィアが答え、それを聞いたリアスの眉が吊り上がった。

「それは私達が墮天使と手を組んで聖剣をどうするかもしれないと言う牽制かしら？」

「本部は可能性がないわけではないと思っっているんでね。上は悪魔と墮天使を信用していかないからな。手を組めば双方に利益がある。それゆえだ」

「私は墮天使と手を組まない。魔王の顔に泥を塗るような真似はしない！」

「それが聞けただけでもいいさ」

リアスの言葉を聞き部室を出ようとしたが、2人の視線が一箇所に集まる。

そこにいたのはアーシアだった。

「魔訶零の家で出会った時、もしやと思ったが、『魔女』アーシア・アルジェントか？まさか、この地で会おうとは」

ゼノヴィアが『魔女』と言うとアーシアはビクツと体を震わせた。それから2人はアーシアを罵倒し、遂にはゼノヴィアがエクスカリバーを突きだした。

「そこまでだ」

と、零がアーシアを庇う様に前に立った。

「これ以上アーシアの事を悪く言えば容赦せんぞ」

零は殺気を出して2人を睨みつけた。

「僕にもやらせてくれないか」

特大の殺意を体から発して、裕斗は剣を携えていた。

「誰だ、君は？」

「君達の先輩だよ。――失敗だったそうだけどね」

ゼノヴィアの問いかけに不敵に笑って答えた。

旧校舎近くに結界を張りその中で零と裕斗とゼノヴィアとイリナが対峙していた。他の者達は結界の外で見ている。

ことの発端は零が2人にアジアに謝罪させる為に戦い、零が勝てば2人はアジアに謝る事になった。そして裕斗も零と共に戦う事になった。

「それじゃ始めるか」

零がそう言うのとイリナとゼノヴィアは白いローブを脱ぎ、ボンテール風の黒い戦闘服姿となった。

「イリナは魔訶零と。私は先輩とやらとやる」

「分かったわ」

ゼノヴィアの言葉にイリナは領きエクスカリバーを日本刀のカタチにした。

「行くぞドライグ！」

『ああ』

赤い閃光を放ち、零の左腕に赤龍帝の籠手が現れた。

「……『神滅具』」
ロンギヌス

「それって、『赤龍帝の籠手』？こんな極東の地で赤い龍の帝王の力を宿した者に出会うなんて……」
ウエルシュ・ドラゴン

ブーステッド・ギアを見てイリナとゼノヴィアは顔をしかめた。

「零君に気を取られていると、怪我では済まなくなるよー」

ギーン！

裕斗がゼノヴィアに斬りかかり、魔剣と聖剣が火花を散らす。

「向こうも始めたか。こっちも行くぞー！」

『Boost Boost Boost Boost Boost!! Expl

Osion!!』

零は一気に5回増した。

「そんな!? ブーステッド・ギアは10秒ごとにしか増しない筈なのにどうして!!?」

『裏のチャンネルをブーステッド・ギアに覆う様にするとは、考えたな相棒』

そう零はブーステッド・ギアの周りに裏のチャンネルを発動されたいムラグをゼロにしたのだ。

「はあ!! ナイフ!」

「くっ!」

零の攻撃をイリナは本能が危険と察知し避けた。

「連射型フライングナイフ!」

イリナは避けるのを無理だと判断し日本刀から大楯に変えて防御した。

「判断は良いが、足を止めたのが間違いだ」

零はイリナの背後に立っており、首筋に右手を当てていた。

「・・・私の負けね」

イリナは両手を上に挙げそう言った。

一方裕斗とゼノヴィアの方は・・・

「くっ・・・」

「先輩とやらの力はその程度か?」

苦痛の表情の裕斗と比べゼノヴィアはまだ余力がある表情で裕斗に問いかけた。

「裕斗がここまで押されるなんて、強いわね彼女」

「いいやそうじゃない」

「? どう言う事レイ?」

「今裕斗は食義が乱れている。感情的になれば食義は乱れるものなんだ」

「つまり今の裕斗は本来の力が出せないのね」

「そう言う事だ。それにアレで決着が着いたな」

全員が裕斗の方を向くと、裕斗は巨大な剣を持ってゼノヴィアに振るうが、ゼノヴィアのエクスカリバーに破壊され、裕斗の腹部に聖剣の柄頭が深く抉りこみ裕斗は倒れた。

「先輩、次はもう少し冷静になって立ち向かってくるといい。さて魔訶零。次は私と手合わせを願う」

「まあ両者一人ずつ勝ってるしな。いいぜ」

「そう言い零は構えた。

「ナイフ!!」

「!!」

零のナイフにゼノヴィアはエクスカリバーで受け止めた。

「あう（何だ!!?手刀でエクスカリバーを・・・）」

エクスカリバーに零のナイフが当たった所が欠けた。

「流石聖剣と言った所か。俺に傷を付けるとは。まあこれで終わりだ」

「そう言い零はゼノヴィアを組み伏せていた。

「ああ私の負けだ」

「なら」

「分かっている」

「そう言いゼノヴィアとイリナはアジアに謝罪した。

「あ、そうだゼノヴィア、エクスカリバーを貸してくれ。その欠けたのを直す」

「治せるのか?」

「ああ。問題ない」

「そうかなら頼む」

「任せとけ」

ゼノヴィアからエクスカリバーを受け取った零は裏のチャンネルに入っている、メルクの星屑を取り出し、エクスカリバーを研いだ。

「ほら元道りになったぞ」

「・・・本当だ。いったいなんだいそれは?ただの砥石と言うわけではないのだから?それに先程の空間は・・・」

「企業秘密だ悪いな」

「そうか。なら無理には聞かない。リアス・グレモリー、先程の話よろしく頼むよ。それと魔訶零。ひとつだけ言おう。『パニシング・ドラゴン白い龍』は既に目覚めているぞ。いずれ出会うだろう。その時君達はどんな戦いをするのか楽しみだ」

そう言いゼノヴィアとイリナは立ち去った。

共同戦線

「ところでレイさっきの砥石は何なの？ エクスカリバーを研ぐなんてただの砥石ではないわよね？」

ゼノヴィアとイリナが出て行った後、リアスが零に聞いた。

「ああ。これが今度リアス達に採って来てもらうメルクの星屑だ」

「これが!？」

「ああ。流石エクスカリバーだな結構粉が出た」

「「ゴクリ」」

「言つとくがやらんからな。次の修行が終わったら許可する」

「上等よ!!絶対にとつて来るわ!!」

「頑張れよ」

「因みに零さん研ぐものは何ですか？」

「竜王デロウスの牙だ」

「え!?九王の一角の竜王ですか？」

「そうだ。デロウスの牙を研いでアーシア専用の包丁にする」

「はわわ!わ、私の包丁ですか!いい、今のでいいですよ!!」

「いや、アーシアは気づいていないけど、今のアーシアの調理技術はセツ婆と千代さんの半分位だ。この調子でいけばあの2人を越えるかもしれない」

「・・・凄いですアーシア先輩」

「はうう・・・わ、私なんか恐れ多いです・・・」

「つて事でメルクの星屑の前に裕斗をどうにかしないと」

裕斗はゼノヴィアとイリナが出て行って直ぐにいなくなっていた。

休日零は小猫と呼ばれ駅前に向かった。なんでも零にお願いがあるそうで零一人で来て欲しいと言われた。

駅前に着くと小猫と会長眷属の『^{ポーン}兵士』の匙が居た。

「待たせたな小猫。それと何故匙も一緒なんだ？」

「暇そうだったので連れてきました」

「暇だったのか？」

「あ、ああ今日は生徒会の方も悪魔の方も特にする事なくって休みなんだ。で、俺は散歩してたら・・・」

「小猫と出会った訳だ」

「そうだ」

零は匙が居る理由を聞き納得した。

「呼んだ理由は裕斗の事か？」

「はい」

「ならやる事は一つだ」

「それは何ですか？」

「聖剣エクスカリバーの破壊許可を柴藤イリナとゼノヴィアからもらうんだ」

零の言葉に匙と小猫は目を丸くして驚いた。

「嫌だああああ！俺は帰るんだああああ！」

悲鳴をあげて逃げようとしている匙だが、小猫に捕まれ逃げられなくっていた。

零がエクスカリバー破壊作戦を提案すると、小猫はしばし考えてから協力を申し出た。

「魔訶なんで俺なんだよ!?!」

「ここにいたからだ。なに、ただではない協力してくれるならグルメアイランドの食材で料理を作ってやる」

「!・・・で、でも会長にバレたら・・・」

「協力してくれたら私のオードブルをご馳走します」

「何なら俺のデザートもつけてやるぞ」

「ゴクリ・・・塔城のオードブルと魔訶のデザートってなんなんだよ?」
「小猫のオードブルはBBコーンと言うトウモロコシで、成熟したコーンはビルの高さ20階位に相当し、一粒だけでもバスケットボールより大きいんだ。これをポップコーンにすると100人前に相当する。圧倒的な香ばしさとコクがあり、一口食べたら食べるのを止められなくなるほどの食欲増進効果に優れているしろものだ」

「ゴク・・・」

零の話聞き匙は喉をならした。

「次の俺のデザートは虹の実と言い気温や湿度によって七色に味を変え、口にすると体内で味が次々に変化する。また25メートルプールの水に果汁をたった1滴たらずだけでプールの水全てが芳醇なジュースに変わるほどの高い果汁濃度を持ち、蒸発した果汁は空気中に虹を作るほどだ。1個でそうだな5億の値が付くと思うぞ」

「ドバー」

匙は涎が滝のように出ていた。

「で？どうする協力するか？」

「ああ！協力するが先にどちらか食べさせてくれ!!」

「そうだなじゃグルメアイルランドに行つて食うか」

そう言い裏のチャンネルを使いグルメアイルランドに向かった。この時匙はグルメアイルランドの食材が楽しみで裏のチャンネルの事を聞かなかつた。

グルメアイルランド 美食の島

グルメアイルランドに到着した零達。今回は直接零の家に来た。

「お帰りなさいませ零様。塔城殿。そちらの方は初めてですね。私は零様配下の墮天使ドーナシックと申します」

「さ、匙元士郎です」

「ドーナシック俺はBBコーンの調理に行つてくる。匙に何か適当な物でも出してくれ」

「畏まりました」

零はウール火山に向かった。

「な、なあ塔城何で墮天使が此処にいるんだ？」

「アーシア先輩の時に色々ありまして、今は4人共此処に住んでいます」

「4人もいるのか!?」はい。後ライザー眷属も居ます」

「はiiiiiiii!!」

ガチャ

「なんだ騒動しい。ん？小猫どうしてここに？」

匙の叫び声を聞いてティアマツトが入って来た。

「実は・・・という事なんです」

小猫は今までの経緯を話した。

「ほうエクスカリバーか」

「ところで貴女は？」

「私は天魔カオス・カルマ・ドラゴンの業龍のティアマツトだ。今は零の仲間だ。貴様は黒邪プリズン・ドラゴンの龍王ヴリトラの所持者だな」

「え？これってそんなに凄いの？」

「私と同じ五大龍王の一角だ」

「え？ええええええええ!!？」

ティアマツトの言葉に先程より大きな声で叫んだ。

ガチャ

「さつきから何よ。うるさいわよ」

「つてか誰すつか？」

「誰？誰？」

「侵入者か？」

叫び声を聞いて夕麻達も入って来た。

その後小猫が事情を説明し零の家にあるもので軽く昼食を取る事にした。

「いーな塔城達は。何時もこんな美味いもん食えて」

「私達もまだグルメアイランドの食材全部食べた事ないんですよ」

「特にグルメ界の食材はね」

「グルメ界？」

「そうっす。柵の向こうの事でとっても危険な所でその分美味しい物が沢山ある所っす」

「零を除いてここにいる奴等で強さだけなら、私だけがグルメ界に入れる」

「でもグルメ界は力だけでは攻略出来ません。瞬時に特殊な気候や気象に身体が適応出来ないと駄目なんです」

「じゃ、今魔訶が向かったのはグルメ界なのか？」

「いいえ。零様が向かったのは北にあるウール火山なのでグルメ界ではありません」

ガチャ

「戻ったぞ。お、全員いるな丁度いい手伝ってくれ」

零が戻って来て全員が外に出た。

「ぎゃあああああ!!なんじゃこれ!!」

匙はスノーを見て驚いた。

「俺の相棒で家族のナインフォックスのスノーだ」

「コーン」ペロペロ

零が紹介するとスノーは匙に顔を近づけ舐めた。

「さあBBコーンのポップコーンを喰うぞ！」

『『『おおくく!!』』』』

「匙今からするのを真似てくれ。この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます!!」

『『『この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます!!』』』』

「こ、この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます!!」

零の後に小猫達匙も続いて合掌しBBコーンのポップコーンを手にとった。

「す、すげえデカさ・・・ポップコーンてより綿アメみたいだ・・・」

「すうーはあくく香ばしい・・・揚げたてのコロッケみたい」

「はあいきなり丸呑みしちゃったす」

「美味しすぎて、すぐに飲み込んでしまう!!」

「噛むと風味が増しさらに深い味になったわ」

「喉越しもなめらかで、普段のポップコーンのようにひっかかる感じが全くない」

それぞれが感想を言いあつという間にポップコーンを食べ終えた。

「さて匙、俺達の本来の目的を遂行するぞ」

「おお分かった!俺に任せてくれ!!」

「なんかノリノリだな」

零は苦笑いでそう言った。

「当たり前だ!これが終わったらデザートが食えるんだからな!!」

「よし行くか。お前らも修行頑張れよ」

『『はい!!』』

零は夕麻達にそう言い匙と小猫を連れ駒王町に戻った。

駒王町に戻った零達はイリナとゼノヴィアを探してすぐに見つけた。見つけたが・・・

「えー、迷える子羊にお恵みを〜」

「どうか、天に変わって哀れな私達にお慈悲をおおお〜!」

路頭で祈りを捧げる2人組。零達は一瞬声を掛けるか迷ったが声を掛ける事にした。

「うまい!日本の食事はうまいぞ!」

「ああ〜これぞ、故郷の味!しかも流石高級店ね!」

あの後「飯食いに行くが、お前達もどうだ?」と訊くと一発で頷いた。最初グルメアイランドに行こうと思ったが墮天使組4人がいる為、節乃がオーナーを務める高級店に入った。そしてよっぽど空腹の2人と小猫と匙に好きさだけ奢った。

「で、私達に接触した理由は?」

「単刀直入に言う。エクスカリバー破壊に協力したい」

零の告白に2人は目を丸くさせて驚き、互いに見合わせた。

「そうだな。一本位任せてもいいだろう。破壊できるのであればね。ただし、そちらの正体がバレないようにしてくれ」

「ゼノヴィアはそう言っているがお前はそれでいいかイリナ?」

「ええ。貴方の力なら異論はないわ」

「お前達の上にはドラゴンとグルメアイランドの主の力を借りたと言っておけばいいだろう」

「ちよつと待てグルメアイランドの主だと?」

「まさか貴方が・・・」

「その通り。俺は今代の赤龍帝でもあり、グルメアイランドの主だ」

「驚きだ強いと思ったがまさかグルメアイランドの主とは」

「って事はグルメアイランドの食材を何時も食べてるの？」

「ああ」

「羨ましい・・・」

「俺はドラゴンの力を貸す。じゃあ、今回の俺のパートナーを呼ぶぞ」

零は裕斗に連絡を取り、裕斗は渋々共同作戦に参加した。

今零、裕斗、小猫、匙、イリナとゼノヴィアの6人の共同戦線が結成された。

木場の過去

裕斗が合流し『聖剣計画』の責任者の名を明かされてから、裕斗からある事を聞いた。

「先日襲撃されただと？しかもエクスカリバーを持っていたのか」

「うん。相手はフリード・セルゼン。この名に覚えは？」

裕斗の言葉にゼノヴィアとイリナが同時に目を細める。

「成程、奴か」

「フリード・セルゼン。元ヴァチカン法王庁直属のエクソシスト。13歳でエクソシストとなった天才。悪魔や魔獣を次々と滅していく功績は大きかったわ」

「だが奴はあまりにやりすぎた。同胞すらも手にかけてのだからね。フリードには信仰心なんてものは最初から無かった。あつたのは化け物への敵対意識と殺意。そして、異常なまでの戦闘執着。異端にかけられるのも時間の問題だった」

「話はここまでだ。とりあえず、エクスカリバー破壊の共同戦線といこう」

「そう言いゼノヴィアはメモ用紙にペンを走らせ、連絡先を零に渡した。零も同じように連絡先をメモ用紙に書き、ゼノヴィア達に渡した。」

「食事の礼、いつかするぞ。赤龍帝の魔訶零」

「そう言って2人は出て行った。」

「・・・零君。どうしてこんなことを？」

「同じ食卓で飯を食った仲間だろ？捨ておけるかよ」

「・・・私もです。私は裕斗先輩がいなくなるのは・・・寂しいです。・・・お手伝いします。・・・だから、いなくならないで」

小猫は少し寂しげな表情を浮かべ裕斗に言った。

「ははは。まいったね。小猫ちゃんにそんな事を言われたら、僕も無

茶出来ないよ。分かった。今回は皆の好意に甘えさせてもらおうかな」

「裕斗二つ言っておく。怒れしかし冷静にな、そして感謝を忘れるな怒れる事に感謝するんだ。この意味はお前は分かっている筈だ」

「そうだね」

「なあ木場とエクスカリバーがどう関係してるんだ？」

手を挙げながら匙が訊いてきた。

「少し話そうか」

コーヒーに口をつけたあと、裕斗は自分の過去を語った。

カトリック教会が秘密裏に計画した『聖剣計画』。聖剣に対応した者を輩出するための実験が、とある施設で執り行われていた。

被験者は剣に関する才能と セイクリッド・ギア 神器を有した少女少女。

来る日も来る日も辛く非人道的な実験を繰り返すばかり。

散々実験を繰り返され、自由を奪われ、人間として扱われず、裕斗達は生を無視された。

彼等にも夢があった。生きていたかった。神に愛されていると信じ込まされ、ひたすら『その日』が来るのを待ち焦がれた。

特別な存在になれると信じて。聖剣を使える者になれると信じて。て。

三百六十五日、毎日毎日何度も何度も聖歌を口ずさみながら、過酷な実験に耐えたその結果が『処分』だった。

「・・・皆、死んだ。殺された。神に、神に仕える者に。誰も救ってはくれなかった。『聖剣に適応できなかった』、たったそれだけの理由で、少年少女達は生きながら毒ガスを浴びたのさ。彼等は『アーメン』と言いながら僕らに毒ガスを撒いた。血反吐を吐きながら、床でもがき苦しみながら、僕達はそれでも神に救いを求めた」

逃げおおせた裕斗は、死ぬ寸前でリアスに出会い今に至ると言う。「同志たちの無念を晴らしたい。いや、彼等の死を無駄にしたい。僕は彼らの分も生きて、エクスカリバーよりも強いと証明しなくてはいけないんだ」

「うううう・・・」

裕斗の話を聞き終わるとすすり泣く声が匙から聞こえた。

号泣しており、ボロボロ涙を流して、大泣きしていた。匙は裕斗の手を取り言う。

「木場！辛かっただろう！キツかっただろう！ちくしょう！この世に神も仏もないもんだぜ！俺はなあああ、今非常にお前に同情している！ああ、ひどい話さ！その施設の指導者やエクスカリバーに恨みを持つ理由もわかる！わかるぞ！俺はイケメンのおまえが正直いけ好かなかったが、そう言う話なら別だ！俺も協力するぞ！ああ、やってやるさ！会長のしごきをあえて受けよう！それよりもまずは俺達でエクスカリバーの撃破だ！」

「匙もやる気になって何よりだ。明日の放課後に公園に集合しろ。フリードを炙り出すぞ」

「でもどうやってだ？」

「それは考えている。兎に角リアスと会長にバレないようにしろよ」

零の言葉に3人も頷いた。

余談だが会計の時金額を見て3人共酷く驚いた。特に小猫と匙は何割かは自分たちなので、申し訳なさそうな表情となった。

翌日の放課後零達は公園に集まった。

「よし、集まったな。では全員これを着ろ」

そう言い出したのは神父やシスターの服だった。

「着替えたな。よし、手分けして探すぞ」

「戦力を考えるなら零君一人にしても、僕達全員でも過剰だよね……」
「……そうですね」

「今回は3チームに分かれる。一組目は教会の2人。二組目は悪魔の3人。そして三組目は俺一人だ」

「君一人で大丈夫なのか？」

零が組み合わせを言うのとゼノヴィアが聞いてきた。

「この前の事忘れたか？俺は一人で十分だ。それにフリードの匂いは覚えてるからな」

「匂いだと？」

「ああ。俺は五感が良いからな、奴の匂いを覚えているんだ」

その後3チームに分かれ人気のない場所を回る事になった。

時間は過ぎていき裕斗達は人気のない路地にいた。

「・・・裕斗先輩」

先頭を歩いていた裕斗が立ち止まり、小猫も何かを感じた。

「上だ！」

匙の叫びに全員が上空を見上げると、長剣をかまえた白髪の少年神父が降って来た。

「神父の一団にご加護あれってね！」

ギイイイン！

佑斗が素早く魔剣を創り出し、少年神父フリードの一撃を防いだ。そこに小猫が釘パンチを繰り出したがフリードは裕斗達の前に移動し釘パンチを避けた。

「伸びろラインよー！」

ビューツ！

匙の手元から黒い細い触手らしきものがフリード目掛けて飛んでいく。

「うぜえっすー！」

フリードは薙ぎ払うが軌道を下に変え、フリードの右足に張り付き、そのままグルグルと巻き付いた。

その好機を裕斗はホーリー・イレイザー光喰剣を両手に持ち斬り合うが、フリードの聖剣によって碎け散る。

次に裕斗は腰に差していた竜王と騎士の特性のスピードで仕掛けた。

「俺さまのエクスカリバーは『エクスカリバー・ラビッドレイ天閃の聖剣』！速度だけなら、負けないんだよツツ！」

「隙ありだ！」

一瞬の隙を見逃さず匙の手の甲のトカゲの舌がフリードの体を引つ張り、同時にトカゲの舌が淡い光を放ち始めフリードの力を吸収していく。

「ほう、『ソード・バース
セイクリッド・ギア魔剣創造』か？使い手の技量次第では無類の力を発揮する神器だ」

佑斗がエクスカリバーを破壊しようとした時第三者の声がして、こちらに視線を送れば、神父の格好をした初老の男が立っていた。

「・・・バルパーのじいさんか」

「・・・バルパー・ガリレイツ！」

憎々しげに裕斗はバルパーを睨む。

バルパーの指摘でフリードは匙の拘束を解き逃げようとする、佑斗達に援軍が来た。

「逃がさん！」

援軍の正体はゼノヴィアとイリナだった。

「バルパーのじいさん！撤退だ！コカビエルの旦那に報告しにいくぜ！」

そう言いフリードは閃光弾使い逃げた。

「追うぞイリナ」

「うん！」

「僕も追わせてもらおう！逃がすか、バルパー・ガリレイ！」

ゼノヴィアとイリナ、それに裕斗がこの場を駆け出した。

「たく、あいつ等深追いはするなって言ったのにな」

「魔訶!？」

「零先輩!？」

更に零も合流した。

「魔訶あいつ等を追わねえと！」

「いや。説明が先だな」

「そうね。しっかり説明してもらわねレイ」

零が何を言っているか分からなかったが、聞こえて来た声に小猫と匙はビクツと震えた。そして恐る恐る振り返ると険しい表情のリアスと会長の姿があった。

墮天使幹部襲来!

「・・・エクスカリバー破壊って貴方達ね」

額に手を当て、極めて機嫌が悪いリアス。

あの後近くの公園に連れていかれ、零は立ったままだが、小猫と匙は噴水の前で正座させられた。

「サジ。貴方はこんなにも勝手な事をしていたのですね? 本当に困った子です」

「あうう・・・。す、すみません、会長・・・」

会長の方も冷たい表情で匙に詰め寄っていた。匙の顔色は危険なほど青い。

「それで裕斗はそのバルパーを追って行ったのね?」

「ああ。ゼノヴィアとイリナも一緒だと思う」

「あの2人にはどう接触したの?」

「路頭に迷っていた所に接触し近くにあったセツ婆の店で飯を奢っただけだ」

「えっ? ちょっと待って頂戴、セツ婆? もしかして節乃さんのお店?・・・小猫、貴女も食べたの?」

「・・・サジ?」

節乃の店と聞きリアスと会長はそれぞれ重たい声で小猫と匙に聞いた。小猫は躊躇いながら頷き、匙は更に顔を青くさせた。

「魔訶君、代金はどうしたのですか?」

代金の事を聞かれ小猫と匙はビクツと肩を震わせた。

「たったのこれくらいだったから、俺が全て出した」と指を7本折った。

「こおくねえ〜こおく!!?」

「さあ〜じい〜!!?」

「あ、安心しろ7割はゼノヴィア達だから」

「逆に3割は小猫達なのね」

リアスが小猫の事を見ていると・・・

ベシッ!ベシッ!

「貴方には反省が必要ですね」

匙は会長に尻を叩かれていた。しかも会長の手には魔力が籠っていた。

「うわああああん！ゴメンなさいゴメンなさい！会長、許してくださいさあああいいー！」

「ダメです許しません。勝手な事をしただけではなく、私やリアスですら予約をする事が出来ない節乃さんのお店で食事をして、あまつさえ魔訶君に奢ってもらうとはどういう事ですか！罰としてお尻叩き二千回です」

ベシッ！ベシッ！

「零への罰は私達にご馳走を作る事。勿論私達のフルコース食材を使って」

「いいぞ。取り敢えず、これを先に食つとけ」

と裏のチャンネルからBBコーンのポップコーンを出した。

「ゼノヴィア達と会う前に作ったからまだ新鮮だぞ」

零の言葉に会長が反応した。

「・・・サジ？まさかと思いますが。グルメアイランドの食材を食べたのですか？」

会長の笑みは誰が見ても恐怖を抱くものだった。

「えくと・・・」

「正直に答えなさい!!？」

「食べました!!？めっちゃ美味かったです!!？」

「そうですか・・・お尻叩き千回追加です」

「うわああああん！許してください!!」

ベシッ！ベシッ！ベシッ！ベシッ！

「・・・使い魔を裕斗探索に出されたから、発見次第部員全員で迎えに行きましょう」

「ああ」

尻叩きされている匙を横目で見ながら解散し、各自家に戻った。

「ただいま」

「お、お帰りなさい零さん、部長さん」

2人を出迎えたアーシアはエプロン姿だった。だが肌の露出が必要以上に多いことから零はある可能性に辿り着いた。そして疲れたような声で聴いた。

「ハア、アーシア誰に聞いたそれ？」

「桐生さんからです。日本のキツチンに立つときには、は、裸にエプロンだって・・・は、恥ずかしいですけど・・・に、日本の文化に溶け込まないとダメですから。そ、それにちゃんと下に下着は着けてません。スースーしてます・・・あうう」

よし桐生潰すと零は心の中でそう思った。ただでさえリアスに感化されエロい方に流される天然娘なんだしと思いいリアスの方を向くと嫌な予感がした。

「成程、その手があったわね。少し待ってなさい。私もそれをやってみるわ!!」

「待て待て！張り合うんじゃないよ!!」

零はヘアロックでリアスの動きを封じた。

アーシアに服を着せ落ち着いてから夕食を食べた。

その日の深夜、零は知っている匂いがして目が覚めた。同時に凄いいプレッシャーを感じリアスも目覚めた。

外に出るとフリードがいた。

「久しぶりだなクソ神父。また殴られに来たのか？」

零の問いかけにもフリードは嘲笑しながら肩をすくめるだけだった。

それと同時にプレッシャーのもとに気付き空を見上げた。そこには月をバツクに空に浮かんでいる者。

「はじめましてかな、グレモリー家の娘。紅髪が忌々しい兄君を思い出して反吐がでそうだよ」

その者は挑発的な物言いでありアスに言った。

「ごきげんよう、堕ちた天使の幹部——コカビエル。私の名前はリアス・グレモリーよ」

「こいつは土産だ」

コカビエルが投げてきたのはフリードを追いかけた柴藤イリナだった。ボロボロだったイリナを零はアーシアに渡し治療させた。

「俺達のアジトまで来たのでな、それなりの歓迎をした。二匹逃したかな」

零がイリナの方を見るとエクスカリバーを持っていない事に気付いた。

「魔王と交渉などというバカげたことはしない。まあ、妹を犯してから殺せば、サーゼクスやセラフォルの激情が俺に向けられるのかもしれないな。それも悪くない」

リアスは侮蔑したような目でコカビエルを睨む。

「・・・それで、私との接触は何が目的かしら？」

「お前の根城である駒王学園を中心にこの町で暴れさせてもらうぞ。そうすればサーゼクス達も出てくるだろう？」

「様は戦争の続きがしたい為エクスカリバーを盗んだって事か」

「そうだ！俺は三つ巴の戦争が終わってから退屈で退屈で仕方がなかった！アザゼルもシエムハザも次の戦争に消極的でな。だから俺はお前の根城で聖剣をめぐる戦いをさせてもらうぞ、リアス・グレモリー。戦争をするためにな！サーゼクスの妹とレヴィアタンの妹の通う学び舎だ。戦場としては丁度いい」

「ひやははは！最高でしょ？俺のボスって。イカレ具合が素敵に最高でさ。俺もついつい張りきっちゃうのよお。こんなご褒美までくれるしね」

フリードが取り出したのはエクスカリバーだった。しかも両手に一本ずつ、腰にも二本帯剣している。

「右のが『天閃の聖剣』《エクスカリバー・ラピッドリィ》、左のが『夢幻の聖剣』《エクスカリバー・ナイトメア》、腰のは『透明の聖剣』《エクスカリバー・トランスペレンシー》でございます。ついでにその娘さんから『擬態の聖剣』《エクスカリバー・ミミック》もゲットしちゃいました！もう一人の女の子が持っている『破壊の聖剣』《エクスカリバー・デイストラクション》もゲットしたいところですね」

「エクスカリバーをどうする気なの!？」

「ハハハ！戦争をしよう、魔王サーゼクス・ルシファアの妹リアス・グレモリーよ！」

リアスが問うがココビエルは十枚の翼を羽ばたかせ学園の方に向かった。

「レイ！学園に向かうわよ！」

「おう！」

墮天使幹部との大決戦が始まろうとしていた。

『騎士（ナイト）』の覚醒

零達が学園に着くと木場を除くグレモリー眷属と生徒会が集結した。現在匙がリアスに現状報告している。

「私と眷属はそれぞれの配置について、結界を張り続けます」

「ありがとう、ソーナ。あとは私達が何とかするわ」

「リアス、相手は桁違いなバケモノですよ？」

「グルメアイランドの九王達には及ばないわ。それに私達はレイに修行をつけてもらったのよ、そう簡単にはやられないわ」

「俺もいるしな」

ソーナのバケモノ発言にリアスは九王を引き合いに出し、簡単にやられないと言った。零も自分もいると言うとソーナは呆れた表情をして零達に任せた。

校庭に入ると、校庭の中央に四本の剣が神々しい光を発しながら、宙に浮いており、それを中心に怪しい魔法陣が校庭全体に描かれていた。

「これはいったい・・・」

「四本のエクスカリバーをひとつにするんだよ」

零の疑問に魔法陣の中央にいるバイパーが答えた。

「バルパー、後どれぐらいでエクスカリバーは統合する？」

「五分もいらんよ、コカビエル」

「そうか。では、頼むぞ」

宙で椅子に座っているコカビエルが聞くとバルパーは五分と答えた。

「サーゼクスは来るのか？それともセラフオールか？」

「いいえ。貴方の相手は私達よ。お兄様達の手は煩わせ・・・」

リアスがそう言い終わる前にコカビエルは巨大な光の槍を体育館に向かって投げたが・・・

「そう簡単にはいかないぞ」

零が裏のチャンネルを使い光の槍を止めた。

「ほう。人間にしてはやるではないか」

「敵の親玉に褒められても嬉しくねえーよ」

「人間風情が・・・まあいい。余興として地獄から連れて来た俺のペットと遊んでもらおうかな」

コカビエルが指を鳴らすと魔法陣から三つの首を持つ犬が複数現れた。

「「ギャオオオオオオオオオオンツツ!!」」

犬達が同時に吼え、辺り一帯を震わせた。

「——ケルベロス！」

「ほう、地獄の番犬か。お前達は下がっている」

リアスの言葉でその犬の正体を知り、零はリアス達に下がるように言った。

ケルベロス達は一齐に零に襲い掛かろうとした。

「俺と噛み合うか？犬・・・!!」

零がグルメ細胞の悪魔と威嚇するとケルベロス達は悲鳴を出しながら我先にと魔法陣に走って行く。

「ふん、他愛ない。ん？」

ケルベロス達が魔法陣に詰めかけているのを見ていると一匹だけ震えながら零に近づいてきた。

「キャン」

ケルベロスは零の前に立つと、仰向けになり腹部を差し出した。それの意味はつまり・・・

「服従か」

そう言いながら零はケルベロスの腹を撫ぜた。

(俺の威嚇に震えながらも逃げないとは・・・こいつは化けるかもな)と零は心の中でそう思った。

「・・・驚いたな。まさか威嚇だけでケルベロス達を退けるとはな」

コカビエルが感心した風に言った。

「加勢に来たぞ」

「遅くなってゴメン」

聞き覚えの声の間こえ振り返るとゼノヴィアと裕斗が聖剣と魔剣

を携えて歩いてきた。

「――完成だ」

バルパーの声が聞こえそちらを見ると、四本のエクスカリバーがあり得ない程の光を発し始めた。

「四本のエクスカリバーが一本になる」

零達が身構えているとコカビエルは空中で拍手をしそう言った。

光りが収まると、校庭の中央に青白いオーラを放つ一本の聖剣があった。

「エクスカリバーが一本になった光で、下の術式も完成した。後二十分もしない内にこの町は崩壊するだろう。解除するにはコカビエルを倒すしかない」

バルパーが衝撃的な事を言った。

「フリード！」

コカビエルがフリードの名を呼ぶ。

「はいな、ボス！」

暗闇の向こうから、白髪の少年神父・フリードが歩いてきた。しかし服装は神父服でありながら防具を着用していた。

「陣のエクスカリバーを使え。最後の余興だ。4本の力を得たエクスカリバーで戦って見せろ」

「ヘイヘイ。まーったく、俺のボスは人使いが荒くてさ。でもでも！
チョー素敵仕様になったエクスカリバーちゃんを使えるなんて光荣の極み、みたいな？ウへへ！ちよつくら、人外と悪魔でもチヨツパ―
しますかね！それに“最強の防具”があるし！」

イカれた笑みを見せながら、フリードが校庭のエクスカリバーを握った。

「リアス・グレモリーの『騎士』^{ナイト}、共同戦線が生きているならあのエクスカリバーを共に破壊しようじゃないか」

「いいのかい？」

「最悪、私はあのエクスカリバーの核になっている『かけら』を回収出来れば問題ない。フリードが使っている以上、あれは聖剣であって、聖剣ではない。聖剣とて、普通の武器と同じだ。使う者によって、場

合も変わる。——あれは異形の剣だ」

「バルパー・ガリレイ。僕は『聖剣計画』の生き残りだ。いや、正確には貴方に殺された身だ。悪魔に転生した事で生き永らえている」

至って冷静に告げる裕斗だったが、その瞳は憎悪の炎が宿っていた。

「ほう、あの計画の生き残りか。これは数奇なものだ。こんな極東の国で会う事になろうとは。縁を感じるな、ふふふ。——私はな。聖剣が好きなのだよ。それこそ、夢にまで見るほどに。幼少の頃、エクスカリバーの伝記に心を踊らせたからなのだろうな。だからこそ、自分に聖剣使いの適性が無いと知った時の絶望と叫びたならなかった」

小馬鹿にしたかのような口調の後に急に自身の昔を語り始めた。

「自分では使えないからこそ、使える者に憧れを抱いた。その想いは高まり、聖剣を使える者を人口的に創りだす研究に没頭するようになったのだよ。そして完成した。君達のおかげだ」

「何？完成？僕達を失敗作だと断じて処分したじゃないか」

眉を吊り上げ、怪訝な表情で裕斗は言った。

「聖剣を使うのに必要な因子がある事に気づいた私は、因子の数値で適性を調べた。被験者の少年少女、ほぼ全員に因子があるもの、どれもこれもエクスカリバーを扱える数値に満たなかったのだ。そこで私は一つの結論に至った。ならば『因子だけを抽出し、集める事はできないか？』——とな」

「成程。読めたぞ。聖剣使いが祝福を受ける時、体に入れられるのは——」

「そうだ。聖剣使いの少女よ。持っている者達から聖なる因子を抜き取り、結晶を作ったのだ。こんな風に」

ゼノヴィアの言葉を肯定したバルパーは懐から光り輝く球体を取り出した。

「これにより聖剣使いの研究は飛躍的に向上した。それなのに教会の者共は私だけを異端として排除したのだ。研究資料だけを奪ってな。貴殿を見るに私の研究は誰かに引き継がれているようだな。ミカエルめ。あれだけ私を断罪しておいて、その結果がこれかまあ、あの天

使の事だ被験者から因子を抜き出すにしても殺すまではしていないか。その分だけは私よりも人道的と言えるな。くくくくくくく」

愉快そうにバルパーは笑う。

「―同土達を殺して、聖剣適性の因子を抜いたのか？」

裕斗が殺気の籠った口振りでバルパーに訊く。

「そうだ。この球体はその時のものだぞ？三つほどフリード達に使ったがね。これは最後の一つだ。この因子は貴様にくれてやる。環境を整えばあとで量産できる段階まで研究はきている」

裕斗に向かって因子の結晶をバルパーは放り投げた。裕斗は静かに屈みこんで、それを手に取った。

「・・・皆・・・」

裕斗の頬を涙が伝っていく。その表情は悲哀に満ち、そして憤怒の表情も作り出していた。

その時、裕斗の持つ結晶が淡い光を帯び始めた。光は徐々に広がって行き、校庭を包み込むほどに拡大した。校庭の地面、その各所から光が浮いて来て。少年少女のカタチを成していく。

「皆！僕は・・・僕は！・・・ずっと・・・ずっと、思っていたんだ。僕が、僕だけが生きていいのかなって。僕より夢を持っていた子がいた。僕より生きたかった子がいた。僕だけが平和な暮らしを過ごしているのかなって・・・」

『自分達の事はもういいよ。君だけでも生きてくれ』

魂だけの少年の一人が微笑みながら、裕斗に何かを訴えていた。口をパクパクしているだけで言葉は聞こえないが零達には分かった。

魂の少年少女達が口をパクパクとリズムカルに同調させている。歌を歌っているようだ。

「―聖歌」

アーシアがそう呟いた。

『僕らは一人ではダメだった――』

『私達は聖剣を扱える因子が足りなかった。けど――』

『皆が集まれば、きつと大丈夫――』

『聖剣を受け入れるんだ――』

『怖くなんてない——』

『たとえば、神がいなくても——』

『たとえば、神が見ていなくても——』

『僕達の心はいつだって——』

「一つだ」

彼等の魂が天に昇り、ひとつの大きな光となって裕斗の元へ降りてくる。やさしく神々しい光が裕斗を包み込んだ。

『相棒』

「ああ」

ドライグの言葉に零は頷いた。

『あの「騎士」^{ナイト}は至った。あの時の相棒の様に』

「懐かしい感覚だな」

闇夜の天を裂く光が裕斗を祝福している様に見えるながら零とドライグは話した。

『騎士（ナイト）』の決着

「バルパー・ガリレイ。貴方を滅ぼさない限り、第二、第三の僕達の生を無視される」

「ふん。研究に犠牲はつきものだと言っただけで昔から言うではないか」

光りが治まり裕斗は立ち上がりバルパーに向き合って言った。

「裕斗。今こそ過去との決着を付けろ！お前なら出来る！」

「裕斗！やりなさい！自分で決着を付けるのエクスカリバーを越えなさい！貴方はこのリアス・グレモリーの眷属なのだから！私の『騎士』はエクスカリバー如きに負けはしないわ！」

「裕斗くん！信じてますわよ！」

「・・・裕斗先輩！」

「フアイトです！」

零君、リアス部長、朱乃さん、小猫ちゃん、アーシアさん。皆。ありがとう。

「僕は剣になる。部長、仲間達の剣となる！今こそ僕の想いに答えてくれッ！ソード・バース魔剣創造ッツ！！」

僕のセイクリッド・ギア神器と同士の魂が混ざり合う。同調し、カタチをなしていく。

魔まる力と聖なる力が融合していった。

「バランス・ブレイカー禁手『ソード・オブ・レイトレイヤー双覇の聖魔剣』。更に」

裕斗の手に現れたのは、神々しい輝きと禍々しいオーラを放つ一本の剣だった。更に裕斗はその剣に重ねる様に竜王を置くと更に光が強くなり、治まると剣は刀の形になっていた。

「聖魔刀・『竜帝』。聖と魔を有する刀の力、その身で受け止めるといい」

僕はフリード目掛けて走り出した。

ガキイイーン！

僕の一撃はフリードの左腕の防具で受け止められた。自画自賛じゃないけど、聖魔刀なら切れると思っただけど、予想外だ。

「危ねえ危ねえ。この防具じゃなかったら斬られてたね。これをくれ

た「ブルー」って人に感謝だね」

「・・・おい、それはコカビエルから貰った物じゃないのか？」

「全然違いますよ。顔はフードで見えなかったですけど、ブルーって名乗ってましたよ。それにこの防具はそんなじよそこらの防具なんかと全然違いますよ。なんせあのグルメアイランドの猛獣から作られた防具なんですから。その人曰く『生きた魚雷と呼ばれる海の暴れ亀、「クラツシユタートル」で甲羅の強度と耐久性の高さは指折り、鉄の数倍の硬度を誇り剛性や靱性にも優れてる』らしいですよ」

零から問われた事を自慢するかの様に答えてからフリードは統合されたエクスカリバーの能力を使い裕斗に襲い掛かったが裕斗はフリードの攻撃を全ていなし罅迫り合いになる。

「そうだ。そのままにしておけよ」

横殴りにゼノヴィアが介入してくる。左手に聖剣を持ち、右手を宙に広げた。

「ペトロ、バシレイオス、ディオニシウス、そして聖母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ。その刃に宿りしセイントの御名において、我は解放する。デュランダル！」

空間が歪みその中心にゼノヴィアが手を入れ引き出したのは、エクスカリバーに並ぶほど有名な聖剣デュランダルだった。

「デュランダルだと！」

「貴様、エクスカリバーの使い手ではなかったのか！」

これにはバルパーばかりか、コカビエルもさすがに驚きを隠しきれない様子だった。

「イリナ達現存する人工聖剣使いと違って私は数少ない天然ものだ。デュランダルは想像を遥かに超える暴君でね、異空間に閉じ込めておかないと危険極まりないのさ。使い手の私ですら手に余る剣だ。さて、フリード・セルゼン。お前のおかげでエクスカリバーとデュランダルの頂上決戦が出来る。一太刀目で死んでくれるなよ？せいぜいエクスカリバーの力を存分に揮うことだ！」

裕斗の聖魔刀と同等のオーラを纏ったデュランダルが振り下ろされるが防具でガードされる。

「むう。このデュランダルで斬れないとはなかなか固いな」

「いくらデュランダルでもこの最強の防具は斬れないぜ！」

「ゼノヴィア頼みがある」

フリードからいったん距離を取った裕斗はゼノヴィアにあるお願いをした。

現在フリードと戦っているのはゼノヴィア一人だった。裕斗は刀を鞘に戻しリラックスの姿勢でいた。

(前に零君は言っていた。体全体の力を抜けば抜くほど、居合のスピードと破壊力は増すと。最高の脱力と最大の怒り。零君のあの言葉、怒って良いが頭は冷静に……この一撃に全てをかける!!!)

数分で完全なる脱力が完成した。それに気が付いたゼノヴィアはフリードから離れた。

「あ?もう終わりですか?クソビッチ」

「ああ。後は彼に任せる」

そう言いゼノヴィアが裕斗の方を見ると釣られてフリードも裕斗の方を見た。

「なら先にあのクソ悪魔をチョッパーしますかね！」

「そう言い裕斗に向かって行ったフリード。」

「死ねクソ悪魔!!」

「はああああああー!!!」

一閃。竜帝を抜いて鞘に納めるまで、その速さは一瞬零でも見えなかった。

「(え……な……なに……?)」

「君の防具の『素材』……確かクラッシュユタートルと呼ばれる亀の甲羅から作られた物だと言っていたね……」

「(速い……!!全く見えなかった……)」

「僕の『武器』の素材も教えてあげるよ」

鞘から少し刃を出して裕斗は言った。

「この刀はある竜の……?牙」を加工して作った物だと零君は言っていた。その牙はこの世のあらゆるものを切り裂きかみ砕く……牙の

持ち主は海に棲む竜の王、名は『レオドラゴン』!!海の暴れ亀『クラツシユタートル』の甲羅を粉碎し捕食する化け物さ!!」

裕斗が語り続けてる間に防具とエクスカリバーから段々不穏な音が聞こえて来た。

「馬鹿な!!き・・・斬られているのですか!?エクスカリバーと最強の防具が!!」

「最高の?脱力」と最大の?怒り・・・この刀を使いこなすにはレオドラゴンと同じ様に完全に気配を断った状態から攻撃への瞬発力が必要だった。零君から貰ったこの刀・・・名刀『竜王』・・・初めてこれの実力を十分に発揮できたよ」

「俺様がこんなところでーー!!」

「居合 ? 竜帝一刀両断!!」ボガアアアア、バキイイイン。

裕斗がそう言い終わるとエクスカリバーと防具が破壊された。

「見ていてくれたかい? 僕らの力は、エクスカリバーを越えたよ」

コカビエルVS零

「居合？竜帝一刀両断」か・・・食義と合わせて無くまだまだ未完成だな裕斗」

「あはは・・・やっぱり。時間だね」

「そうだ。グルメ界ではその隙が命取りになる。実際に経験したお前なら分かるだろう？」

「うん。そうだね」

零は裕斗の居合を見て思った事を言った。

「聖魔刀だと・・・あり得ない・・・反発し合う二つの要素が合わさるなど・・・」

バルパーが裕斗の聖魔刀を見て狼狽えており、それに気付いた裕斗がバルパーに聖魔刀を向けた。

「バルパー・ガリレイ。覚悟を決めてもらおう」

「・・・そうか！分かったぞ！聖と魔、それらを司る存在のバランスが大きく崩れているとするならば説明はつく！つまり、魔王だけではなく、神もー」ズンツ。

バルパーの言葉は途中で終わった。コカビエルが光りの槍で貫いたからだ。

「バルパー。お前は優秀だったよ。そこに思考が至ったのも優れているが故だろうな。だが、俺は貴様がいなくても別にいいんだ。最初から一人でやれる」

宙に浮かぶコカビエルは哄笑を上げ、地に足をつける。

「限界まで赤龍帝の力を上げて、誰かに譲渡しろ」

不敵な笑みを浮かべてコカビエルはそう言った。その言葉を聞いたリアスの眉がピクッと動いた。

「私達にチャンスでも与えるというの!?ふざけ・・・」

「良いだろう。譲渡してやる」

「二〇零（くん／先輩）!!」

リアスの言葉を遮って零が言うとりアス達が声をあげた。

「そうだそれでいい。譲渡するのはリアス・グレモリーか？」

「勘違いするなよ。譲渡するのはお前だコカビエル」

「二二」零（さん／くん／先輩）魔訶!!「二二」

零の発言に今度はアジアとゼノヴィアも声をあげた。

「何?」

零の発言で今度はコカビエルの眉がピクつと動いた。

「リアス達は何もしなくていい俺一人で十分だ」

『Boost Boost Boost Boost Boost!! Expl

o s i o n!!』

裏のチャンネルを発動させて5回の倍増が完了した。

『赤龍帝からの贈り物』

『Transfer!!』

赤龍帝の籠手が光り、倍増した零の力がコカビエルに加算された。

「・・・何のつもりだ?」

「何ってお前にチャンスを与えただけだ」

「ふざけるなよ人間風情が!!」

コカビエルは怒りながら倍増した光の槍を投げた。

「ナイフ!」ズバツ

零のナイフで光の槍は真つ二つになった。

「な、何だど!?倍増した俺の光の槍を手刀で斬っただと!!?」

コカビエルは驚愕した。不本意ながら倍増された光の槍は今まで一番の威力あると分かっていたがそれをバターを斬るようになつさり斬られ狼狽えた。

「コカビエル1つ聞く。お前には地球を破壊できる力があるか?」

「そんな力があればこんな回りくどい事などするか。何故そのような事を聞く赤龍帝よ」

「簡単な事だ俺なら地球を破壊出来るからな」

『』・・・はあああああ!!』』』

「うちの師匠達数人は大体そのクラスだぞ。後ライザー戦は精々一割の力だ。下手するとあの空間が壊れる可能性があったからな」

零の言葉に全員が言葉を失った。

「行くぞ」

そう言った瞬間零は臨戦態勢に入った。

『?!?!』

その瞬間リアス達は、コカビエルが皿の上に乗って赤い鬼がナプキンを付け、ナイフとフォークを持っていてる幻を見た。コカビエル自身も皿の上に乗っている事に気付き目の前の鬼に恐怖した。

チャキイン！チャキイン！　パン！！

零は両手を擦り付けて金属音を鳴らし合掌した。

「舐めるなツ!!」

コカビエルは光の槍を握り高速で零に接近した。

「この世の――全ての食材に感謝を込めて……いただきます」

「死ねえええええ!!」

「フォーク!!」ガツキーン！

「何!?!」

零はフォークで光の槍を受け止めた。

「ナイフ!!!」

零はナイフでコカビエルの左の羽を全て切り裂いた。

「ぐっ！よくも俺の羽を!!」

コカビエルは持っていた光の槍を右手で持ち、左手に新たに光の槍を削り零を貫こうとしたが零が動く方が早かった。

「5連・・・釘パンチ!!!」ドドドドドン

零の拳はコカビエルの鳩尾にヒットした。

「ヌアアアアアア!!」

釘パンチをもろに食らいコカビエルは結界に当たるまで飛び続けた。

「この程度か・・・歴戦の堕天使だからもつとやると思ったが2割程度でこれとは拍子抜けだ」

『『2割いいいいいい!!?』』

リアス達は零の言葉を聞き未だ全力で戦っていない事に驚愕した。

砂煙がはれボロボロのコカビエルがフラフラと立っていた。

「俺をここまで追い込むとはな・・・仕えるべき主を亡くしてまで、お前達神の信者と人間と悪魔はよく戦う」

「・・・どういう事？」

コカビエルの謎の言動にリアスが怪訝そうな口調で訊く。

「フハハ、フハハハハハハハハハハハハハハ！そうだったな！お前達下々まで真相は語られていなかったな！なら、教えてやるよ。先の三つ巴戦争で四大魔王だけじゃなく、神も死んだのさ」

『『——ッ!!』』

無知な者を笑うかの様に笑い、コカビエルは先の戦争の真実を言った。それを聞いた全員が驚愕した。

「・・・嘘だ。・・・嘘だ」

「・・・主がないのですか？主は・・・死んでいる？、では、私達に与えられる愛は・・・」

特に教会出身のゼノヴィアとアーシアのショックは大きかった。

「今はミカエルが神が使用していた『システム』を使って天界を動かしている。システムさえ機能していればある程度作用するしな」

コカビエルの言葉を聞きアーシアがその場で崩れ倒れた。ゼノヴィアも膝をつき、デユランダルと破壊エクスカリバー・デストラクシオンの聖剣が手から地面に落ちた。

「俺は戦争を始める、これを機に！お前達の首を土産にし我だ墮天使こそが最強だとサーゼクスにも、ミカエルにも見せつけてやる！」

拳を天にかざしそう高々に言った。

そんな中、零が静かに話し始めた。

「確かに神はいないかもしれない。だがそれでも俺達は今を生きている」

「・・・何が言いたい？」

「なに、神が居なくも世界は周り続ける。実際神が死んだのは千年前だけでも今まで世界は終わらなかつた。だから俺達は今を生きる俺達の手で明日を未来を作り続ける事が出来る」

零の言葉にショックを受けていたゼノヴィアとアーシアは顔を上げ零をみて感銘を受けていた。2人だけではなく、リアス達も感銘を受けていた。

「思い立った日が吉日！その日以降は全て凶日だ！」

零は笑顔でリアス達に言った。

赤と白の出会い

「戯言は終わりか？」

零が語り終わってからコカビエルはそう言った。

「終わりだなお前の負けで」

「まだ俺は動くぞ？俺を止めたければ殺してみろ!!」

そう言い光の槍を両手に持ち零に向かって走った。

「もうこれ以上お前とは関わりたくない。だから・・・」

「ッ!？」

言葉の途中で零は裏のチャンネルを使いコカビエルの懐に移動した。コカビエルは急に消え、現れた零に驚き硬直した。

「これで終わりだ。∞釘パンチ!!」

「う？ごおおああああああああああっ」

アツパーぎみの拳が鳩尾に直撃しコカビエルは真上に飛んでいった。

真上に飛んで行ったコカビエルは結界にぶつかっても止まらなかった。それどころか釘パンチの衝撃がコカビエルを通して結界をも破壊しコカビエルは更に飛んで行った。

チャキイン！チャキイン！「ごちそうさまでした」

両手を擦り合わせ金属音を鳴らし合掌した。

「レイ!!」

終わったと思いいリアス達が零に駆け寄ろうとしたが次の零の言葉で足を止めた。

「で、お前は何の用だ？」

その言葉を聞きリアス達は零が見ているコカビエルが飛んで行った真上を見た。するとそこには赤ブーステッド・ギア・スケイルメイル龍帝の鎧に似ている白い鎧が浮かんでいた。

それだけでその者の正体が分かった。

「赤い龍」と対を成す者「白パニシング・ドラゴンい龍」。即ち今代の白龍皇だ。

「ふふ、驚いたわ。アザゼルの命令でコカビエルを捕まえに来てみれ

ば既に終わっているのだもの。しかも私の宿敵でもある赤龍帝君がやったのだからね」

声からして女性だという事は分かったがリアス達は動けなかった。その理由としてはリアス達よりも白龍皇の方が強いと直感で感じたからだ。

「コカビエルの捕縛が目的なら残念だったな。奴は俺が駆除した」

「その様ね。止めようとしたけど、止まらなかったから羽だけ回収したわ。この薄汚い色、アザゼルの薄暗く常闇の羽には及ばないわね」

白龍皇は手に持つ羽を見てそう言った。

「後はフリードも回収しないと」

そう言い倒れこむフリードを腕に抱え、光の翼を展開し、空へ飛び立つとうとした。

『無視か、白いの』

籠手からドライグが声を掛けた。

『起きていたか、赤いの』

アルビオンの鎧の宝玉が白き輝きを発していた。

『折角出会えたのにこの状況ではな』

『いいさ、いずれは戦う運命だ。こういう事もある』

『しかし、白いの。以前のような敵意が伝わってこないが?』

『赤いの、其方も敵意が格段に低いじゃないか』

『お互い、戦い以外の興味対象があるということか』

『そう言う事だ。こちらは暫く独自に楽しませてもらうよ。偶には悪くはないだろう? また会おうドライグ』

『それもまた一興か。じゃあな、アルビオン』

別れを告げた両者、最後に白龍皇の女性が零の方を向いた。

「今度は戦いませよ。私の宿敵くん」

言い終わると白き閃光と化して飛び去って行った。

その後祐斗はリアス達に謝り、改めてリアスに誓いを立てた。その後にお仕置きとして手に魔力を纏ったの尻叩き千回を受けるのだった。

コカビエル襲撃事件から数日後

放課後の部室に顔を出した零とアジアはソファに座る外国の女子に驚いた。

「やあ、赤龍帝」

緑のメツシユをいれた女子ーゼノヴィアが駒王学園の制服を身に纏っていた。更に零はゼノヴィアの変化に気が付いた。

「ゼノヴィア、悪魔になったのか？」

「よくわかったな。驚かせようと思ったのだが」

ゼノヴィアの背中から黒い悪魔の翼が生え、ゼノヴィアはそう言った。

「神の不在を教会に問いただしたら異端者として追放されてしまい、リアス・グレモリーに誘われ破れかぶれで悪魔に転生した。今日から高校二年の同級生でオカルト研究部所属だ。よろしく頼む」

「これで聖魔刀の祐斗とテュランダルのゼノヴィアで剣士の二翼が誕生したわね」

リアスはそう上機嫌に言った。

因みにイリナはエクスカリバーの欠片を持って教会に戻ったとゼノヴィアが言った。

「今回の件で近々天使側の代表、悪魔の代表、アザゼルが会談を開くらしいわ。なんでもアザゼルから話したいことがあるみたいだから。そのときにコカビエルの事を謝罪するかもしれないと言われているわ。でも、あのアザゼルが謝るかしら？」

肩をすくめながら、リアスは忌々しそうに言う。

「私達もその場に招待されているわ。事件に関ってしまったから、そこで今回の報告をしないといけないの。特にレイ！ 貴方には何が

何でも会談に参加しなくてはいいかないわ。コカビエルを仕留めたのは貴方なのだし、白龍皇もアザゼルに報告していると思うし」

「だろいな。まあ俺も色々聞きたいことと言いたいことがあるし丁度いい」

零は不敵な笑みを浮かべそう言った。その笑みにリアス達は首をかしげたが次の言葉で吹き飛んだ。

「早速ゼノヴィアの歓迎会をするか。行くぞお前ら」

裏のチャンネルを発動させ先に零が入り続いてリアス達も入って行ったがゼノヴィアは困惑して動けなかった。

「ほら行きますよゼノヴィアさん」

見かねてアールシアがゼノヴィアの手を取り裏のチャンネルの中に入って行った。

グルメアイランド 美食の島

「ここがグルメアイランドか、そこら中から美味そうな香りがするな」
「それはこの島が美食の宝庫だからな。先に俺の家族と同居人達を紹介してから皆で食材を捕りに行くぞ」

零の言葉に全員が頷き最初にスノーやネオ、ティアマツトに堕天使組、ライザー眷属を紹介した。堕天使達がいた事に一波乱起きそうだったが零の説明で事なきをえた。

その後全員で食材を捕りに行った。その際ゼノヴィアは全員の戦闘能力の高さに驚き、質問した。答えたのは零で、その話を聞いたゼノヴィアもグルメクラゲを食べたいと言い零は歓迎会の時に出した。序にゼノヴィアのフルコースが2つ出来た。

ゼノヴィア フルコースメニュー

オードブル (前菜) 【ブロッコツリー】

スープ 【?】

魚料理 【?】

肉料理 【?】

主菜（メイン） 「？」
サラダ 「？」
デザート 「プリン山」
ドリンク 「？」

「まだまだ美味しい物があるのだから？今から楽しみだ！」

「その為には修行しないと、この中では一番下だ。幾ら聖剣デユラ
ンダルを持っていた所で持ち手が未熟なら宝の持ち腐れだからな」
「・・・ああ」

零の言葉で上がっていたテンションは無くなり力なく答えた。

覚悟

「さてと。全員注目！」

ゼノヴィアがリアスの眷属になって一週間が経過した。当初修行に付いていけなかったゼノヴィアは零の裏のチャンネルで修行し、どうにかリアス達と同じレベルになった。そんな中零は全員が聞こえるように呼び掛けた。

「裕斗の件が無事に終わったから、保留にしていたメルクの星屑を採って来てもらう」

この時裕斗は申し訳なきような顔をしていた。

「だが全員で行く訳ではない。ライザー眷属はベジタブルスカイに行ってもらおう」

「ベジタブルスカイ？空の野菜か？」

「まさか空が野菜で出来ているのか!？」

零の言葉に美南風が疑問の声をあげ、カラーマインが見当違いの事を言った。

「ベジタブルスカイって言うのは、標高数万メートルの雲の上にある天空野菜畑のことよ」

「見渡す限り全てが野菜のジュータンになっていますの」

「リアス部長のオゾン草に私のBBコーンなどもそこあるんですよ」

「味が濃厚でドレッシング無しでも十分に食べられるよ」

「それだけじゃないわよ」

「そうっす。BBコーンはビル位の大きさもあるっす！」

「まあ実際に行くのが一番だろ」

「だが、そこに到達するまでが大変だぞ」

ベジタブルスカイに実際に言った事があるリアス眷属と墮天使組はライザー眷属にそう言った。

「ライザー眷属も大変だと思うが、お前達も大変だぞリアス？」

「零よりリアス達が行くところはどんな所何だ？」

リアス達の説明が終わると、零はリアス達に忠告し、ティアマットはどんな場所か聞いた。

「ここ北の山の中にある。その地下数万メートル。その名も『ヘビーホール』。そこは特殊な磁場と気圧の関係からか、地球の引力の影響をより強く受ける場所。人間界で最も地下深い洞窟、そこが『メルクの星屑』の採掘場だ」

リアス達は零の言葉にゴクリと喉を鳴らした。グルメ界に入った事のある墮天使組&リアス達はリベンジが出来ると思った。

「ティアマツトは・・・そうだ！『死季の森』に行つてもらおう」

『『四季の森??:?』』

「四季のしは死のしだ。春夏秋冬からなる四季とは違い死季その森こは獣・溶・霧・凍と言う4つからの季節からなる死季。ここの中でもグルメ界に負けないくらい厳しい環境の一つだ」

零からの説明に全員が顔を厳しい顔をした。

「零。そこはどんな処でどんな季節なんだ?」

全員が黙り込んでいる中、当の本龍のティアマツト質問した。

「その場所自体は特殊な空間になつてゐる為かこつちとの時間軸も裏チャンネルと同じくらい効力があり1日で1月過ごせるつまり1年なら12日だ更に季節の詳細を言うともまず3月〜5月は『獣季』。数百万頭の凶暴な猛獣が目覚める『モンスターシーズン』。猛獣の平均捕獲レベルは60。その中で最も手強いのが『森の魔物』と呼ばれる亀、通称マグマトータスだ。次に6月〜8月は『溶季』。一面に溶岩が噴き出す『マグマシーズン』。地上の気温も70度を超え、空気の熱だけで皮膚は火傷をおこす。次は9月〜11月の『霧季』。1メートル先の視界もきかないほどの濃霧が漂う『ミストシーズン』。霧は毒ガスで1呼吸で呼吸困難。2呼吸で意識障害。3呼吸で心肺停止する猛毒。引火もするぞ。そして最後12月〜2月は『凍季』。-200度のブリザードが全てを凍らせる『フリーズシーズン』。森の刺草をも撒き散らす猛吹雪は3か月間弱まる事は無い。以上が『死季の森』だ」

『『滅茶苦茶危険じゃないか／っすか!!?』』

零の説明を聞き全員が一斉に突っ込んだ。

「面白そうだな」

逆にティアマツトは好戦的な笑みを浮べて言った。

「ちよつとティアマツト！話聞いてなかったの!?聞いていたのに面白
いって、貴女どうかしてるわ!!」

「私を誰だと思ってる？今は人の姿だが私は五大龍王最強の
天魔の業龍のティアマツトだ!!カオス・カルマ・ドラゴンいずれ私は竜王を下すつもりだ、こ
んな所で止まってられない!!」

ティアマツトの決意に一同は息を呑んだ。リアス達はグルメ界攻
略に目標にしていたが、ティアマツトは更にその先を見据えていたの
だ。自分達と覚悟の重さが違うと分かった。

「ティアマツトは既に覚悟は決まっている。あの九王達の一角に挑む
覚悟があるんだ。それに先に言っておくぞ、島のフルコースを巡って
九王達と戦う可能性もある。お前達もグルメ界攻略だけではなく、九
王達と戦う覚悟も持つておくべきだ」

『.....』

直接九王達を見た事があるリアス達は震え、九王達を見ていない墮
天使組にゼノヴィア、ライザー眷属はティアマツトの発言とリアス達
の震えからよっぼどの相手だと認識して息を呑んだ。

「だが今は目の前にだけに意識を向ける。各自今から行くところで足
元を掬われては意味がない。九王達に意識を向けるのはグルメ界に
入ってからにしろ」

「.....分かったわ」

最初に了承したのはリアスだった。

「皆聞いて。確かにレイの言う通り今は切り替えないと、私達は九王
と構える前に、いえ。グルメ界に入るまでに死んでしまうわ。確かに
私達はレイと出会ってから強くなってる、でも私達の力は『今』はグ
ルメ界に通用しないわ。だから今こうやって修行してるじゃない。
レイは私達をグルメ界でも通用出来るよう鍛えてくれるわ。レイだ
けじゃない、ネオさんも、千代さんにも、珍師範にも、次郎さんにも、
節乃さんも私達を鍛えてくれた。もし私達がグルメ界に入る前に死
んでしまつてはその人達の顔に泥を塗る事と同じ事よ。私は恩人達
の顔に泥を塗る事はしたくない。.....だから私は改めて覚悟を決め

る。今は弱いけど、何時か私は全ての九王を倒す!!それが私の“王”
としての覚悟よ!もし貴方達が覚悟を持ってないなら、覚悟を持った私
を信じなさい!!私は絶対にもう折れない!何が何でも実行してみる
わ!!!」

その言葉から確かにリアスの覚悟が伝わって来た。

(一皮剥けたか・・・まさか“王”としても成長するとはな・・・脅し
をかけ過ぎた甲斐はあったか)

と零はそう思った。

「部長だけに背負わせる訳にはいきませんわ」

「はい。僕達も覚悟を決めないと」

「私もです」

「うむ。その九王と言うのは知らないが、強敵なのは分かる。私も心
掛けよう」

「私達ももう昔の私達じゃない!!そうでしょ貴方達?」

「はっ!その通りでございます!」

「もちろんだ!」

「そうっす!」

「私達もライザー様の為に終われない。そうだよな皆!!」

『勿論よ/だ/です/にや』

リアスに続き朱乃達も覚悟を決めた。

「大丈夫みたいだな。なら見事課題をクリアしてみせろ!」

『『了解!!!』』』

リアス達は覚悟を新たに次の目的地に歩み始めた。

ヘビーホール攻略

「さてリアス達も覚悟を決めた事だし、そろそろ全員移動してもらおうぞ」

『『了解!!』』』

零の言葉に全員返事をした。

「ほれこれが地図だ。期待してるぞ」

零はリアス・墮天使組にはヘビーホール。ライザー眷属にはベジタブルスカイ。ティアマットには死季の森への地図をそれぞれに渡した。

渡された地図を頼りに北を向いて歩いていると遂に目的地であるヘビーホールに辿り着いた。

「こんね」

リアスが地図と交互に見て言った。

「行くわよ」

『『はい!／了解!』』』

リアスの掛け声で全員がヘビーホールに入って行った。なおアジアは墮天使組が慎重に抱えて入った。

「アジアどう?」

「右の方がしっかりしています。左は脆く危険です」

食義と千代の指導のおかげでアジアは食材の声が聞こえるようになったのだ。それだけではなく、周りの環境の事も少し分かるようになったのだ。

「ありがとうアジア。観察力のある貴女が居るのは心強いわ。私や朱乃は調理は出来てもまだ食材の声を聴けないからね。貴女の見る景色と私達が見る景色は違うから注意深く進まないね。レイナー

レ、カラワーナ、ミッテルト、ドーナシーク。アーシアを頼んだわよ」
「勿論よ」

「ああ、アーシアには傷一つつけない」

「ウチ等が絶対に守るツス」

「何かあれば零様に申し訳ないからな」

一行はアーシアの指示の元へビーホールを下って行く。

「わあっ……」

「く……」

「この感じ……」

「まだグルメ界程でもないが……」

「……体が重いです」

「この動き辛さに慣れないとね」

「もう1万メートルは下りたと思うツス」

「アーシア大丈夫か？」

「ま、まだ大丈夫です」

「(思った以上に下りる移動は骨ね。同じ距離を登るより大変かもね)

それにこの壁の無数の穴は……」

「はい。獣臭が漂います」

壁にある無数の穴を見てリアスと小猫は警戒した。他の者達も辺りを警戒して、墮天使組はアーシアを真ん中にし四方を警戒する体制をとった。

「何かきますー!」

裕斗の言葉の後直ぐに二つの頭を持つ猛獣が一頭出て来たと思ったら、同じ穴から2頭3頭と出て来て、最終的には無数の穴から無数出て来た。

「これは?裕斗下よ!!」

「!!おっと」

リアスの言葉で下からきた猛獣・バルバモスの噛みつきを躲した。……つもりだった。

左腕が微かに掠っていたのだ。

「かわしたつもりだったけどな……」

「!重力よ!!重力が強い分体の反応が何時もより遅れているのよ。『騎士』の裕斗でそれなのだから、私達はある程度軌道を予測しないと」

「でも部長私達の経験では分かりませんわ」

「確かにそうだわ。でも避けるだけじゃないわよ」

「……防御」

「そう、グルメ界に入って意識し始めたの。強敵と戦う時の防御の重要性に。皆集まって」

リアスの言葉に全員リアスの周りに集まった。

「まだまだ未完成だけど、滅殺盾!!」

リアス達の周りに消滅の魔力の盾が展開され、それに触れたバルバモスが消滅した。

「まだまだ範囲も密度も心許ないけどこの程度の攻撃には耐えられるみたいね。今度レイに見て貰おうかしら」

「凄いですわ」

「さて。次のステージに進みましょうか。小猫」

「はい。15連釘パンチ!!」ド×15

リアスの合図で小猫が自分達が乗っている柱に釘パンチを叩き込んだ。

崩壊と同時にリアスは滅殺盾を消した。そして下に落ちて行った。なおこの時アーシアはレイナーレ達に抱えられている。

ズツ

「くうう……」

「重力が更に増してきましたわ」

次のステージに到着したリアス達は更に重力が増したことで苦渋

の声が出た。

「なんか目眩がしてきました」

「動悸もしてきました」

「頭がガンガンするツス」

「汗も止まらん」

全員がふらつき、倒れそうになって踏ん張った時に足が目に入ってその原因を理解した。

「そうか、血が足に溜まって脳まで回ってないからね」

「うう、ボくつとします」

アーシアの言葉に全員が「はっ」と思った。

(そうね・・・私達に何かあったら・・・アーシアを守る事が出来なくなるわ。自分の命もだけど、一番非力なアーシアを守らないとレイに申し訳ないし)

リアス達は少しずつ、一歩ずつ重力に体を慣らしながら降りる。これによりリアス達の細胞は強くなる重力に対抗するため、自らの細胞同士を振動させ大量の静電気を発生させていた。それはこの場所の重力が特殊な磁場の影響を受けている事を無意識のうちに細胞が悟ったのだ。

自身にこの場所の地場と似た種類の電荷を帯びさせることで・・・体の持つ電気力を？斥力^{せきりよく}”(反発力)に換え地球の重力に対抗しようとしたのである。分かりやすい例としては、磁石の同じ磁極が反発する力だ。

しかし、電気力を上げるにはかなりのエネルギーを消費してしまう。

そこでリアス達は球体の様に、重力に逆らわず倒れるように身を任せ、転がるように移動する事を思いついた。しかし・・・

「(加重力下じや地上の何倍もの体力を消費するわね)何処かで食料を調達して体力を回復しないと」

リアスの言葉は全員が思った事だった。するとアーシアが何かに気付いた。

「皆さんこつちです！」

「アーシア?」

「こつちに行けば食材があります」

アーシアの言葉に全員が困惑したがベジタブルスカイでの事もあり、アーシア先導のもとついて行くと、ルビー色のカニが沢山いた。

「このカニは?」

「調べてみます」

裕斗がチャプターをカニに当てると、?ルビークラブ”と表示された。

「ルビークラブ。捕獲レベルは46ですがこれは捕獲レベルの高さは強さよりも発見の難しさに由来し、ルビーの殻に覆われたその身は滅多にお目にかかれないそうです。また、殻は宝石としての価値が高く、高値で取引されるみたいです」

「まあなんてお得なんでしょうか」

「じゅるり」

「それより早く食うっす」

「そうだな。取り敢えず体力の回復を」

『『この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます!!』』

合掌し恒例の言葉を言い全員がルビークラブを食べ体力の回復を
図った。

「これは・・・」

中でもリアスは力が増した感じがした。

「適合食材だったのね。ルビークラブ魚料理に決定よ!!」

リアス フルコースメニュー

オードブル (前菜) [?]

スープ [?]

魚料理 [ルビークラブ]

肉料理 [ジュエルミート
宝石の肉]

主菜 (メイン) [?]

サラダ [オゾン草]

デザート [?]

ドリンク [?]

「おめでとうございます部長さん」

「ありがとうアーシア。アーシアのおかげでフルコースの魚料理が決まったわ」

「それにしてもここが最下層みたいですよ」

「この何処かにメルクの星屑が・・・」

「待っていたよ」

『!!!』

リアス達は突然の声に驚き警戒した。

「貴方は？」

「オレはメルク、研ぎ師だ。君達の事は零達から聞いてるよ。最下層までこれた事だし、ヘビーホールは攻略出来たのかな？」

リアスが目の前の人物に尋ねると、メルク（二代目）は自己紹介をしてヘビーホールを攻略出来たか聞いた。

「ええ、主にアーシアのおかげでね」

「ふえ？私何かしましたか？」

アーシアのおかげとリアスが言うと、心当たりがないのかアーシアは疑問に思った。

「付いて来てこっちにメルクの星屑があるから」

メルクを先頭にリアス達について行き遂にメルクの星屑を見つけた。

「これ全てメルクの星屑なの!？」

リアス達の目の前には当たり一面メルクの星屑が鉱石のようにあった。

「あれ？そう言えばメルクって何処かで聞いたような・・・」

レイナーレがふと思った事を言えばドーナシック達が思い出したように言った。

「あー！思い出した。ここ最近変わった形の包丁を作っている人じゃないか!？」

「一本一本が高いけど、納得する切れ味だと聞いてます」

「それがまさかこんな、スマートで若い美男子だったなんて・・・」

「噂では巨漢で昔気質の職人とか・・・」

「包丁の鎧を纏った人物って聞いてました」

「・・・」

メルクは後半の言葉でメディアに顔を出した方がいいか真面目に迷った。

「ま、まあ目的も果たしたみたいだし戻らないか？」

とメルクが提案すると、全員が頷きへビーホールから帰還した。

約束果たし

リアス達が零の家に戻ってくると、既にライザー眷属達は戻っており、殆どが地に伏していた。

「積乱雲凄かった・・・」

「野菜は美味しかったけど・・・」

「死ぬかと思っただにや・・・」

「あ、言っておくがグルメ界はかなり厳しい環境だからな。あと、猛獣の捕獲レベルも高いから、力をつけないと・・・本当に死ぬぞ?」

『『ひいひい!!』』

零の追い打ちの言葉でライザー眷属は悲鳴をあげた。

「ん? 帰って来たか」

「ええ。ただいま」

零はリアス達が帰って来たのを感じた。

「零早速取り掛かるうか?」

「いや、先に食事が先だな」

メルクがアシアの包丁を作ろうか零に聞くと、先に食事といい全員で、ベジタブルスカイの野菜に、BBコーン、ルビークラブを調理して食べた。

ギユイン!!ギユイン!!

翌日いよいよアシアの包丁作りが始まった。

リアス達は初めての包丁作りに興味津々で、邪魔にならないよう作業をみていた。

因みにメルクも裏のチャンネルが使える為、原作のように何日もかからない。

「凄い速さで形になって来たわね」

「そうですね」

「それにアシア先輩の包丁も使っているのですよね?」

「はい。新しい包丁は嬉しいですが、今まで使っていた包丁を使わなくなるのは寂しいと思いメルクさんに聞くと、私の包丁も使うって

言ってくれたんですよ」

「良かったですね」

「はい!!」

リアス達がアーシアの包丁で盛り上がっているとライザー眷属が零がいない事に気付いた。

「そう言えば魔訶零がいないな?」

「食材の調達に行ったのじゃない?」

「お兄ちゃんならあり得るね」

カーラメインが零がいない事に気付き言うと、イザベラが食材を捕りに行ったのでないかと予想すれば、イル、ネルが肯定した。因みにイル、ネルは零を兄のように慕いお兄ちゃん呼びになっている。

「零君なら学校に行ってるわよ」

そう言ったのはレイナーレだった。

「学校?今日は休みでは?」

「生徒会に用があるんだって。ほらこの前零君と小猫と一緒に来てた男の子に依頼を飲む条件に小猫のBBコーンと零君の虹の実を奢るって言ってたらしくって、その契約を守る為に学校に行ったわよ。後、生徒会にも協力してもらったお礼もするって言ってたわ」

駒王学園・生徒会室

「邪魔するぞ」

「!!!」

急に現れた零にソーナを含むソーナ眷属は驚いた。

「なんで驚いたんだ?」

「いやいやいやいや!急に現れたら誰だって驚くだろが!!」

「サジの言う通りです。魔訶君何か用ですか?」

「ああ。匙との約束を果たしに来た」

「俺との約束？」

「忘れたのか？エクスカリバー探しを協力し終わったら俺のデザートをぐ馳走する約束」

「ああ！そうだった！って事は・・・」

「持って来たぞ」

「いよしゃあああああ！」

匙は喜びのあまり雄たけびをあげた。

「さあ〜じい〜!!」

「ひゃ、はい!!」

ソーナの威圧感のある声で匙は委縮した。

「どう言う事か、ちゃんと説明しなさい」

「は、はい・・・」

匙はソーナ達に事の経緯を話した。

「では魔訶君はサジにその虹の実を持って来たという事ですか？」

「そうだ。あと生徒会にもお礼として一品持って来た」

「!!?!」

零の言葉に全員が衝撃を受けた。零の言葉が本当なら自分達はあ
グルメアイランド
の美食の島の食材を食べれるのだから。

「因みに魔訶君何を持ってきてくれたのですか？」

ソーナは何の食材か零に聞いた。

「俺のフルコースメニューのスープだ」

「魔訶君のスープですか!?本当にいいんですか？」

「お礼だからな」

「ありがとうございます、ですが少し待っててください。この書類が
終わったら頂きます」

「分かった」

「さあ早く終わらせませすよ」

「!はいい。会長!!」

グルメアイランド
美食の島の食材を食べれるという思いで全員が処理するスピードを
どんどんとあげた。

数十分後書類を片付け、机の上を綺麗にしたソーナ達は零の給仕を黙って待っていた。

「お待たせ致しました。こちらセンチュリースープでございます」

「では、いただきますしよう」

「あ！会長ちよつと待って下さい」

「何ですかサジ？」

食べようとしたところで、匙の待ったがかかり、ソーナ達は匙を睨んだ。

「い、いや〜魔訶達が食べる時はこれをするんですよ。俺に習って下さいね」

そこまで言って匙は合掌した。

「この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます!!」

「二この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます!!」

ソーナ達も匙に続いて合掌して言った。

まず蓋を開けると、オーロラが出現した。

「オーロラがでた!?!」

「綺麗・・・」

「あれ？お皿が空ですよ?」

「本当だ」

「ああ、それは全ての灰汁を取り除いているため、一見すると何も無いように見えるほど澄み切っているんだ」

「!!!?」

零の言葉を聞きソーナはスプーンでスープを掬ってみた。

「本当に透明なんですね」

そしてそのまま口に含むと・・・

「・・・」

キリとした表情が一変顔がにやけて、みだらな顔になった。

匙達はソーナのみだら顔に驚くと同時に、スープの味に期待し一口飲んだ。

すると全員がみだらな顔になり笑いが起こった。

「んん」

数分後みだらな顔が治まったソーナは一つ咳について自身にあった事をリセットした。

「大変美味しかったです」

「それは良かった。じゃあデザートだ」

「といい、次の皿を給仕した。」

ソーナ達は期待を胸に蓋を開けた。すると今度は虹が出た。

「今度は虹が出来てる!?!」

「虹の实のゼリーだそれはな、果汁が蒸発しているんだ。」

「凄い・・・」

虹の实の登場で全員の腹が鳴り、唾液が止まらなくなっていた。

「時間がたつにつれ、温度が上がり味も変化するぞ」

零の言葉を聞き全員がスプーンを掴んだ。

プルン「柔らかい・・・プリンのおようですね・・・」

「でも重いよ!まるで金の重量みたい!」

そして同時に口に入れた。

「「1っ!!」」

「1!2・・・!!3!!4・・・!!マジかよ!口の中でもう味が4回変化したぞ!!」

「完熟マンゴーを数百倍凝縮したような濃度!!」

「時折顔を出す酸味は、レモンやキウイの比じゃない!!」

「5!!ああ甘栗のような香ばしさ!!」

「味のデパートのおようですね!」

6

喉元すぎでまで、なお爆発的な存在感である虹の实は一瞬で全員の全身を巡った。

7

「うめえ・・・」

匙の目から涙がこぼれ落ちる。匙だけではなく全員が涙を流した。「満足していただけましたか?」

と、聞くと全員が泣いたまま無言で頷いた。

「な、なあ魔訶・・・」

「ん？なんだ匙？」

「出来れば。出来ればでいいんだが、俺達にも少しグルメアイルランド美食の島の分けてくれないか？」

「いいぞ」

「軽!? いいのか!? グルメアイルランド美食の島の食材って貴重なんじゃないのか？」

「確かに貴重だが、俺の事を知ってる裏の者だったら別にいいぞ。何より美味しい物は皆で食べた方が美味しいからな」

「そっか・・・ありがとうな」

「サジ」

零と匙のやり取りが終わるのを待っていたソーナは匙に声をかけた。

「は、はい何でしょうか会長！」

「今日私は初めてグルメアイルランド美食の島の食べ物を食べました」

「そ、そうですね」

「よって毎日のお尻叩きを無しに・・・」

「本当ですか!？」

匙は安堵したように息をしたが・・・

「したい所ですが。私はまだ節乃さんのお店で食事をしていませんから、回数を千回から百回に変更します」

「そんなー!!?」

匙の嘆きが生徒会室に木霊した。

「あ、因みに魔訶君に奢って貰いませぬ。勿論貴方が私に奢るのでですよ?」

「えええつと、それはつまり・・・」

「はい。それまで毎日お尻叩きしますので、早く貯めて下さいね」
「畜生ー!! こうなったらやけだ!! ぜったいに貯めてやるよ!!」

と匙は悪魔の仕事に向かった。

「また揃ってる時に何か持ってくるな」

「はい。楽しみに待っています」

零はソーナの言葉を聞いてからグルメアイランド美食の島に戻った。

停止教室のヴァンパイア 墮天使総督登場！

「ここか・・・」

ある日の深夜零はあるマンションの部屋の前に来ていた。何故零が此処にいるかは昨日に遡る・・・

「俺を探している？」

「うん。最近僕の常連さんが零君を探しているみたいなんだ。理由を聞いても『本人だけに言う』って言って聞かないんだ」

何時も道理にグルメアイランドで修行に励んでいた零に裕斗は話しかけ、零に依頼の為会ってくれないか頼んでいた。

「分かった会おう」

「いいのかい？」

「仲間の頼みだ当然だろ？」

と、いうことがあり零は裕斗に地図を渡され指定のマンションに向かった。

ピンポーン

零はチャイムを鳴らした。数秒で扉が開き、中からは浴衣を着た黒髪のワイルドそうな風貌の男が出て来た。

「お！来たな。まあ入りな」

「邪魔するぞ」

中に招かれ零は部屋に入った。

「適当に座ってくれ」

男に言われるまま零はソファアに座った。その間に男は茶を入れ零に出した。

「それで用件は？」

「お前と話がしたかったんだ」

「ほう……それは赤龍帝としてか？それともグルメアイルランドの主としてか？墮天使総督さん？」

零の言葉を聞き男はプレッシャーを出しながら口を開いた。

「何故俺が墮天使総督だと思っただんだ？」

「アンタからは夕麻達と同じ匂いがする。だがその身に纏う電磁波は夕麻達より遥かに強い。序に言えばコカビエルとは雲泥の差だ。よってアンタが墮天使総督だとあたりをつけたんだ」

「匂いに電磁波か……確かに只者じゃないな。話については、両方だ。何時赤龍帝に目覚めたかと出来れば、出来ればグルメアイルランドの物を食べたいだ！」

後半にかけて熱が入り詰め寄るように零に顔を近づけた。

「分かった分かった、話すから離れろ」

零に言われ男もソファアに座った。

「俺が赤龍帝に覚醒したのは、10年前だ」

「そんなに早い段階で覚醒したのか……」

「更には言えば5年前に禁手に至った」

「もうその域まで到達してたのか……そのキツカケは何だ？」

「キツカケはグルメアイルランドのに君臨する元八王で現九王の一角猿王と戦っていた時だ。九王って言うのはグルメアイルランドに君臨する9体の猛獣の総称だ。最近俺のパートナーで家族のスノーが新たに王となり九王に代わったんだ」

「その王達ってのは中々強いようだな。そんでお前はその王達を倒してグルメアイルランドの主となったわけか」

「まあそうだが、俺よりまだ師匠達の方が強いな。まだ一度しか勝てないからな」

「コカビエルを瞬殺したお前より強いって……本当に人間か？」

「真正正銘の人間だ（数世紀生きれるがな……）」

人通り話した後零は裏のチャンネルを発動させて、酒乱牛の肉を出した。

「今のも興味深いが、今は涎が止まらんこの肉が気になるな。おいこ

「それは何の肉だ？アルコールの匂いがプンプンするぜ」

「それは酒乱牛の肉だ。捕獲レベルは30で、バツカス島に生息しその島のアルコールを含んだ湖の水を飲料水としているため、常に酔っ払ってフラフラしている。酔えば酔うほど狂暴さが増す厄介な牛だな。まさに酒乱と呼ぶに相応しい暴れ牛だ」

「その捕獲レベルってのは？」

「食材の捕獲の困難さを表したもので、捕獲レベル1で、猟銃で武装したプロのハンターが10人必要だな。5を越えれば戦車でも破壊されうるレベルだな」

「なるほどな・・・次にバツカス島ってのは？なんだか気がひかれるのだが？」

「バツカス島は酒の楽園と呼ばれる場所だ。その名の通り酒に関連する物は大概揃っている」

「いい島じゃねーか！今度連れててくれよ!!」

「連れて行くのはいいが、先に食わねーか？」

「おお、そおだな。どうやって食べばいいんだ？」

「そのまま生で大丈夫だ」

「それじゃ・・・」

と言い、肉に手を伸ばしたが零に捕まれた。

「なんだよ、まさかやつぱやらんってか？」

「違う違う。食べる前には合掌し『この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます』と言うんだよ。これを言わなければ食う事は許さん」

「この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます」

男は合掌して感謝の言葉を言ってから肉に手を伸ばした。そして口に入れると・・・

「旨え・・・マジか。今まででこんな旨い肉食った事のねえ。それに肉汁がアルコールでいい感じにほてってきたぞ」

初めての味に男は感動した。

「気に入ったようだな」

「ああ。そうだこれを金髪の兄ちゃんに渡しといてくれ」

「そう言い男はアンケート用紙を零に渡した。

「そう言えば名乗ってなかったな。俺はアザゼル、墮天使共の頭をやってる。よろしくな、赤龍帝の魔訶零」

瞬間アザゼルの背中から十二枚もの漆黒の翼が展開した。

「冗談じゃないわ！確かに悪魔、天使、墮天使の三すくみのトップ会談がこの町で執り行われるとはいえ、突然墮天使の総督が私の縄張りに侵入し、営業妨害していたなんて……！」

リアスはぷるぷると全身を怒りで震わせていた。先日のエクスカリバー事件は悪魔、天使、墮天使の三すくみの関係に多少なりとも影響を及ぼした。その結果一度トップ同士が集まって今後の関係について話し合う事になった。零達はその事に関わったので報告しなければならぬ事になった。

「アザゼルは神セイクリッド・ギア器に強い興味を持つと聞いわ、裕斗の聖魔刀より、人間のレイがグルメアイランドの主と赤龍帝である事を知ってレイに接触してきたのね。しかし、どうしたものかしら……彼方の動きが分からない以上、こちらでも動き辛いわ。相手は墮天使の総督。下手に接することも出来ないわね」

「アザゼルは昔から、ああいう男だよ、リアス」

突然、この場の誰でもない声が聞こえ、全員が声をした方向に視線を移してみると、そこにはサーゼクスがにこやかに微笑んでいた。誰か確認した瞬間、朱乃・小猫・裕斗がその場で跪き、アーシアとゼノヴィアは誰か分からず疑問符をあげていた。

零がアーシアとゼノヴィアの2人に説明すると、ゼノヴィアは跪き、アーシアはどうすればいいかオロオロしていたが次のサーゼクスの言葉で落ち着いた。

「くつろいでくれたまえ。今日はプライベートで来ている」

その言葉で朱乃達が立ち上がった。

リアスが用件を聞けば授業参観のプリントをだして休暇を入れてでも授業参観に参加すると言え、リアスは一悪魔に特別視してはいけないと言うが、三すくみの会談をこの学園で執り行う予定で、その下見に来たと言った時は全員が驚いた。

「この学園はどうやら何かしらの縁があるようだ。私の妹であるお前と、伝説の赤龍帝・グルメアイルランドの主、聖魔刀使い、聖剣デュラन्दル使い、魔王セラフォル・レヴィアタンの妹が所属し、コカピエルと白龍皇が襲来して来た。これらは偶然で片付けられない事象だ。様々な力が入り混じり、うねりとなっているのだろう。そのうねりを加速度的に増しているのが魔訶零君だと思うのだが」

サーゼクスは零へ視線を送る。

その後アーシアとゼノヴィアも自己紹介をした。

その日の夜零は駒王町の自宅にサーゼクスとグレイファイアを招いた。

サーゼクス達はあの後ホテルを探そうとしたが夜中だったため、零

が自宅に招いたんだ。夜中であつた為軽い食べ物でグルメアイルランドの食材で出すと2人に大変喜ばれた。

就寝時間となるとサーゼクスが零と話がしたいと言い、今夜は零の部屋にサーゼクスが止まる事になった。最初リアスは抗議したが、サーゼクスとグレイフィアに説得されて渋々別の部屋で寝る事になった。

「零君冥界にグルメアイルランド食材を卸してくれないかい？」

先に口を開いたのはサーゼクスだった。零はアザゼルの事だと思つたが、違つた事に少し驚いた。

「アザゼルの事ではないのか？」

「部室でも言つたがアザゼルはああいう男だからね。そのアザゼルの事だからグルメアイルランドの物を食べたいと言つたのではないかい？」

「当たり前だ」

「今日私も初めて食べたけど、本当に美味しかったよ。そして思ったんだ、冥界にいる者達にも分けたいってね」

「卸すのはいいが、条件がある」

「その条件とは？」

「転生悪魔、下級、中級、上級関係なく平等に分け与える事。誰かが独占しない。これが条件だ。美味しい物は皆で食べた方が美味しいから」
「分かつた。平等に分け与えるよう頑張るよ。この事は会談の時に戻すよ」

「そうだな。悪魔だけでは、不公平だから天使・墮天使にも分けれるよ
う俺も言おう」

「ありがとう君がグルメアイルランドの主でよかったよ」

その会話を最後に2人は眠りについた。

プール開き

「さて、貴方達。今日は私達限定のプール開きよ」

サーゼクスの訪問から数日後零達は学園のプール掃除に来ていた。生徒会からプール掃除をすれば一番に使わせてもらえると聞き、リアスが引き受けた。なお掃除に来たのはグレモリー眷属+零・アーシア・スノーと堕天使組である。死季の森に行っているティアマツトとリアス達の半分ぐらいの実力しかないライザー眷属はグルメアイランドにて修行中である。

「レイ！私の水着どうかしら？」

「似合うが布の面積が少なすぎだ」

リアスの水着は髪の毛と同じ色の赤い水着だが、布の面積が明らかに少ない

「あらあら、部長ったら、張り切ってますわ。うふふ、よっぽど零君に見せたかったんですわね。ところで零君、私の方はどうかしら」

「朱乃も似合ってるが、お前も少なすぎだ」

リアスとは対極的な真っ白い水着を着た朱乃も来たが、その水着はリアスと同じ布面積が小さかった。

「レイさん、わ、私も着替えてきました」

振り向くと学校指定のスクール水着姿のアーシアがもじもじしながら立っていた。

「・・・可愛い。よく似合ってるぞ」

「えへへ。レイさんにそう言われると嬉しいです。小猫ちゃんも同じスクール水着なんですよ」

アーシアの後ろには小猫がいて、小猫ももじもじしていた。

「小猫も可愛いぞ」

「・・・ありがとうございます」

小猫はそっぽを向きながら言った。リアスは小猫の肩に手を置き、ニッコリ微笑みながら言う。

「それでねレイ悪いのだけど」

「あっ？」

「はい、いち、に、いち、にい」

零は小猫の手を持って、小猫のバタ足練習に付き合っていた。小猫は泳げないらしく、リアスから泳げるよう言われたのだ。

零はデスフォール攻略の為に全力で指導している。同じく泳げないアジアは夕麻が教えている。

能力で身体を縮ませたスノーもアジアのフォローで、アジアの横を泳いでいる。

因みに夕麻は黒のビキニでカラワーナもビキニで色は青。ミツテルトは黒のフリルがついた水着。

墮天使達も久しぶりにグルメアイランドから出たため伸び伸びとしている。

「よし小猫どれ位泳げるようになったか、プールを往復してみろ」

「はい」

ある程度小猫が泳げるようになると、どの位泳げるか25mプールを往復してもらったことにした。

「アジアも頑張りなさい！」

「はい！」

夕麻もアジアの成長を見る為零と同じ指示をした。

零はその後裕斗と競争をしたり、夕麻達と泳いだり、スノーに乗って寛いだりして、プールを満喫した。

「よし少し休憩するぞ」

長く泳いでた為一旦休憩をいれた、小猫は日陰で本を読んで休んで、アーシア達はプールサイドに敷いたビニールシートの上で休んでいたが、疲れたのかスノーにもたれ掛かって眠っていた。スノーも日向ぼっこしながら尻尾でアーシア達が冷えない様に覆っていた。

アーシア達を眺めていると、リアスの使い魔である、赤いコウモリが飛来してきた。その方向を見ればリアスが微笑みながら、手招きをしていたので零はリアスの元に行った。

「レイこの美容の特性オイルで、背中塗ってくれるかしら？」

「まあいいぞ」

零はリアスからオイルを受け取り、手で温めてからリアスの肩から塗っていく。

「スベスベだな」

「ンツ／＼／．．グルメアイランドの食材を食べてから更に健康体になっておまけに今までよりも肌がスベスベになり艶やハリも出きたわ。ハアアアゝ気持ちいい／＼／．．．」

「オイルを塗りながらマッサージもしてるからな」

「レイはマッサージも、出来たのね」

「全体の知識も役に立つからな」

話していると、肩から足まで塗り終わった。

「前も塗ってくれる？」

「前は同性にしてもらえ」

「では私が塗りますから、私にもオイル塗ってくださいる？」

零の後ろから朱乃が抱き着きながらそう言った。

「朱乃!? まだ終わってないわよ! レイから離れなさい!」

「あら? 背中側は終わってますよね? 前は私が塗るから交替ですわ」

「まだレイが返事してないじゃない!!」

「あらあら、そんなこと言わなくても分かりますわ」

リアスと朱乃は言い合いを始め遂には、魔力の塊の応酬が始まり周りに被害が出始めた。零は面倒な事になったと思い、夕麻達はスノーに任せて避難する事にした。

「おや、魔訶零か。どうした？外が騒がしいようだが？」

用具室に入ると奥からゼノヴィアが姿を現した。

「今はリアスと朱乃が争ってる。今は出ない方がいいぞ。お前こそ此処で何をしてるんだ？」

「初めての水着だから、着るのに時間がかかった。似合うかな？」

リアス達ほど布面積が少ない水着ではないが、体の凹凸を強調しやすいビキニ水着だった。

「似合ってるぞ。教会では禁止だったのか？」

「まあそうだね。と言うよりもこういう物に私自身興味がなかったんだ。周囲の修道女達、女性の戦士はその手の物に触れられなく不満を漏らしていたけどね。だけど私も身の上が変わった以上、多少なりとも女らしい娯楽を得たいと思うんだと、最近思い始めたりする。特にグルメアイルランド関係は特に。まあ他にもあるが」

「俺に出来る事があれば言えよ？協力してやる」

「そうか、魔訶零。折り入って話がある」

「零でいいぞ」

「では、零私と子作りをしよう」

ゼノヴィアの言葉に零は一瞬思考停止した。

「すまんもう一度言ってくれ」

「私と子作りをしよう」

もう一度ゼノヴィアに尋ねたが答えは同じだった。

「何故そうなる？」

「うん。順を追って話そう」

ゼノヴィアは語る、今まで神のために尽くしたため女の喜びを捨て

ていたが悪魔になったことで女の喜びを知りたいという事と、新しい目標として子供を産む事。そのため男を知る必要があり、子作りで石二鳥だと言った。

「私は子供を作る以上、強い子になって欲しいと願っているんだよ。父親の遺伝子に特殊な力、もしくは強さを望む。そこで零が一番適任だと思う。伝説の赤龍帝の力。セイクリッド・ギア 神器は子に受け継がれなくても、オーラは受け継がれるかもしれないだろう？それに美食の島の主グルメアアイランドならこれ以上ない強者だでは、早速一度試してみよう。何事も早めが良い」

いい終わるとゼノヴィアは水着を躊躇いなく脱ぎ捨てた。

「お前も早まるなー！」

零はヘアロックでゼノヴィアの動きを止めた。

「むう・・・零、何をする。これでは子作りが出来ないぞ？」

「いやまず学生の内にそう言う事は駄目だ。命を育てるのは簡単ではない。命の重さを分らない奴とは、子作りはしない」

「・・・そうだな。零の言う通りだ、私が悪かった」

零の言葉を聞きゼノヴィアは反省した。それを確認した零はヘアロックを解いて水着を渡した。

バン！

「レイ!!」

気まずい雰囲気の中勢いよくドアが開きリアスが入って来た。後ろには朱乃がいる。

「どうした？」

「どうしたもこうしたもないわよ！急に居なくなるからもしかしたらと思い探しに来たのよ」

「そうですね。ゼノヴィアちゃんに先を越されたと思いましたわ」

「何もしてない。ほら折角の一番プールなんだ戻るぞ」

そう言い零はプールに向かった。リアス達はお互いを牽制しながら零を追いかけた。

「久々に遊んだな」

プールから上がり、帰る為に零は皆が来るのを校門で待とうと先に歩いていた。裕斗とドーナシークは忘れ物をしたらしく更衣室に戻った。

「ん？」

校門のところに校舎を見上げている、零と同じ歳位のダークカラーの銀髪の美少女がいた。

ふと、その少女が零に気付いたのか、視線が零に移る。引き込まれるぐらいに透き通った蒼い目。少女は天子の微笑みで零に話しかけた。

「やあ、いい学校だね」

「そうだな。・・・何か用か白龍皇」

少女は零の言葉に驚いた。

「驚いた。どうして分かったの？」

「声それに匂いだな」

「声は兎も角匂いって・・・女性に対して失礼よ」

「それは悪かったな。俺は魔訶零だ」

「私はヴァーリよ」

2人は示し合わせたようにお互いの手を差し出し、握手を交わした。

左腕が熱く疼き、戦え、戦え、戦えと訴えかけてくるが、一喝すれば治まった。

「凄いね、歴代の所有者達の怨念を理性で抑え込むなんて」

「お前もだろ？」

零の言葉にヴァーリはそうねと返した。

ザッ！

瞬間二本の剣と刀がヴァーリの首元に刃を突きつけていた。更に上空には光の槍が浮かんでいた。瞬時に現れたのは裕斗とゼノヴィアだった。聖魔刀と聖剣デュランダルをヴァーリに向けている。更に夕麻達が上空で待機していた。

「何をするつもりか分からないけど、冗談が過ぎるんじゃないかな？」

「ここで赤龍帝との決戦を始めさせるわけにはいかないな、白龍皇」

裕斗もゼノヴィアもドスの効いた声音だ。夕麻達も殺気をだしている。しかしヴァーリは動じない。

「やめておいたほうがいい。——手が震えてるじゃない」

ヴァーリの言うように、全員の手元は震えていた。

「誇っていいわよ。相手との実力差がわかるのは、強い証拠よ。それにしても貴方達2人はコカビエルの時より段違いに強くなっているわね。それでも私と貴方達との間には決定的なほどの差があるわ」

裕斗とゼノヴィアはヴァーリの言ったことは事実なので唇を噛んだ。

「魔訶零、君はこの世界で自分が何番目に強いと思う？この世界は強い者が多い。『紅髪の魔王』クリムゾン・サタンと呼ばれるサーゼクス・ルシファーでさえ、トップ10内に入らない。だが1位は決まっている。不動の存在が」

「まさか自分だと言うのか？」

「いずれ判るわ。ただ私じゃない。今日は戦いにきたわけじゃない、アザゼルの付き添いで来日しててね、ただの退屈しのぎよ。今は『赤い龍』とは戦わない。私もやる人が多いからね」

それだけ言い残すとヴァーリは踵を返して、この場をあとにしている。

「『白い龍』パニシング・ドラゴンのヴァーリか・・・中々の者だな」

零はヴァーリの背を見ながらそう言った。

授業参観

「・・・気乗りしないわね」

リアスがため息を吐きながら言う。

今日は授業参観の日で父親とサーゼクスが見に来るのでリアスは気が滅入っているのだ。

「レイさんの所は誰か来るのですか？」

「アカシア達が来るって言ってたな。アーシアを見る為千代さんも来るぞ」

「千代さんも来るんですか!? 楽しみです! アカシアさん達ってレイさんの師匠さんですか？」

「ああ」

「零には師匠がいるのか？」

話しかけて来たのはゼノヴィアで、零の師匠に興味を持った。

「メルクを入れ9人いるな。今日は全員は来ないけどな」

「ほう、会えるのか楽しみだ」

零の師匠達にゼノヴィアは合えることが楽しみになった。

授業が始まり、開け放たれた後ろの扉からクラスメートの親御さんたちが入ってくる。

授業は英語なんだが配られたのは紙粘土だった。

「いいですかー、今渡した紙粘土で好きな物を作ってみてください。動物でもいい。人でもいい。家でもいい。自分がいま脳に思い描いたありのままの表現を形作ってください。そういう英会話もある」

ねえよ！零は心の中で突っ込んだ。

「レッツトライ！」

レッツトライじゃねえ！

「む、難しいです」

零が突っ込んでいる間にアーシアは作成を始めた。

周囲を見渡せば、皆渋々ながら紙粘土をこねくりだしていた。

『相棒諦めて作成にかかった方がいいぞ。他の者達は受け入れている』

神器からドライグが声を掛けてきた。

『そうだな・・・いい加減に受け入れるか・・・』

そうドライグに返し作成を始めた。

『ハ、これは!?!』

ドライグは零が作った物に驚いた。零が作ったのは高クオリティのドラゴンと九尾の狐、相棒であるドライグとスノーだった。

『俺は嬉しいぞ相棒！ここまで精密に再現されているのは凄い!』

ドライグは喜んだ。

先生が零の作品に気付き周りも零の作品の出来の高さに感嘆の息を漏らした。するとクラスの誰かが「ドラゴンを5000!」や「私は狐に6000!」更に父兄からは「両方10000!」と英語の授業は一転、零の作ったオークション会場と化した。

勿論零は守り切った。

昼休み

零とアーシアが飲み物を買に行くと、自販機の前で偶然リアスと

朱乃に遭遇して、授業であつた事を話した。

「確かにこれは凄いわね・・・」

「買いたくなる気持ちも分かりますわ」

2人共絶賛した。

そこに祐斗が現れた。

「あら、祐斗。お茶？」

リアスが訊くと、祐斗は廊下の先を指さす。

「いえ、何やら魔女っ子が撮影会をしていると聞いたもので、ちよつと見に行こうかなと思ひまして」

祐斗の言葉を聞いて全員が首を傾げた。

「零」

『!!?』

「あ、アカシア、フローゼ、オヤジ、三虎、千代さん」

零達にアカシア達が裏のチャンネルから出て来て声をかけた。リアス達は急に現れたアカシア達に驚いたが、裏のチャンネルだと直ぐ理解した。

「零彼女達が例の子達か？」

「ああ、そうだ」

「そうか。私はアカシアだ」

「アカシアのコンビのフローゼです」

「ワシは零の親代わりの一龍じゃ」

「私は三虎だ」

アカシアが零に聞き順に自己紹介をした。

少し話した後、零達は撮影会の様子になり見に行くことにした。

カシヤカシヤ!

フラッシュがたかれ、カメラを持った男達が、廊下の一角で魔法少女のコスプレをした美少女を撮影していた。その少女を見たりアス

が慌てふためいた。

そこに生徒会の匙が現れ生徒と父兄達を解散させその場に残ったのは少女と零達だけだ。

「あんたもそんな恰好をしないでくれ。って、もしかして親御さんですか？ そうだとしても場に合う衣装つてもものがあるでしょう。困りますよ」

「えーだって、これが私の正装だもん☆」

匙が注意をするが少女は反省をしていない。

「何事ですか？ サジ、問題は簡潔に解決しなさいといつも言ってる……紅髪の男性2人の先導を歩いていたソーナが言いかけた言葉を少女を見るなり言葉を止めた。

「ソーナちゃん！ 見つけた☆」

少女はソーナを見つけると嬉しそうに抱きつく。

(そいえばこの少女ソーナに似てるような……)

と零が考えてる間にサーゼクスが少女に声をかける。

「ああ、セラフォルーか。君もここへ来ていたんだな」

「セラフォルー？ 聞いた事があるような……」

「レヴィアタン様よ。あの方は現四大魔王のお一人、セラフォルー・レヴィアタン様。そしてソーナのお姉さまよ」

「はああああああ!! こんな魔法少女が魔王の一人!? 魔法少女じゃなくなって魔王少女じゃねえかああああ!!」

あまりの衝撃に珍しく零のツツコミが炸裂した。

「セラフォルー様、お久しぶりです」

「あら、リアスちゃん☆おひさ☆元気にしてましたか？」

かわいらしい口調でリアスはちよつと困った様子だ。

「は、はい。おかげさまで。今日はソーナの授業参観に？」

「うん☆ソーナちゃんったら、酷いのよ。今日の事黙ってたんだから！ もう！ お姉ちゃん、シヨックで天界に攻め込もうとしちゃたんだから☆」

「いやいやそれはヤバいだろ……」

すると零に視線をむけてから、サーゼクスに話しかけた。

「ねえ、サーゼクスちゃん。この子が噂のドライグ君？」

「そう、彼が『赤い龍』ウエルシュ・ドラゴンを宿し、グルメアイルランド美食の島の主でもある、魔訶零君だ」

「へへはじめまして☆私、魔王セラフオール・レヴィアタンです☆『レヴィアタン』って呼んでね☆」

ピースサインを横向きでチョキするセラフオールに零は苦笑いを浮かべ挨拶をする。

「魔訶零だ。よろしく」

「零よ私達の事も紹介してくれ」

アカシアの言葉にリアス達以外にアカシア達を紹介した。零の師匠達という事で、サーゼクス達はアカシア達に興味を持った。

夜に、零の家で授業参観の様子を撮影した、上映会が開催されており、リアスは顔を真っ赤にして部屋の隅で座り込んでいる。因みに料理は零、フローゼ、千代が作っており、グルメアイルランドの食材を初めて食べるセラフオール、ジオティクスは絶賛だった。

「ねえねえ零ちゃん！ソーナちゃんはグルメアイルランドの食材を食べた事あるの？」

「あるぞ。コカビエルの事で協力してもらった礼で俺のフルコースのスープ『センチュリースープ』とデザート『虹の実』を振舞った」

「いいな〜私も食べたい☆」

「ん〜スープは今度だな。虹の実ならあるし、デザートとして出すか」
そう言い虹の実でゼリーを作りサーゼクスは大変喜んだ。

「ねえ零ちゃん」

真面目な顔になり、セラフオールは零に話しかけた。急に真面目な顔になったセラフオールを見て零は気を引き締めた。

「なんだ？」

「冥界にグルメアイルランドの食材を卸して欲しいの。勿論だけどタダとは言わないわ。ちゃんとお金も払うし、欲しい物があれば出来るだ

「け用意するよ」

セラフオルーは魔王としての公務は、主に冥界の外交を取り仕切っており、グルメアイランドの食材を冥界に卸したいと思い零に交渉を持ちかけた。

「サーゼクスにも言ったが条件がある」

「その条件って？」

「転生悪魔、下級、中級、上級関係なく平等に分け与える事。誰かが独占しない。これが条件だ。美味しい物は皆で食べた方が美味しいからな」
「分かった。詳しい話は会談が終わってから詰めていこ☆」

最後の方は素に戻ったが契約書に条件を書き、2人共サインをした。

2人目の後輩

授業参観の次の日の放課後零達は旧校舎一階の「開かずの教室」とされていた部屋の前に立っていた。

この部屋は外からも嚴重に閉められており、中を見る事が出来ない。

ここには『僧侶^{ビショップ}』がいる。

リアスの話ではその能力が危険視され、リアスの能力では扱いきれない為、上から封印をするように言われたそうだ。

昨夜、サーゼクスの話ではライザーとのレーティングゲーム、コカビエルとの一戦でリアスが高評価され、封印の解除の許可が出たのだ。

『KEEP OUT!!』のテープが幾重にも貼られており、呪術的な刻印も刻まれている。

「ここにいるの。一日中、ここに住んでいるのよ。一応深夜には術が解けて旧校舎内だけなら部屋から出てもいいのだけど、中にいる子自身がそれを拒否しているの」

と、リアスは言い、扉に向けて手を突き出して魔法陣を展開していた。

「引きこもりか?」

零の言葉にリアスはため息を吐きながら頷いた。

「中の子はパソコンを介しての契約で、眷属一の稼ぎ頭ですの。パソコンでの取引率は新鋭悪魔の眷属の中で上位に入る程の数字をだしているのです」

リアスを手伝いながら朱乃は言う。

「ーさて、扉を開けるわ」

扉に刻まれていた呪術的な刻印も消え去り、ただの扉となっていた。リアスが扉を開く。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッツ!」

とんでもない音量の絶叫が中から発せられてくる。

リアスは驚くことなく、ため息を吐くと朱乃と共に中へ入って行っ

た。

『ごきげんよう。元気そうで良かったわ』

『な、な、何事なんですかあああああ？』

中でのやり取りが聞こえてくる。この声の感じは・・・

『あらあら。封印が解けたのですよ？もうお外に出られるのです。さあ、私達と一緒にでましよう？』

朱乃が優しい声で接している、が・・・

『やですううううう！ここがいいですううううう！外に行きたくない！人に会いたくないいいいいっ！』

重症だな。俺、アーシア、ゼノヴィアは首を傾げ、疑問符を浮かべている。裕斗と小猫は事情を知っているのか、祐斗は苦笑し、小猫はため息を吐いていた。

俺を先頭に部屋に足を踏み入れ、部屋の様子に視線を向けた。

カーテンが閉められた部屋。薄暗い。部屋は意外にも可愛らしく装飾されていて、女の子の部屋みたいだ。ぬいぐるみとかもある。部屋の一角に葬儀に使いそうな棺桶が一つあった。更に奥に行けば、金髪と赤い双眸をした人形みたいな端正な顔立ちをした美少女だった。床にへたりと力なく座り込み、リアスと朱乃から逃げようという構えだった。凄く震えていた。

「見た目は美少女だが、男だなソイツ」

零の言葉にアーシアとゼノヴィアは驚いた。無理もないだろう見た目は完全に美少女なのだから。

「よく気が付いたわね。そうこの子は紛れもない男の子よ」

「女装趣味があるのですよ」

リアスが言い、朱乃が付け足した。

「しかしよくわかったね？」

「男性ホルモンの匂いに骨格で判るだろ？ついでに言えば電磁波」

『それはレイ／零（君・さん・先輩）しかわからないよ／わよ／です

！！』

祐斗の疑問に答えた零に全員がツツコミをいれた。

「しかし、引きこもりに女装趣味とは誰得だ？」

「だ、だ、だ、だって、女の子の服の方が可愛いもん」

零が聞くと女装男子は可愛く言った。

「うくん・・・見た目は完全に美少女な分残念だな・・・」

「人の夢と書いて、儂いですよ零先輩」

「その通りだな小猫」

仕草は女子なので零が残念がっていると小猫はポツリと言い、その言葉に零は同意した。

「と、と、と、と、と、と、と、と、この方達は誰ですか？」

女装男子がリアスに聞くとリアスは俺とアーシア、ゼノヴィアを指さして言う。

「貴方がここにいる間に増えた部員の魔訶零とアーシア・アルジェント。そして眷属で『騎士^{ナイト}』のゼノヴィア・クアルタよ」

紹介されたので3人揃って「よろしく」と挨拶するが、女装男子は「ヒイイイ、人がいっぱい増えている!」と怖がってる。

「お願いだから、外に出ましょう? ね? もう貴方は封印されなくてもいいのよ?」

リアスが優しく言うが・・・

「嫌ですうううう! 僕に外の世界なんて無理なんだあああああつ! 怖い! お外怖い! どうせ僕が出てつても迷惑をかけるだけだよおおおおつ!」

くくだくと言つて段々とイライラし始めた零は女装男子に近づき、腕を引く。

「くくだくだ煩いな。外に出るぞ」

「嫌あああつ!」

零に腕を引かれ女装男子は絶叫し、同時に世界が停止した。

「・・・何が起きた? お前の仕業か?」

「な、なんで動けるのですかあああ!?!」

女装男子がアーシア以外の全員が動ける事に驚いたように叫ぶ。

「ギヤスパー私達は強くなったの、そのおかげで貴方の『フォービドゥン・パロール・レギュ』停止世界の邪眼』は非戦闘要員のアーシアを除き効かないわ」

「で、でも、どうやって?」

女装男子・ギヤスパーは自分の神器が効かない事に少し安心したが、何故リアス達がこの短時間に強くなつたか疑問に思った。

「レイのおかげよ」

「え？」

ギヤスパーは思わず零を見た。零はギヤスパーの目線に合わせる為に膝を着いて、改めて自己紹介をした。

「改めて魔訶零だ。今代の赤龍帝でグルメアイランドの主だ」

「ぐ、ぐ、グルメアイランドの主いいいい!?ほ、本当ですか!？」

ギヤスパーは興奮気味に零に詰め寄った。

「あ、ああ。リアス達はグルメアイランドで修行して強くなつたんだ。だからお前の神器が効かなかったんだ」

「そ、そうだったんですね・・・あ、あの魔訶先輩!」

「零でいいぞ。それよりお前の名前教えてくれないか?」

零が優しく言うと、ギヤスパーは深呼吸して名乗った。

「は、はい零先輩!ぼ、僕はギヤスパー・ヴラディって言います!よろしくお願いします!そ、それで、ですね・・・じ、じ、実は結構多くの人から、グルメアイランドの食材を食べたいって依頼が、あるのですが・・・分けてくれませんか?」

「駄目だ」

ギヤスパーのお願いを零は一刀両断した。

「ど、どうしてですか!？」

「俺も、リアス達も修行して自分達で食材を捕獲しているからだ。命を頂くのに、その命を軽く見る事は許さんのだ」

「・・・」

零の言葉にギヤスパーは零の言葉の重さに黙った。

落ち着いたのか、アーシアが動きはじめた。アーシアは何が起こつたか分からず困惑したがゼノヴィアが状況を説明して納得した。

「ギヤスパー。グルメアイランドの食材が欲しいなら、自分で捕獲に行くんだ」

「ぼ、僕には無理ですううう!第一外に出たくないいいいい!!」

零が言うがギヤスパーは涙を流しながら首を振った。

「リアス何故ギヤスパ―はこんなにも外の世界と人に恐怖を感じてるんだ？」

「それはね……」

零がリアスに聞くと、リアスはギヤスパ―の過去を話始めた。

ギヤスパ―は名門の吸血鬼を父に持つが、母が人間で妾だったため、悪魔以上に純血に拘りを持つ為、たとえ親兄弟であっても扱い方は差別的で、ギヤスパ―は幼い頃から腹違いの兄弟達にいじめられ、人間界に行ってもバケモノとして扱われ居場所がなかった。しかし、ギヤスパ―は類希なる吸血鬼の才能と、人間としての才能・神器を両方兼ね備えて生まれてきてしまった為、望まなくともその力は歳を取ると共に大きくなっていったそうだ。

「上の話では将来的には『バランス・ブレイカー禁手』へ至る可能性もあるという話よ。

今までは私はギヤスパ―を卸せなかつたけど、グルメアイランドの修行の成果をライザーとのレーティングゲームで評価されたのが功を奏したのよ」

「成程な……」

リアスの話で零は納得した。

「話は分かった。よし行くぞ」

突然ゼノヴィアがギヤスパ―の襟首を持って部屋を出た。

「嫌ああああ!!」

ギヤスパ―の悲鳴が遠ざかっていく。

「おいゼノヴィア!」

零が追いかけてようとすると、リアスに止められる。

「レイ!ギヤスパ―の事頼んだわよ!私と朱乃は会談の打ち合わせをしてくるから。それと祐斗、お兄様が貴方のバランス・ブレイカー禁手について詳しく知りたいらしいから、ついて来て頂戴」

「了解!」

「はい、部長」

2人は返事をし、零とアーシア、小猫はギヤスパ―とゼノヴィアを追った。

アドバース

「ほら、走れ。デイウオーカーなら日中でも走れるはずだ」

「ヒイイイイツ！デュランダルを振り回しながら追いかけてこないでええええツ！」

夕方に差ししかかった時間帯、旧校舎近くでギヤスパ吸血鬼を追いかけけるゼノヴィア聖剣使いがいた。

傍目から見れば完全に吸血鬼狩りだな、つと零は思った。デュランダルも『ブウウウンツ！』と危険な音を立てながら聖なるオーラを放ち続けている。そのせいかギヤスパも必死に逃げている。

何故このような事になったかと言うと、ゼノヴィア曰く「健全な精神は健全な肉体から」らしくて、ギヤスパの体力から鍛える事に決めたらしい。しかもいい笑顔で追いかけてまわしている。これもゼノヴィア曰く「沢山運動した後のプリン山は格別に美味しい」とのことらしく、張り切ってギヤスパを追いかけ回している。

「・・・ギヤークン、ニンニク食べれば健康になれる」

「いやああああん！小猫ちゃんをいじめるうううう！」

更に小猫が両手にニンニクを持って、ゼノヴィアに並んでギヤスパを追いかけていた。

「うくん・・・メテオガーリックでも食わしたら、克服と健康になるか・・・」

「レイさんメテオガーリックってなんですか？」

零の呟きが聞こえたアーシアが聞いてきた。

「メテオガーリックとは、隕石が落ちた土地に稀に生える不思議な昆虫にくだ。土壤の栄養をすべて吸いつくし育つため滋養強壮成分が半端では無く、食べれば途端に筋肉質な体になり1ヶ月不眠不休で動けるほどの力が得られる。そのため別名ドーピングガーリックとも呼ばれる。食べられるところは実の中心のほんの一部であり、周りの実は高温で熱して弾き飛ばさなければならぬ。隕石のように硬い実が夜空で弾ける姿はまさに流星そのものである為そう名付けられた」

「へー凄いです!」

アーシアは目を輝かせた。

「おーおー、やってるやってる」

そこに匙が現れる。

「おつ匙か」

「よー、魔訶。解禁された引きこもり眷属がいるとかって聞いてちよつと見に来たぜ」

「今ゼノヴィアに追いかけて回されてるのがそうだ」

「おいおい、ゼノヴィア嬢、伝説の聖剣豪快に振り回してるぞ? いいのか、あれ。おつ! てか、女の子か! しかもアーシアさんと同じ金髪!」

ギヤスパーを見て嬉しそうな匙に、零は残酷な真実を告げる。

「残念だが、あれは女装男子だ」

それを聞き、心底落胆した様子の匙。

「そりゃ詐欺だ。てか、女装って誰かに見せたい為にするものだろう? それで引きこもりって、矛盾すぎるぞ。難易度高いなあ」

「似合ってるのがまたなんとも言えんからな。そう言う匙は何をやっているんだ?」

匙はジャージに軍手をして、花壇用の小さなシャベルを持っていった。

「見ての通りだ。花壇の手入れだよ。一週間前から会長の命令でな。ほら、ここ最近学園の行事が多かっただろう? それに今度魔王様方もここへいらつしやる。学園をキレイに見せるのは生徒会の『兵士』たる俺の仕事だ」

と胸を張った。

「ん?」

零は数日前に出会った人物の気配を感じた。

「へえ。悪魔さん方はここで集まってお遊戯してるわけか」

「なんだアザゼルか」

浴衣を着たアザゼルがいた。

「よー、赤龍帝。あの夜以来だ」

突然現れたアザゼルに全員が怪訝そうに見つめていたが、零がアザ

ゼルの名を言うと空気が一変する。

ギイン！

ゼノヴィアがデュランダルを構える。匙も驚愕しながらも右手の甲にデフォルト化したようなトカゲの頭を出す。

(あれが五大龍王の一角黒邪の龍王の神ブリズン・ドラゴン 器セイクリッド・ギアか・・・)

と、零は観察していた。

「やる気はねえよ。赤龍帝以外束になっても俺に勝てないのはわかるだろ？ちよつと散歩がてら悪魔さんのところに見学だ。聖魔刀使いはいるか？ちよつと見に来たんだが」

「嘘は言つてねえよ。構えをとけ、お前ら」

零が言うのと匙と木陰に隠れているギヤスパー以外は構えを解いた。

「おい魔訶何故アザゼルが嘘言つてないってわかるんだよ!？」

「匙先輩、零先輩が五感が鋭いのはご存知ですよね？」

「あ、ああ。それ、関係あるのか？」

「零は地獄耳で嘘はすぐ見破られる。実証済みだ」

匙が何故アザゼルが嘘をついてないかと聞くと小猫とゼノヴィアが理由を言つて、匙も構えを解いた。

「祐斗は今いねえよ。タイミングが悪かったな」

「そうか、聖魔刀使いはいねえのかよ。じゃあそこで隠れてるヴァンパイア」

零が言うのと今度はギヤスパーに目を向けた。隠れていたギヤスパーはビクツと慌てふためく。

『停止世界の邪眼』の持ち主なんだろう？そいつは使いこなせないと害悪になる代物だ神セイクリッド・ギア 器の補助具で不足している要素を補えばいいと思うが・・・そういや、悪魔は神セイクリッド・ギア 器の研究が進んでなかったな。五感から発動する神セイクリッド・ギア 器は持ち主のキャパシティが足りないと自然に動き出して危険極まりない」

ギヤスパーの顔というより両目を覗き込むアザゼル。ギヤスパーは墮天使のトップの顔が近づいてきてブルブル震えてる。

「それ、『黒い龍脈』か？練習するなら、それを使ってみろ。このヴァンパイアに接続して神セイクリッド・ギア 器の余分なパワーを吸い取りつつ発動すれ

ば、暴走も少なく済むだろうさ」

アザゼルはこちらに振り返り匙を指さして言う。

「へ？俺の神セイクリッド・ギア器、相手の神セイクリッド・ギア器の力も吸えるのか？」

「匙、ティアマットが言ってただろ？お前の神セイクリッド・ギア器は五大龍王の一角だど」

「そう言えばそうだったな」

匙は自分の神セイクリッド・ギア器がそんなに凄いととは思わず疑問に思ったが、零の言葉で納得した。

「つたく、これだから最近の神セイクリッド・ギア器所持者は自分の力をろくに知ろうとしない。そいつは最近の研究で発覚したことだが、そいつは、どんな物体にも接続する事が出来て、その力を散らせるんだよ。短時間なら、持ち主側のラインを引き話して他の者や物に接続させる事も可能だ。つてか今ティアマットつて言ったか!?!五大龍王最強の天魔カオス・カルマ・ドラゴンの業龍のティアマットか!?!」

「そうだが？」

アザゼルはティアマットの名前に驚き、零に聞き零は答えた。

「今ティアマットは美食グルメアイランドの島で修行中だ。ティアマットの目標は九王の一角竜王デロウスを倒す事だからな」

「何故ティアマットは美食グルメアイランドの島にいるんだ？」

アザゼルはティアマットが何故美食の島にいるか疑問に思った。

「使い魔の森に行った時に会って、ティアマットから使い魔になるつて言われたが、俺は人間だからな、仲間として迎えたんだ」

「成程な……。おいヴァンパイア、神セイクリッド・ギア器上達で一番手つ取り早いのは、赤龍帝を宿した者の血を飲むことだ。ヴァンパイアなんだから血を飲ましておけば力がつくさ。ま、後は自分達でやってみろ。それと赤龍帝またあの酒の肉食わしてくれよな」

アザゼルはそう言うと、一瞥してこの場をあとにしようとする。しかし、一度だけ立ち止まり、零の方に顔を向けた。

「ヴァーリ。うちの白龍皇が勝手に接触して悪かったな。さぞ驚いただろう？なーにあいつは変わった奴だが、今すぐ赤白ライバルの完全決着をしようなんて思っちゃいないだろうさ」

「正体語らずに俺に接触したあんたは謝らないのか？」

「そりゃ、俺の趣味だ。謝らねえよ。それに会ってすぐ俺の正体に気付いたなら別にいいだろう？」

「そうだな」

アザゼルは零の返事を聞いて学園から出て行った。

天使長と龍殺し（ドラゴン・スレイヤー）の聖剣

アザゼルが帰った後匙の『アフソープション・ライオン黒い龍脈』の舌をギヤスパーに接続し、余分な力を吸い取る吸引は可能だった。

零達が投げるバレーボールをギヤスパーが視界に映した瞬間、停止させていく。停止された物体は大体数分間だけ動きを完全に止められる。

最初に比べるとマシになったがそれでも無意識で発動させてしまうので、その度に零以外の人物を停止させるとギヤスパーは「ごめんなさいいいいいい！」と叫んで謝りながら逃げ出そうとしてその度に零に捕まってはまたギヤスパーが無意識で停止さすというループが出来ていた。

「一旦休憩だ。リアスも来たみたいだからな」

「どう？練習ははかどっているかしら？」

リアスの手にはサンドイッチが入ったバケットを持っていた。

休憩しながらギヤスパーの現状を話した。ついでにアザゼルが来たことも話した。

「アザゼルは神セイクリッド・ギア器について造詣が深いと聞くわ。神セイクリッド・ギア器について

のアドバイス……。知識を他者に助言するほど余裕ということかしら」

「そうだろうな。俺の対の白龍皇がいるのだからな」

「ギヤスパーと匙くんの神セイクリッド・ギア器にも詳しくあったのよね？」

「ああ。奴のアドバイス道理に確かに匙の神セイクリッド・ギア器でフォービドゥン・パロール・ビュウ停止世界の邪眼は抑えられるが根本的な解決は出来て無い。次の食材はアジアとギヤスパーの力が必要になるからな」

「次の食材と場所は？」

次の食材と聞き、匙とギヤスパー以外零に視線を向けた。

「次のターゲットはサンサングラミー。そして修行と言えば滝、デスフォールだ。デスフォールはモルス山脈のふもとに位置しており、滝の裏にサンサングラミーの住む洞窟がある。膨大な量の水が流れ落ちる滝で、毎分1兆リットルという膨大な流水の爆弾が全てを粉々に

してしまうため、「処刑の滝」と呼ばれ恐れられている。高圧の水は鋭利な刃物のように全てを切り裂くうえ、山のように巨大な岩や流木も水とともに流れてくる。滝の厚みが1キロもあるためミサイルを何発撃ち込んでも通過することは無く、滝壺の水が滞留して巨大な渦ができているため水中からも入れない。滝の上の川は水深1000メートルを超える激流で、それが放射状に流れ落ちるため、滝の側面の岩を掘って進むこともできない。まさに侵入困難な天然の要塞だ」

「成程・・・確かにギヤスパアの力が必要ね」

「私の今の釘パンチは15連が限界ですし・・・」

「流石にデュランダルのフルパワーでも斬るのは難しいだろうな」

と匙以外の全員がギヤスパアに注目した。

「ヒイヒイイツ！嫌あですううう。そんなおつかない所行きたくないいいいい!!」

案の定ギヤスパアは怯えた。

「まあまずは食義を覚えるのが先決だがな。ギヤスパアもキーだが今回は朱乃にある技を習得してもらおう予定だ」

「私ですか?」

「そうだ。上手く行けばこの先の戦闘でも役立つはずだ」

「分かりましたわ」

その後匙は花壇の作業に戻り、零達はギヤスパアの特訓を再開した。

「はいか」

数日後の休日零はある神社に到着した。

「いらっしやい、零君」

零を出迎えたのは巫女衣装を身に纏った朱乃だった。

そう朱乃はここに住んでいる。裏で特別の約定が執り行われて悪魔でも入る事が出来る。

「それで俺に会いたって言うてるのは本殿にいる奴か？」

零がここに来たのは朱乃を通じてある人物が零に会いたいと言った為である。その人物に零は当たりをつけた。

「彼が赤龍帝ですか？」

本殿に入ると輝くまでに金色の羽が舞う。端正な顔立ちの青年が零へ視線を向けていた。豪華な白ローブを身に包み、頭部の上に金色の輪っかが漂う。青年は優し気な笑みを浮かべ、握手を求めてくる。

「初めまして赤龍帝、魔訶零くん」

「ああ、初めまして。天使長さん」

「驚きました。会うのが私と分かっていましたのですか？」

そう零に会いたいと言ったのは天使長・ミカエルだった。

「先日アザゼルにも会ったからな。今度の三すくみの会談前に会いたかったんだろ？」

「その通りです。今日はこれを貴方に授けようと思いましたがね」

ミカエルが指さす方には聖なるオーラが滲み出ている一本の剣が宙に浮いていた。

「これは聖剣か？しかも只の聖剣じゃないな、左腕いや赤龍帝の籠手ブーステッド・ギアが疼く。これは龍殺しの聖剣か？」

「はい。これはゲオルギウス。聖ジョージが持っていた龍殺ドラゴン・スレイヤーしの聖剣『アスカロン』です」

「何故、俺にこれを？」

零は何故自分にアスカロンを渡すか分からず理由をきいた。

「私は今回の会談、三大勢力が手を取り合う大きな機会だと思ってるのです。このまま小規模な争いが断続的に続けば。いずれ三大勢力は滅ぶ。そうでなくても、横合いから他の勢力が攻め込んでくるかもしれません。その聖剣は貴方を通して悪魔サイドへのプレゼントです。今貴方は悪魔勢力と最前なので。悪魔側から噂の聖魔刀を数本頂きましたし。墮天使側にも贈り物をしました。過去に一度だけ

三大勢力が手を取り合った事があったのです。それは赤と白の龍を倒した時です。あの時のように再び手を取り合う事を願って、あなたに、赤龍帝に願をかけたのですよ」

「そう言う事か。では白龍皇ではないのだ？」

「彼女は戦闘狂ですから、アスカロンを渡せば直ぐ二天龍の戦いが起こると危惧したので貴方に贈る事にしました」

「そうか。なら有り難く頂く」

「これは特殊儀礼を施しているのです、ドラゴンを宿している貴方でも大丈夫ですよ」

そう言われ零はアスカロンに手を伸ばそうとすると、アスカロンの柄が零の方を向いた。

「！アスカロンが、貴方を担い手に認めた!？」

ミカエルが驚いたような声をあげた。朱乃も驚いている。

「俺と共にくるか？」

零がそう言っているとアスカロンはカツと光った。

ブーステッド・ギア
赤龍帝の籠手を出現させ、アスカロンの柄を握った。

その瞬間聖なるオーラと龍のオーラが混ざり合う。そして混ざった瞬間先程より眩い光が本殿を覆った。

ブーステッド・ギア
光りが治まると赤龍帝の籠手の甲の先端から刃を生やしていた。

「これからヨロシクなアスカロン」

初めての・・・

「お茶ですわ」

「ありがとう」

ミカエルが帰り零は朱乃が生活している境内の家の和室に通された。

茶道の作法で零は朱乃の入れた茶を飲んだ。

「朱乃の入れる茶は美味しいな」

「あらあら、ありがとうございます。所で零君ミカエル様に言いたい事とはいったいなんだったのですか?」

零はミカエルが帰る時に会談の時に話したいことがあると言った。ミカエルは必ず聞くと言い帰って行った。

「まあそれは会談の時にな。それより俺に何か聞きたい事でもあるんじゃないか?」

「零君は堕天使についてどう思われているのですか?」

「堕天使も、悪魔も、天使も皆人間と同じだ。いい奴もいれば、悪い奴もいる。朱乃お前は自身に流れている堕天使の血が嫌いなのか?」

「はい」

朱乃は背中から翼を広げる。いつもの悪魔の両翼とは違い、片方が悪魔の翼で、もう片方が堕天使の黒い翼だった。

「穢れた翼・・・悪魔と堕天使の翼、私はその両方を持っています。この羽が嫌で悪魔になったけど、生まれたのは堕天使と悪魔の羽、両方を持ったもつとおぞましい生き物。ふふふ、汚れた血を身に宿す私にはお似合いかもしれません」

「朱乃そんなに自分を悪く言うな。俺は堕天使で嫌いなのは、ボギーやコカビエルのようなクズだ。朱乃はリアスの女王でオカ研の副部長だろ?俺はお前の事は好ましいと思ってるぞ」

零の言葉に朱乃は泣いた。

「・・・殺し文句、言われちゃいましたわね。・・・そんな事言われたら、本当の本当に本気になっちゃうじゃないの・・・」

朱乃は何かを決意したような目をして零を見た。

「零君。私決めました、これからは遠慮しないわ」

「ん？何のことかわからんが、頑張れよ。それとアレは順調か？」

「はい。今は10万本で射程は15メートル程ですわ」

そう朱乃は零の教えでサニーの超触覚の細胞を移植しダイニングキッチンを習得したのだ。只今はまだサニー初登場時より半分の範囲だ。

「零君の言った意味が分かりましたわ。小猫ちゃんの釘パンチをスーパーフライ返しで上に返して突破口を開く。言葉だけなら簡単に出て来そうですが、いざやってみるよ難しいですわ」

「まだ時間はある。焦らず自分のペースで進めばいい」

「零君は今どれ位ありますの？」

「150万本の400メートルだ。デスフォール攻略には30万本に100メートルいると思う。まあ小猫の釘パンチが15連以上になればもつと少なくなっても大丈夫だが」

朱乃は零の言葉を聞きなにか思考している。

「・・・零君はどうやって動かしているのですか？」

朱乃は零がどうやって触覚を動かしているか聞いてきた。

「勘だ」

「か、勘ですか・・・？」

「ああ。直感ってやつだな。相手と対峙した時瞬間的に『最善手』が頭に浮かぶ・・・それが直感だ」

直観力・・・将棋のプロ棋士が次の一手を選ぶ際最善手は思考ではなく直感で打たれていることが多いと言われている。これはプロがアマチュアにはない脳の神経回路を駆使しているからでそれは長い訓練や経験によって発達するものだと言われている。

「因みに初めて見るグルメ界の猛獣にも直感は働くぞ」

「そうなのですか？」

朱乃はグルメ界の猛獣にも直感が働くことに疑問を覚えた。

「ああ。直感ってのは決して天性のものではなく、膨大な量の訓練と経験が生み出すものだ。それによって初見の生き物は勿論、水などのあらゆる自然物や目に見えないフェロモンなどの気体にまで直感が

効くようになる。まあ戦闘においてはバトルウルフのように天性の直観力を持つやつもいるがな」

「成程・・・」

朱乃は納得した。

「肝心なのは信じる事だ。小さな直感をまずは信じる。直感が正しいという積み重ねが、体から無駄な力みと思考を削ぎ落していく。それがより高いパフォーマンスを生む肉体と精神を作り上げる」

「と、いう事は経験あるのみですね。零君今すぐグルメアイランド美食の島に行きましよう!!」

朱乃は話を聞き経験を積むためにグルメアイランド美食の島に行こうと零に言った。

「待て待て。俺はこの後ギヤスパアの修行に付き合わななきゃならない。ネオに事情を説明するからネオに見てもらえないか？」

「・・・仕方ありませんわね。次の食材にはギヤスパア君のフォービドゥン・パロール・レユイ停止世界の邪眼の力があると行ってましたね」

「そう言う事だ。先に朱乃をグルメアイランド美食の島に送り届けてから合流するとしてよう」

そう言い零は裏のチャンネルを発動させネオに事情を説明し、ネオは朱乃を『三途の道』に連れて行った。2人を見送った零はライザー眷属の様子を見てから駒王学園に移動した。

「ぐふうううう・・・。れ、零先輩・・・っ、疲れましたよおおお」
両目をこするギヤスパア。

「もう少し頑張れギヤスパア。頑張ればグルメアイランド美食の島の食材を食べさせてるから」

「ほ、本当ですか!?!」

「ああ。だからもう少し頑張れ」

「はい!」

最初の弱音は何処へやら。ギヤスパーは気合を入れ投げられたボールを宙に停める修行を再開した。

「いいんですか零先輩。そう簡単に美食の島をギヤー君にあげて？」

「小猫の言う事は最もだが、今はやる気を出す方が先決だからな」

「そうだな。やる気が無ければ修行の意味はない」

小猫が美食の島の食材を簡単にあげているのか聞くと零はやる気を出す為と言い、ゼノヴィアも同意した為小猫はこれ以上何も言わなかった。

そして10分後大分息があがったギヤスパーをみて休憩に入る事にした。

「さてそろそろ休憩するぞ。丁度飯も炊けたしな」

「いい匂いします。零先輩これはなんですか？」

「これはイチゴ飯だ。米一粒一粒が小さなイチゴになっている桃色のごはんで、程よい酸味が高級寿司屋の酢飯のように絶品で、噛めば噛むほどイチゴ本来の甘みも交わるぞ。疲れた体には丁度いいだろう？」

零の言葉に全員頷き合掌した。

『『この世のすべての食材に感謝を込めて、いただきます!!』』

ギヤスパーには事前に伝えていたのでギヤスパーは迷うことなく言った。

「零先輩が言った通りこの前の節乃さんのお店で食べた高級寿司の酢飯のように絶品です」

「噛めば噛むほどイチゴの甘みも強くなる」

「初めて美食の島の食材を食べましたけど本当に美味しいです!!」

3人特に初めて美食の島の食材を食べたギヤスパーはとても喜んだ。

「さてギヤスパー食べて分かったと思うが、それが美食の島の食材だ。リアス達は修行をこなしつつ自分の適合食材やフルコースの食材を探している。ギヤスパー1回だけでいい。次の食材を捕りに行かないか?」

「・・・分かりました。怖いですが、頑張ります!」

ギヤスパーの意気込みに零は笑顔で頷いた。

会談開始

ギヤスパーの特訓から数日。いよいよ今日三大勢力の会談を迎えた。

部室にはリアス達グレモリー眷属に零、アーシア、それにアザゼルからの要請もあり夕麻達もいた。最も会談に出席するのは夕麻だけで、ドーナシック達は会談に参加できないギヤスパーの護衛だ。

「さて、行くわよ」

リアスの言葉に頷く朱乃達。

『ぶ、部長ーみ、皆さあああああん！』

部室に置かれた段ボール。ギヤスパーが落ち着くと言い常に入っている段ボールの中からギヤスパーの声がする。

「ギヤスパー、今日の会談は大事なものだから、時間停止の神セイクリッド・ギア 器を使いこなせていないあなたは参加できないのよ？」

とリアスが優しく告げる。

「ドーナシック、カラワーナ、ミツテルト。ギヤスパーの事頼んだぞ」「はいー！」

ドーナシックは普通だったが、カラワーナとミツテルトの足元には女性用の服が多数入った袋が置いていた。

ギヤスパーの護衛としてギヤスパーが男の娘と聞き、しかも女装趣味があると聞き着せ替え人形にしようと企んでいた。零は害がないなら大丈夫と思いつ込まなかった。

コンコン、リアスが会談で使う会議室の扉をノックする。

「失礼します」

リアスが扉を開くとそこには・・・

特別に用意させたという豪華絢爛なテーブル。それを囲む様にここ最近会った人達が座っていた。空気は静寂に包まれており、全員真

剣な面持ちだった。

悪魔側にはサーゼクスとセラフォル。給仕係のグレイファイアがいた。

天使側はミカエルにウェーブのかかったブロンドの女性天使がいた。

墮天使側は浴衣姿ではなく、装飾の凝った黒いローブ姿のアザゼルバニング・ドラゴンに白い龍ヴァーリ。

「私の妹とその眷属に、赤龍帝にして美食の島の主の魔訶零君とその仲間達だ」

サーゼクスが他の陣営のお偉いさんにリアス達を紹介する。各代表のリアスと零は会釈する。

「先日のコカビエル襲撃で彼女達が活躍してくれた」

「報告は受けています。改めてお礼を申し上げます」

「悪かったな、俺の所のコカビエルが迷惑かけた」

素直に礼を言ったミカエルと違い、アザゼルは悪びれた様子もなく言った。

「そこに座りなさい。ああ零君は中央の席に。彼女達は零君の後ろに座ってもらう」

サーゼクスの指示に壁側に設置された椅子にリアス達が座った。隣にはソーナ達シトリー眷属達が座っていた。

零とアーシア、夕麻は中央の席に座った。

「全員が揃ったところで、会談の前提条件をひとつ。此処にいる者達は、最重要禁則事項である『神の不在』を認知している」

夕麻達は事前にアザゼルから言っといういいと言われ、神の不在は知っている。

「では、それを認知しているとして、話を進める」
こうして三大勢力の会談が始まった。

会談は順調に進んでいた

「というように我々天使は――」

ミカエルが話、

「そうだな、その方がいいのかもしれない。このままでは確実に三大勢力ともに滅びの道を――」

「ま、俺等は特に拘る必要もないけどな」

サーゼクスもいい、たまに喋るアザゼルの一言で場が凍り付く事はあったが、墮天使の総督はわざとその空気を作って楽しんでるようだ。

「さて、リアス。そろそろ、先日の事件について話してもらおうかな」
「はい、ルシファア様」

サーゼクスに促され、リアスとソーナ、朱乃が立ち上がり、この前のコカビエル戦での一部始終を話し始めた。それを聞き入る三大勢力の面々。

報告を受けた各陣営トップは溜息を吐く者、顔をしかめる者、笑う者と反応は個々に違った。

「以上が、私リアス・グレモリーとその眷属、及び協力者が関与した事件の報告です」

全てを言い終えたりアスはサーゼクスの一言で着席した。

「さて、アザゼル。この報告を受けて、墮天使総督の意見を聞きたい」

サーゼクスの問いに全員の視線が黒髪の総督へ集中する。

アザゼルは不敵の笑みを浮べて話し始めた。

「先日の事件は我が墮天使中枢組織『神の子を見張る者』の幹部コカビエルが、他の幹部及び総督の俺に黙って、単独で起こしたものだ。鎮圧の為に『白龍皇』を送り出したが、その前にそこにいる『赤龍帝』がコカビエルがやったからな」

「フツ。凄かったわよ。あのコカビエルが零に全くダメージを与えられず負けたんだから。それに私の半減で飛んでるコカビエルを止めようとしたけど全く止められず羽だけしか回収できなかったんだから」

アザゼルに続く様ヴァーリが言った。

「しかもお前コカビエルに倍化の力譲渡して上で勝ったんだろ？もしかもしれっと地球破壊できるとかやべえ事言ってるし、お前の師匠達数人もそのレベルって……グルメアイランド美食の島は魔境以上の魔境なのか？」

アザゼルの言葉にグルメアイルランド美食の島を知るリアス達はその通りと言う様に頷いた。

「彼の事は後に時間があるのでその時に聞くとして、説明としては最低の報告ですが、あなた個人が我々と大きな事を起こしたくないという話は知っています。それに関しては本当なのでしょう?」

ミカエルが嘆息しながら言う。

「ああ、俺は戦争に興味なんてない。コカビエルも俺の事をこきおろしていたと、そちらの報告でもあったじゃないか」

「アザゼル、一つ訊きたいのだが、どうしてここ数年セイクリッド・ギア神器の所持者をかき集めている?最初は人間たちを集めて戦力増強を図っているのかと思っていた。天界か我々に戦争をけしかけるのではないかも予測していたのだが・・・」

「そう、いつまで経ってもあなたは戦争を仕掛けてはこなかった。パニシング・ドラゴン『白い龍』を手に入れたと聞いた時には、強い警戒心を抱いたものです」

サーゼクスがアザゼルに聞き、ミカエルもサーゼクスと同様だった。

2人の意見を聞いて、アザゼルは苦笑する。

「セイクリッド・ギア神器 研究のためさ。なんなら、一部研究資料もお前達に送ろうか?つて研究していたとしても、それで戦争なんざしかけねえよ。戦に今更興味なんてないからな。俺はいまの世界に十分満足している。

部下に『人間界の政治にまで手を出すな』よ強く言い渡しているぐらいだぜ?宗教にも介入するつもりはねえし、悪魔の業界にも影響を及ぼせるつもりはねえ。全く俺の信用は三すくみの中でも最低かよ」

「それはそうだ」

「そうですね」

「その通りね☆」

サーゼクス、ミカエル、セラフオールの意見が一致していた。どれだけ信用されていないか分かる。

アザゼルはそれを聞き、面白くなさそうに耳をかつぽじっていた。

「チツ。神や先代ルシファーよりもマシかと思っただが、お前等も面倒

くさい奴等だ。こそこそ研究するのもこれ以上性に合わねえか。あー、わかったよ。なら和平を結ぼうぜ。元々そのつもりもあつたんだろ？天使も悪魔もよ？」

アザゼルの一言に各陣営は少しの間、驚きに包まれていた。

「ええ、私も悪魔側とグリゴリに和平を持ちかける予定でした。このままこれ以上三すくみの関係が続けていても、今の世界の害となる。天使の長である私が言うのも何ですが、戦争の大本である神と魔王は消滅したのですから」

アザゼルの一言に驚いていたミカエルが微笑み言う。

「我等も同じだ。魔王がいなくとも種を存続するため、悪魔も先に進まなければならぬ。戦争は我等も望むべきものではない。次の戦争をすれば、悪魔は滅ぶ」

ミカエルに続きサーゼクスも言った。アザゼルもサーゼクスの言葉に頷いた。

「そう次の戦争をすれば、三すくみは今度こそ共倒れだ、そして、人間界にも影響を大きく及ぼし世界は終わる。俺等は戦争をもう起こせない」

各陣営も戦争を望んでいないのか、緊張感が若干弱まった。

「と、こんなところだろうか？」

一通り重要な話が終わり、一息ついた。

「さて、話し合いもだいぶ良い方向に片付いてきましたし、そろそろ赤龍帝殿のお話を聞いてもよろしいかな」

ミカエルが零を視線を向け言った。

全員の視線が零に集中する。

「まず最初に聞きたいことはアジアの事だ」

零がチラツとアジアを見て言った。

「何故アジアを追放した？」

「それに関しては申し訳ないとしか言えません。神が消滅したあと、加護と慈悲と奇跡を司る『システム』だけ残りました。神が残した『システム』を守る為です。『システム』に影響を与えるを神セイクリッド・ギア器を持つアジア・アルジェントの神セイクリッド・ギア器は悪魔も堕天使も回復出来てしま

う。それは周囲の信仰に影響を出す恐れが……」

「しかしその様に設定したのは神じゃないのか？ならその『システム』に影響はないのではないか？」

「っ!？」

零の言葉にミカエルが目を見開く。

「言われてみるとそうだな。」

セイクリッド・ギア
神

器は神が作り出した物。魔訶零の

言い分は間違つてないな」

同意するようにアザゼルが言う。

「俺はアーシアを魔女だとは思わない。アーシアこそ真の聖女だと俺は言う。彼女程他人に優しくできる人間はいないと思う」

「レイさん……」

アーシアは零の言葉を聞き、涙を流す。隣に座る夕麻がアーシアを抱きしめ頭を撫ぜている。

「……その通りですね。アーシア、それにゼノヴィア貴方達を異端のとし、教会から追放した事を謝罪します。申し訳ありませんでした」

そう言いミカエルはアーシアとゼノヴィアに頭を下げた。

「頭をあげて下さいミカエル様。確かに教会を追放された時には怒りを感じましたが、今では今まで出来なかったことが出来、毎日が充実しています」

「私も最初は悲しかったですが、レイさん達に出会えたことが一番の幸せです」

ゼノヴィアもアーシアも気にしてないと言う。

「貴方達の配慮に感謝します」

ミカエルは再び頭を下げた。

「次に墮天使勢」

「俺もあるのかよ……なんだ？」

「部下の管理をしつかりしろ。ボギーしかりコカビエルと、いかにも反勢力の存在を野放しにしすぎだ。下手をすれば、アーシア、夕麻、ドーナシーク、カラワーナ、ミッテルトは死んでいたのかもしれないのだからな」

今度はアザゼルに向かって言う。

「あー確かに、悪いと思っている。レイナーレお前は俺達上層部を恨んでいるか？」

「いいえ総督。私達は逆に感謝しています。あの時零君に出会えた事で私達は強くなれました。あの下級墮天使の私達は死に、今ここにいるのは美食の島の主、魔訶零の部下です」

夕麻は遠回しに墮天使勢力を抜け美食の島の主である零の配下と言った。

「・・・そっか魔訶零」

「みなまで言うな。ちゃんと夕麻達の面倒はみる」

「感謝する」

アザゼルが小さく頭を下げる。

「さて、次だが――」

会談はまだまだ続く。

正体

「さて、次だが美食グルメの島の食材について。その事は零君に話してもらおう」

次の議題は美食グルメの島の食材についてとサーゼクスが言う。零が立ち上がった。

「前にサーゼクス殿とセラフオル殿に言ったが、仮に美食グルメの島の食材を天界、冥界に卸す条件は階級に関係なく平等に分け与える事。誰かが独占しない事が絶対条件だ。美味しい物は皆で食べた方が美味しいからだ」

「勿論ちゃんと管理するよ☆」

「私も全員にいきわたるようにします」

「ホントは独占したいけど、あの酒の肉が食えなくなるなら、仕方ねえ。俺も同意する」

零の要請にセラフオル、ミカエル、アザゼルが同意した。

「基本的に卸すのは美食グルメの島でよく獲れる動植物の予定だ。パーティーなどで使う特別な食材は追加の依頼を出してくれ」

「わかった☆」

「はい」

「あいよ」

零は卸す物は一般流通してもいい物と言い、特別な物は別途かかると言った。各代表達は頷いた

「さて、そろそろ世界に影響を及ぼしそうな奴等の意見を訊こうか。無敵のドラゴンさまにな。まずはヴァーリ、お前は世界をどうしたい？」

卸しの話に区切りがつき、アザゼルが世界に影響がでる存在に問いかける。最初はヴァーリに聞いた。

「私は強い者と戦えればそれでいいわ」

アザゼルの問いかけに白龍皇ヴァーリは言う。

「じゃあ、赤龍帝、お前はどうか？」

アザゼルが零に問いかける。

「俺は人生のフルコースメニューを揃える事だ」

「人生のフルコースメニュー？」

零は自分のフルコースを揃えると言うと、アザゼルが疑問に思った。

「オードブル^前、スープ、魚料理、肉料理、主菜^{メイン}、サラダ、デザート、ドリンクの事だ。俺はまだスープ、魚料理、肉料理、デザートしか決まってる。候補に留めているのが幾つかあるが、俺はまず自身のフルコースを揃えたい」

「お前ほどの実力者でも半分しか決まっていなかったか、^{グルメアイランド}美食の島は相当広いんだな」

零の説明を聞き、零がまだフルコースを半分しか揃えてない事にアザゼルは呆れ、^{グルメアイランド}美食の島の広さに天を仰いだ。

「^{グルメアイランド}美食の島特にグルメ界は毎日のように新しい食材が誕生するからな」

「グルメ界？」

「グルメ界と聞きミカエルが首を傾げた。」

「^{グルメアイランド}美食の島の中心部は比較的に安全だが、その中心部の円形の端に柵がありそこから先はグルメ界となっている。グルメ界は猛獣の捕獲レベルが高く、天候も厳しい環境だ。ああ、捕獲レベルとは食材の捕獲の困難さを表したもので、捕獲レベル1で、猟銃で武装したプロのハンターが10人必要だな。5を越えれば戦車でも破壊されうるレベルだな。後発見の難しさも含まれる。天使、墮天使、悪魔でも捕獲レベル10以上の猛獣は捕獲出来ないだろう。勿論強さの関係もあるが。食材の美味さもグルメ界が断然上だ」

「捕獲レベルか・・・リアス達は今どのぐらいなら捕獲はできるのかな？」

「個人なら70前後だな。協力すれば80までなら捕獲は出来るだろう。グルメ界に入るには最低400以上を倒せないと駄目だな」

サーゼクスに今のリアス達の強さを聞かれ、零は正直に言い、グルメ界に入るには400以上を倒せないと駄目だと言った。

「400以上でようやくスタートラインか・・・」

アザゼルがそれを聞き、グルメ界の厳しさに身震いした。

「それに俺の魚料理でもある美食の島のフルコースをゲットするには九王と戦う必要がある」

「九王?」

グルメアイランド

「美食の島に君臨する9体の猛獣の総称だそうだ。魔訶零のパートナーも九王らしい」

「何故貴方が知っているのですアザゼル?」

「前に魔訶零が禁手に至った経緯を聞いてな、その時に説明を受けたんだよ」

九王についてミカエルが疑問に思っているとアザゼルが答え、その理由を含め説明した。

「狼王バトルウルフ・ギネス捕獲レベル10550

鯨王ムーン捕獲レベル10600

馬王ヘラクレス捕獲レベル10200

鳥王エンペラークロウ捕獲レベル10000

猿王バンビーナ捕獲レベル10000

蛇王マザースネーク捕獲レベル10310

鹿王スカイディア捕獲レベル10450

竜王デロウス捕獲レベル10590そして、

狐王スノー捕獲レベル10000。以上がグルメアイランド美食の島に君臨する9体の猛獣だ」

「強いつてもんじゃねだろーそれ」

あまりの強さにアザゼルを含めほぼ全員が戦慄した。

「リアス達も九王に挑むつもりなんだね?」

「はい。今は弱いですけど、何時か私は全ての九王を倒します。それが私の覚悟です!」

サーゼクスの問いかけに、強い意志を持って言うリアス。その覚悟にトップ達は一瞬気圧された。

「とても強い覚悟が伝わりました」

「ああ。一瞬飲まれそうになったぜ。おいサーゼクス、お前の妹は

もつと化けるぞ?」

「ああ。魔王としても兄としても嬉しい限りだよ」

サーゼクスは微笑みながらそう言った。

「さて魔訶零。お前に聞きたいことがある」

「なんでしようアザゼル殿」

真剣な表情をしたアザゼルの問いかけに、零も真剣な表情で答える。

「10年前の突如美食グルメアイランドの島出現したが、お前はその時何処にいた?」

「アザゼル何故そんな事を聞くのです?」

「魔訶零の身辺調査をした時に戸籍に引つ掛かってな。確かに戸籍はあるが、その戸籍は巧妙だったが細工の痕がみられた。お前は何処から来た?」

アザゼルの言葉をきき零は自身の事を話す決意をした。

「俺は美食グルメアイランドの島と同時にこの世界に来た」

「この世界だと?その言い方だと別の世界があるみたいだな」

「その通りだ。俺は別の世界で死に特典を持つてこの世界に来た」

リアス達は零が死んだと聞いて驚いた。圧倒的強い零が死ぬとはその世界はどんな強者がいるか身震いした。

「ああ言っておくが俺の強さはこの世界で鍛えたものだ。俺は前の世界で普通の一般人だ。特典のおかげで強くなったんだ」

「その特典は何だ?それとお前をこの世界に送ったのは誰だ?」

「俺をこの世界に送ったのは女神だ。特典はトリコだ」

零が女神によって送られた事に驚き、特典の事で全員が首を傾げた。

「トリコっていうのは、『食』をテーマとした異色の冒険・バトル漫画だ。俺の力はその登場人物達の力だ。その特典がトリコの世界と能力だから、この世界に美食グルメアイランドの島が出現した経緯だ」

突拍子もない話だが、筋は通っているので一同は納得した。

「納得してくれたかアザゼル殿?」

「ああ。頭が痛いのが納得したよ」

アザゼルが顔に手を置いて言う。

瞬間世界が停止した。

奪還

「今のはギヤスパアの・・・」

「停まっているのはアーシアとソーナ達だけの様ね。かく言う私も一瞬滅びの魔力を纏ったけどね」

「私もデュランダルの力を盾に使った」

零が会議室を襲った時間停止はギヤスパアものだと呟いていると、リアスが会議室を見渡し、アーシアとソーナ達・シントリー眷属以外は動いていると理解する零。

「これ揺れ攻撃を受けているのか？」

「ああテロだな。俺達の和平を邪魔したいみたいだな。」

零が聞くとアザゼルが答える。

「この時間停止はギヤスパアの力だろうが、ギヤスパアの護衛にはドーナシック達がいる筈だが・・・」

「恐らく力を譲渡できる神セイクリッド・ギア器か魔術で護衛を倒し、ハーフヴァンパイアのセイクリッド・ギア器を強制的に禁手バランス・ブレイカー状態としたんだろうな。

一時的な禁手バランス・ブレイカー状態だろうが、それでも視界に映したものの内部にいる者にまで効果を及ぼすとは・・・。あのハーフヴァンパイアの潜在能力が高いつてことか。ま、俺達トップ陣を停めるには出力不足だったようだが」

「ギヤスパアは旧校舎でテロリストの武器にされている。どこで私の下僕の情報を得たのかしら。しかも、大事な会談をつけ狙う戦力にされるなんてツ！これほど侮辱される行為もないわっ！」

零がドーナシック達がついていながら、ギヤスパアが利用されている事に疑問をもつが、アザゼルが憶測を言くと、それを聞いたリアスは全身を紅いオーラがほとしぼらせる。

「ちなみにこの校舎を外で取り囲んでいた墮天使、天使、悪魔の軍勢も全部停止させられているようだぜ。全くリアス・グレモリーの眷属は未恐ろしい限りだ」

そう言いながらアザゼルが手を窓に向けると、外の空に無数の光の槍が現れ、アザゼルが手を下げると同時に光の槍が雨となってテロリ

ストの魔術師達に降り注ぐ。

「この学園は結界に囲われている。それにもかかわらず、こいつ等は結界内に出現してきた。この敷地内に外の転移用魔法陣とゲートを繋いでいる奴がいるって事だ。どつちにしても『停止世界の邪眼』の効果をこれ以上高められると、俺達も停止させられる恐れがある。時間を停めて校舎ごと屠るつもりだろうな」

アザゼルの視線の先では校庭の各所で魔法陣が出現し、魔法陣から魔術師が出現した。

「ハーフヴァンパイアを奪い返さねえとな。おいヴァーリ」
「なにアザゼル」

アザゼルは後ろに控えていたヴァーリを呼ぶ。

「お前は外で敵の目を引け。白龍皇が前に出れば何か動くかもしれない」

「私がいることはあつちも承知じゃない？」

「注意さえ引き付けさえばいい。後は赤龍帝がやってくれるだろう？」

「まあ方法がないって訳じゃないがな」

「って事だ」

「了解」

アザゼルがヴァーリに気を引くように言うと、ヴァーリは自分がいる事は相手も知っているのでは？と聞くと、気を引いている間に零が何とかするだろうと言うと零は頷き、ヴァーリも同意した。

カツ！ヴァーリの背中に光の翼が展開する。

「バランス・ブレイク禁手化」

『バニシングドラゴンVanishing Dragon バランスブレイカーBalance Breaker』

!!!
!!!
!!!
!!!
音声のあと、ヴァーリの体を真っ白なオーラが覆う。光が止んだ時、ヴァーリの体は白い輝きを放つ全身鎧プレート・アーマーに包まれていた。最後にマスクがシュバツとヴァーリの顔を覆った。

ヴァーリは零を一瞥したあと、会議室の窓を開き、空へと飛び出していった。

刹那——

ドドドドドドドドドンッ！

外で巻き起こる爆風。ヴァーリは魔術師相手に一騎当千していた。

「へー強いのは分かっていたが、想像以上だな」

零はヴァーリを見ながらそう言った。

「で？赤龍帝ハーフヴァンパイアの救出はどうする？」

「ああ。こいつがいる」

アザゼルにどうやってギヤスパーを助けるのかと聞かれると、零は足先で影をコンコンと叩くと、シーサーペントのような姿をした漆黒の蛇が出て来た。

「こいつは透影。人や獣の影に隠れ、長い舌で皮膚から栄養を奪う猛獣で捕獲レベル295。グルメ界に生息しており、様々な形態に姿を変え人や物を影で回収できる能力をもつ」

「成程。それでギヤスパー君達を助けるといふ事だね」

「ああ」

サーゼクスの問いかけに零は答えた。

「回収しろ透影」

そう言うのと透影は床に溶ける様に消えた。

数分後傷だらけのドーナシック、カラワーナ、ミツテルトと拘束されているギヤスパーに数人の魔術師が透影の影から出て来た。

「ヘアロック」

零は髪でノッキングをし魔術師を捕らえた。

「ドーナシック！カラワーナ！ミツテルト！」

「ギヤスパー！」

魔術師の確保を確認した夕麻は3人の元へ、リアスはギヤスパーの元に駆け寄った。

「グツ・・・零様、レイナール様申し訳ございません・・・」

「いきなり魔術師達が襲ってきて・・・」

「強化され負けてしまったっす・・・」

「そんな事は言い。お前達が生きてただけで十分だ」

「零君の言う通りよ、よく頑張ったわ皆」

謝罪するドーナシック達だったが、零と夕麻は咎めず、労った。

「ぶ、部長！」

「ギヤスパー良かったわ。無事だったのね」

「は、はい。でもドーナシックさん達が僕を守るため傷ついてしまつて……やっぱり僕は死んだ方がいいのです。僕を殺してください……。この眼のせいで、僕は誰とも仲良くななんてできないんです。迷惑ばかりで、臆病者で……」

「馬鹿な事言わないで。私はあなたを見捨てないわよ？あなたは私の下僕で眷属なのよ。ギヤスパー、私にいっぱい迷惑をかけてちょうだい。私は何度も何度もあなたを叱ってあげる！慰めてあげる！決してあなたを放さないわ！」

「ぶ、部長……僕は……僕はっ！」

ギヤスパーは自身のせいでドーナシック達が傷ついた事でネガティブになっていて自信を殺すようお願いするが、リアスは決して見捨てないと言い、ギヤスパーは嬉し涙を流す。

そして決心がついた顔で零の方を向いた。

「零先輩。ぼ、僕に血を分けてくれませんか？ぼ、僕も皆の為に強くなりたいです！」

「いいだろう。受け取れギヤスパー」

零は左手をナイフで少し切り、血をギヤスパーに飲ませた。

すると室内の空気が一気に様変わりした。不気味で言い知れない悪寒が駆け巡った。零の目の前にいたギヤスパーは消えており、天井近くを無数のコウモリが飛んでいた。そして窓から出て魔術師達に襲いかかる。コウモリは魔術師の体を包み込んで、各部位を噛んで魔力を吸い出す。魔術師は魔術の弾を撃つが、全て空中で停止した。

『無駄ですよ。あなた達の動き、攻撃は全て僕が見ています。僕はあなた達を停めます！』

無数のコウモリが赤い瞳を光らせ、魔術師の時間を停止させる。

『零先輩！トドメを！』

「任せろ！ポイズンライフル！」

零は麻痺させる毒を停止している魔術師達に当て、停止から解放されるが、毒でその場に倒れた。

「一皮むけたなギヤスパー」

『はい！』

紹介

「アザゼル。先程の話の続きだが」

「あー何だ？」

サーゼクスがアザゼルに聞く。

「セイクリッド・ギア神器を集めて、何をしようとした？ 『ロンギヌス神滅具』の所持者も何名か集めたそうだな？ 神もいないのに神殺しでもするつもりだったのかな？」

アザゼルはその問いに首を横に振った。

「備えてたのさ」

「備えてた？ 戦争を否定したばかりで不安を煽る物言いです」

ミカエルが呆れるように言う。

「言つたら？ お前等に戦争はしない。こちらからも戦争をしかけない。ただ、自衛の手段は必要だって、お前等の攻撃に備えているわけじゃねえぞ？」

「では？」

「カオス・ブリゲード『禍の団』だろ？」

「なんだ魔訶零。知っていたのか？」

「まあな」

アザゼルが組織の名を言うより先に零が組織名を言うと、アザゼルが聞いてきて零は曖昧に答えた。

「組織名と背景が判明したのはつい最近だが、それ以前からもうちの副総督シエムハザが不審な行為をする集団に目をつけていたのさ。そいつらは三大勢力の危険分子を集めているそうだ。なかには、バランス・プレイカー禁手に至った神セイクリッド・ギア器持ちの人間も含まれている。『ロンギヌス神滅具』持ちも数人確認してるぜ」

「その者達の目的は？」

ミカエルが聞く。

「破壊と混乱。単純だろう？ この世界の平和が気に入らないのさ。テロリストだ。しかも最大級にたちが悪い。組織の頭は『ウエルシユ・ドラゴン赤い龍』と『パニング・ドラゴン白い龍』の他に強大で凶悪なドラゴンだよ」

『ッ！』

アザゼルの告白に零以外の全員が絶句した。

「・・・そうか彼が動いたのか。『無限の龍神』ウロボロス・ドラゴン オーフイス。神が恐れ
たドラゴン。この世界ができあがった時から最強の座に君臨し続け
ている者」

『そう、オーフェイスが「禍の団」カオス・ブリゲードのトップです』

サーゼクスに続くように聞きなれない声が飛び込んでくる。

カッ！声と同時に会議室の床に魔法陣が浮かび上がる。

「そうか。そうくるわけか！今回の黒幕は」

床に現れた魔法陣を見てアザゼルは笑い、サーゼクスは苦虫を噛み
潰したような表情をした。

「レヴィアタンの魔法陣」

「ヴァチカンの書物で見た事があるぞ。あれは旧魔王レヴィアタンの
魔法陣だ」

リアス達は知っているセラフオルーの魔法陣の模様ではないのに、
サーゼクスがレヴィアタンの魔法陣と言った事で疑問に思ったが、ゼ
ノヴィアが魔法陣を指さし呟いたことで、疑問は解消された。

魔法陣から現れたのは、一人の女性。胸元が大きく開いていて、深
いスリットも入ったドレスに身を包んでいる。

「ごきげんよう、現魔王サーゼクス殿」

不敵な物言いで女性はサーゼクスに挨拶をする。

「先代レヴィアタンの血を引く者。カテレア・レヴィアタン。これは
どういうことだ？」

「旧魔王派の者達はほとんどが『禍の団』カオス・ブリゲードに協力することに決めまし
た」

サーゼクスの問いかけに、カテレアはそう答えた。

「新旧魔王サイドの確執が本格的になったわけか。悪魔も大変だな」

アザゼルは他人事のように笑う。

「オーフェイスは力の象徴とし、その力で一度世界を滅ぼし、もう一度構
築します。新世界を私達を取り仕切るのです」

「はっ。結局は他人の力頼りか」

「下等な人間が生意気な！」

カテレアの言葉を鼻で笑うと、カテレアは零を睨む。

「そもそもトップは5年前から不在だろうが」

「何故それを知っている!？」

「何故かつて?・・・丁度来たみたいだな」

零がトップは不在と言うとカテレアは声を荒げ、零は外に目線を向けた。

「紹介しよう。あれが美食の島に君臨する九王の一角、竜王デロウスと、俺の仲間である天魔の業龍のティアマツトそして・・・」

零の目線をおって全員が同じ方を向くと、裏のチャンネルからデロウスと龍の姿のティアマツトが丁度出て来た所だった。

「ん。我参上」

「5年前から美食の島に住み着いた、無限の龍神のオーフィスだ」

『『ツ?!?』』

デロウス、ティアマツトそしてオーフィスの登場に零以外が驚愕した。

「ちよつと待つて魔訶零!ティアマツトは美食の島にいる事は聞いていたが、オーフィスは聞いてねーぞ?!？」

「聞かれなかったからな」

「普通オーフィスが美食の島にいると思わねーよ!？」

アザゼルがオーフィスが美食の島にいると聞いていないと言うと、零はしれつと言い、アザゼルは頭を抱えて絶叫した。

「カテレア。蛇は返してもらおう」

オーフィスがカテレアに近づき、オーフィスの力である蛇をカテレアから奪い返した。

「オーフィス何故です!?!真の静寂が欲しくないのでですか!？」

「静寂はもういらぬ。美食の島は知らない事がいっぱい。ご飯は美味しい。零達と食べるご飯はもっと美味しい。だから、我美食の島にいる」

「世界に無関心だったオーフィスがこうも変わるのか・・・」

「恐るべし美食の島」

「ですがこれで流れはかわります」

オーフィスの言葉を聞き、トップ達はそう言った。

「ッ！せめてトップの誰かを道連れに……」

「させん。ヘアロックからのノッキング」

トップの誰かを道連れに自爆しようとしたカテレアを零のヘアロックとノッキングで制圧した。

「暫くは目を覚まさないから、今のうちに拘束しておけ」

「ありがとう零君」

サーゼクスが礼を言いカテレアを拘束し、冥界に転移させた。

「で、オーフィスお前は世界をどうこうするつもりはないんだな？」

「ん。今は美食の島で零達と過ごしたい」

アザゼルがオーフィスに聞くと、オーフィスはそう返した。

「あれが美食の島グルメアイランドに君臨する九王の一角か……」

「オーフィス以上のようなですね……」

「それにティアマツトも最後にみた時よりも強くなっているみたいだ」

「今の彼女ならかつての二天龍と同等、いえそれ以上ですね」

一方サーゼクスとミカエルはデロウスとティアマツトを見て思った事を言った。

赤と白の激突

「さて残りの連中を片付けるか」

『!!!?』

零がそう言い戦闘態勢に入ると、そこにいる全員が零の後ろに赤い鬼が見えた。

校庭に立った零は更に威圧を高める。赤い鬼以外に、真っ黒なゾンビのような姿なもの、髪でできた藁人形のようなもの、黒い体に黄色の筋が入った海坊主のような姿なものが並び、敵魔術師達はガタガタと震えている。

「抵抗するなら容赦しない。戦闘か投降か好きな方を選べ」

そう言う零の言葉に魔術師達は次々投降する。

「これで一件・・・落着じやないな」

波動弾が零に迫るが髪誘導^{ヘアリード}で逸らす。

「やれやれ反旗か、ヴァーリ」

「そよアザゼル」

そう波動弾を撃ったのはヴァーリだった。

「全く俺もやきが回ったもんだ。身内がこれとはな・・・何時からだ？何時からそういうことになった？」

「コカビエルの時の帰る途中でオフアーを受けたのよ。悪いわねアザゼル。こっちの方が面白そうなの」

「俺はお前に『強くなれ』と言ったが、『世界を滅ぼす要因だけは作るな』とも言ったはずだ」

「関係ない。私は永遠に戦えればいいのよ」

「そうかよ。いや、俺は心のどこかでお前が手元から離れていくのを予測していたのかもしれない。お前は出会った時から今日まで強い者との戦いを求めていたものな」

苦笑するアザゼルの尻目にヴァーリは自身の胸に手を当てて、零に向かつて言う。

「私の本名はヴァーリ。ヴァーリ・ルシファーよ」

「ルシファーだと？」

「死んだ先代の魔王ルシファアの血を引く者なんだ。けど、私は旧魔王の孫である父と人間の母との間に生まれた混血児。『白い龍』の神セイクリッド・ギア器は半分人間だから手に入れたもの。偶然だけどね。でも、ルシファアの真の血縁者であり、『白い龍』パニング・ドラゴンでもある私が誕生した」
ヴァーリの背中から光の翼と共に悪魔の翼が幾重にも生えだした。
「嘘よ……そんな……」
「事実だ。もし、冗談のような存在がいるとしたら、コイツの事さ。俺が知っているなかでも過去現在、恐らく未来永劫においても最強の白龍皇になる」

リアスが驚愕の表情を浮かべおり、アザゼルが肯定した。
「色々語ったけど、もう言葉は要らないわよね？」

零の方を向きそう言うヴァーリ。

「さあ戦いましょう。異世界からの転生者にして美食の島主で私のライバルの『赤い龍』ウエルシユドラゴンの魔訶零」

ヴァーリはヤル気満々に言う。

「はあ。何言っても戦うつもりだろ」

零は溜息を一つつき準戦闘態勢に入る。

「全員離れている。戦闘の余波がいく」

零の言葉に零とヴァーリ以外が離れた。

「行くわよ」

その言葉と同時にヴァーリが高速で動く。

そしてあと数センチという所でヴァーリは停止した。

「流石白龍皇って言うべきか。100万本の触覚で漸く止まったか」

「くうっ！アルビオン！」

『Divide! Divide! Divide!』

白龍皇の宝玉から音声が聞こえ触覚の拘束が弱まる。

「今！」

拘束が弱まった瞬間ヴァーリは零に触れ、直ぐに距離を取る。

「触れたわ」

ヴァーリの目的は零に触れる事。

ヴァーリの神器……『白龍皇の光翼』セイクリッド・ギアは、触れた相手の力を

半減させ、それを己が力へと変換させる力を持つ。

『Divide』

「ああああああああああ！」

『なんといい力か!? ヴァーリ直ぐに放出しろ!』

零の力が強すぎて、ヴァーリは絶叫をあげる。アルビオンが力を吐き出すように言い、ヴァーリは奪った力をそのまま吐き出した。

「はああああああ……まさか素の力がこんなに強力なんて……。凄く燃えるわ」

ヴァーリは絶望するどころか笑みを浮べる。

「次はこつちから行くぞ、ドライグ」

『Boost! Boost! Boost!』

裏のチャンネルを使い3回増した。

「様子見た。5連釘パンチ！」ドドドドドン

「ツ!!」

釘パンチの衝撃で鎧の一部が破壊される。

「ぐふ……一発のパンチで5回の攻撃なんてやるわね」

「まだやるか?」

「当然よ。私を止めたかったら戦闘不能にすることね」

「はあ……」

零が続けるか聞くとヴァーリはそう答えた。

「やるな魔訶零。まさか素の状態バランス・ブレイクで禁手化のヴァーリを圧倒するとわな」

零とヴァーリの戦いを見ながらアザゼルがそう言う。

「アザゼル先程彼女は、過去現在未来最強と言いましたが、恐らく彼もそうでしょう」

「そうだろうね」

ミカエルがいいサーゼクスも同意した。

「はあ！」

ヴァーリが波動弾を撃ちだす。

「30万本スーパーストライ返し」

それを30万本の触覚で返す。

ヴァーリは直ぐ回避するが、零はジェットボイスで背後に回る。

「音速10連ネイルガン！」

「!!ツツ!!」

音速のパンチがヴァーリの鎧を砕く。

「うぐ……それも転生の力なの？」

「ああ。さっきの釘パンチより強力だろ？そろそろ限界じゃないのか？」

「冗談。まだまだいけるわよ!!」

ヴァーリは益々笑みを浮べる。

「どうしたものか……」

零はどうやってこの戦いをやめるか考えていると、零の視界にある物が目にとまる。

「なあドライグ、セイクリッド・ギア 神器は思いに応え進化するんだよな？」

『ああ、そうだが、それがどうした？』

零が聞くとドライグは頷いた。

零は足元に転がっている『パニシング・ドラゴン 白い龍』の宝玉を拾った。

「これは白龍皇の力が宿っているか？」

『ああ僅かだがな』

「十分だ。俺の考えを伝える、やれるか？」

『……相棒随分危険な事を考えているな』

「裕斗が聖魔刀で出来たんだ、やれない事はないだろ？」

『おもしろい！覚悟はあるか？』

「勿論だ2人で乗り越えるぞ」

『フハハハハハツツ！ああならば俺も覚悟を決めよう！正気の沙汰ではないが、我は力の塊と称された赤き龍の帝王！行くぞ相棒！否ツ！魔訶零ツツ！』

「応！」

「何をするつもり？」

ヴァーリが興味深そうに訊いてくる。

「まずは下準備だ禁手化」
フランス・ブレイク

『 Welsh Dragon Balance Breaker !!!!!! 』
ウェルシュドラゴン バランスブレイカー

零は赤龍帝の鎧に覆われた。

『 白い龍 』！アルビオン！ヴァーリ！もうぞ、お前達の力！』
パニシング・ドラゴン

零は右手の甲にある赤龍帝の宝玉を割り、そこに先程拾った
『 白い龍 』の宝玉をはめ込んだ。

右手から白銀のオーラが発生し零の右半分を包み込んだ。瞬間宝
玉を埋め込んだ右手から激痛が全身に伝わる。

「ぐううううううううう!!」

「！私の力を取り込む気？」

零のやろうとしている事に気付き、ヴァーリが驚いた様子を見せ
る。

『無謀なことを。ドライグよ、我等は相反する存在だ。それは自滅行
為に他ならない。こんなことでお前は消滅するつもりなのか？』

『ぐおおおおおツツ！アルビオンよ！お前は相変わらず頭が固いも
のだ。我等は長きに亘り、人に宿り、争い続けてきた！毎回毎回同じ
事の繰り返しだった！』

『そうだドライグ。それが我等の運命。お互いの宿主が違っても、戦
い方だけは同じだ。お前が力を上げ、私が力を奪う。神器をうま
くつかいこなしたほうがトドメをさしておわりとなる。今までもこ
れからも』

アルビオンの言葉にドライグは不敵な笑みを向ける。

『俺はこの宿主、魔訶零と出会って1つ学んだ。何事も貫き通せば可
能になるとな！』

「応えろおおお!!」

『 Vanishing Dragon Power istaken!!! 』
パニシングドラゴンパワーイステイク

零の右手がまばゆい白い光に包まれ、真っ白なオーラが右腕を包む
と、右手には白い籠手が出現していた。

『 白龍皇の籠手 』ってところか？』
ダイバイディング・ギア

赤い鎧のなかで右腕の肘から先だけが白くなっていた。

『あり得ん！こんなことはあり得まい！』

アルビオンが驚愕の声を出していた。

「いや可能性はあった。仲間が聖と魔の融合をして聖魔刀を創り出していたからな。システムエラーを利用したのさ」

「おもしろいわ。なら私もそれに答えるわ！」

そう言うのと腕を大きく広げ、光の翼も巨大に伸びていく。

『Half Dimension』

宝玉の音声と共に眩いオーラに包まれたヴァーリが眼下に広がる木々へ手を向ける。

グバンツ！

木々が一瞬で半分の太さになる。

グババババンツ！

更に周囲の木々が圧縮されるように半分になっていく。

「これは中々ヤバそうだな。ドライグ！」

『承知！』

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost!!』

零の周囲が弾け飛び、零の全身はとんでもなく巨大な龍のオーラに包まれた。

『行くぞ』

零は裏のチャンネルも、ジェットボイスも使わずヴァーリを捕まえる。

「食らいなポイズン20連ネイルガン！」

『Divide!!』

繰り出した右腕のポイズンネイルガンが当たると同時に、移植したばかりの白龍皇の力が発動し、ヴァーリを覆うオーラが激減した。

「ぐふっ！」

「攻撃に少し毒が混じっている。ああ死ぬような毒ではなく動けなく毒だがなさあどうする？」

「面白い。本当に面白いわ」

『ヴァーリ、奴の半減の力に対する解析は済んだ。こちらの力の制御

方法と照らし合わせれば対処できる』

「まあ元々はそちらの力だからな」

零は冷静に言った。

「アルビオン、魔訶零になら白龍皇の『ジャガーノート・ドライブ覇 龍』を見せる価値があるんじゃない？」

『ヴァーリ今の状態での「ジャガーノート・ドライブ覇 龍」は危険だ』

「いいえやるわ、アルビオン。『我、目覚めるは、覇の理にー』』

『自重しろヴァーリッ！我が力に翻弄されるのがお前の本懐か!?!』

零が攻撃を仕掛ける前に、零とヴァーリの間に、三国志の武将が着ているような鎧を纏った男が割り込む。

「ヴァーリ、迎えに来たぜい」

気軽にヴァーリへ話しかける男性。

「美猴何しに来たの？」

「ヴァーリ時間だぜい。北の田舎^{アース}神族と一戦交えるから俺っちと一緒に帰ろうや」

「・・・そうもう時間なのね」

「何を勝手に話している。それにお前は誰だ？」

「闘戦勝仏の末裔だ」

零が突然現れた男に聞くと、アザゼルが答えた。

「西遊記の孫悟空か」

「正確に言うなら、孫悟空の力を受け継いだ猿の妖怪だ」

「俺っちは仏になった初代と違うんだぜい。自由気ままに生きるのさ。俺っちは美猴。よろしくな、赤龍帝」

美猴が棍を地面に突き立てると、地面に黒い闇が広がり、ヴァーリと美猴を捉えると、ずぶずぶと沈んでいく。

「魔訶零今度は最初から本気で戦いましょう」

それだけ言いヴァーリは美猴と共に闇の中に消えっていった。

駒王協定

ヴァーリと美猴が撤退した後、アザゼルが校庭に足を踏み入れた時、三大勢力の軍勢が入っていて、魔術師達を拘束していた。

校庭の中央に各勢力達集まる。

「・・・ヴァーリが迷惑をかけた」

まず最初にアザゼルがヴァーリの離反に謝罪した。

「・・・彼女は・・・」

「元々、力にのみ興味を注いでいた奴だ。結果から見れば、『ああ、成程』と納得はできる。だがそれを未然に防げなかったものは俺の過失だ」

アザゼルの瞳はどこか寂しげだ。ヴァーリとの間に、何かを感じているみたいだ。

ミカエルがサーゼクスとアザゼルの間に入る。

「さて、私は一度天界に戻り、和平の件と、『禍の団』カオス・ブリゲードについての対策を講じてきます」

「すまないな、今回のこのようなことになって。会談の場をセツティングした我々としては不甲斐なさを感じている」

「サーゼクス、そう責任を感じないで下さい。私としては三大勢力が平和の道を共に歩めることに喜んでいるのですよ？これで無益な争いも減るでしょう」

「ま、納得できない配下も出てくるだろうがな」

皮肉を言うアザゼル。

「それは仕方ありません。長年憎み合ってきたのですから。しかし、これからは少しずつでも変わっていくでしょう。問題は『禍の団』カオス・ブリゲードですけどね」

「それについては今後連携を取って話し合おう」

サーゼクスの案にアザゼルもミカエルも頷く。

「あー。ちよつといいいか？」

サーゼクス達と離れ電話していた零が声をかける。

「おやどうしたのかい零君？」

「オヤジから気になる報告がある」

「オヤジ？」

「零君の師匠の1人だよアザゼルちゃん☆」

「零君の師匠さんですか」

「ああ。オヤジが言うにはグルメアイランド美食の島の猛獣、正確には猛獣の一部が武器として出回っているみたいだ」

「!!!?」

零が一龍から聞いた報告を言うと、サーゼクス達は驚いた。

「例えばフリードもクラッシュタートルの防具をブルーって奴から貰ってたって言っていた。もしかしたら敵は禍カオス・ブリゲードの団だけじゃない可能性がある」

「因みにそのクラッシュタートルの捕獲レベルは？」

「捕獲レベルは60」

「まあまあ高いな……」

「問題は捕獲じゃない。誰が防具に加工したかだ」

「!成程。捕獲自体は強さがあればできるが、加工は知識がないと不可能という事だね」

「ああ。オヤジ達は今世界各国を回って、禍カオス・ブリゲードの団と暗躍している者達を探している」

「え?れ、レイ……達って……」

「アカシア、オヤジ、次郎、三虎、セツ婆、珍師範、千代さんの7人が動いている」

『『うわあ~~~~』』

リアス眷属のゼノヴィアとギヤスパー以外は珍師範、千代。それに次郎の強さを知っているのです、その相手をしないとイケない敵に同情した。

「なんだお前達そんな、同情的な溜息をついて?」

「アザゼル……様。敵が相手にするのはブーステッド・ギア赤龍帝の籠手なしのレイと同等、それ以上の強さを持つ7人ですよ?」

「……それは相手が可哀そうだな」

アザゼルがリアス達が同情している理由を知り、自身も敵に同情し

た。

「なにか分かれば報告する」

「ありがとう零君。それでなんだが、我々と同盟を組んでくれないか？」

「俺もだ」

「私もお願いします」

零が何かあれば報告をしようと言っていると、サーゼクスが礼を言い同盟を持ちかけてきた。サーゼクスに続き、アザゼルもミカエルも言う。

「ああいいぜ」

こうして三大勢力と美食の島の同盟が結ばれた。

グルメアイランド

ミカエルが一度天界に戻る前に、零はゼノヴィアが祈る時ダメージを無くすよう願うと、ミカエルは了承した。

その事にゼノヴィアは零に礼を言った。

更に佑斗が聖魔刀を与える代わりに、聖剣研究の被害者をださないよう約束もした。

「ミカエル、ヴァルハラの中への説明はお前がしておけよ。下手にオーデインに動かれても困るからな。あと、須弥山にも今回の事を伝えておかないと煩そうだ」

「ええ、墮天使の総督と魔王が説明しても説得力がないでしょうから、私が伝えておきます。『神』への報告は慣れてますから」

アザゼルにそう言うのとミカエルは大勢の部下を連れて、天に飛んで行った。

「俺は和平を選ぶ。墮天使は今後一切天使と悪魔とは争わない。不服な奴は去ってもいい。だが、次に会う時は遠慮なく殺す。ついてきたい者だけ俺についてこい！」

アザゼルが墮天使の軍勢を前に言い放つ。

『『我らが命、滅びのその時までアザゼル総督のためにツツ！』』』

怒号となった部下達の忠誠。アザゼルはそれを見て「ありがとう」と小さく礼を言った。

アザゼル自分の軍勢に指示を出すと、魔法陣を展開させて墮天使達
が帰って行く。

悪魔の軍勢も同様に魔法陣から転送していつてる。

「後始末は、サーゼクスに任せる。俺は疲れた、帰るぞ」

そう言いアザゼルが帰って行った。

西暦20××年7月

天界代表天使長ミカエル、墮天使中枢組織『神の子を見張る者』総
督アザゼル、冥界代表魔王サーゼクス・ルシファア、三大勢力各代表
のもと、和平協定が調印された。

以降、三大勢力の争いは禁止事項とされ、協調体制へ。この和平協
定は舞台になった零達の学園から名を採って「駒王協定」と称される
ことになった。

また、三大勢力は美食の島グルメアイランドとの同盟を結ぶ。